

WebSAM DeploymentManager Ver6.6

リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編

—第 1 版—

目次

はじめに.....	3
対象読者と目的	3
本書の構成	3
DeploymentManagerマニュアルの表記規則	3
1. 保守	4
1.1. 管理サーバのIPアドレス変更手順	4
1.2. データベースサーバのIPアドレス変更手順	4
1.3. 管理対象マシンのIPアドレス変更手順	7
1.4. データバックアップ計画	7
1.4.1. データバックアップ手順	7
1.4.2. データ復旧手順	10
1.5. シナリオ移行手順	12
1.6. DPMで使用するポート変更手順	12
1.7. データベース移行手順	14
2. 注意事項	17
2.1. 装置/ストレージの注意事項	17
2.1.1. 機種対応モジュール	17
2.2. 管理サーバ、および管理対象マシンのコンピュータ名(ホスト名)を変更する場合の注意事項	17
2.3. 管理サーバ、および管理対象マシンのOSのユーザ名/パスワードを変更する場合の注意事項	17
2.4. OSクリアインストールに関する注意事項	18
3. トラブルシューティング	20
3.1. Webコンソール	20
3.2. 管理サーバ	26
3.3. 管理対象マシン	28
3.4. シナリオ	30
3.5. シナリオ実行	31
3.5.1. 全般	31
3.5.2. Linuxインストールパラメータファイルの作成	39
3.5.3. ディスク複製OSインストール	40
3.5.4. OSクリアインストール	44
3.5.5. サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストール	46
3.5.6. バックアップ/リストア/ディスク構成チェック	50
3.5.7. BIOS/ファームウェア用フロッピーディスクのイメージ配信	62
3.6. 管理対象マシンの登録	63
3.7. 自動更新	64
3.8. 自動ダウンロード	69
3.9. 電源ON	71
3.10. スケジュール管理	71
3.11. マシン情報インポート/エクスポート	72
3.12. ネットワーク設定	72
3.13. DHCPサーバを使用しない場合の運用	74
3.14. 管理サーバを使用せずにリストア(ローカルリストア)する	77
3.15. PackageDescriber	78
3.16. 障害発生時の情報採取	79
付録 A サービス一覧	82
サービスの開始、停止方法と順序	86

付録 B	イベントログ.....	87
付録 C	エラー情報.....	87
付録 D	ネットワークポートとプロトコル一覧.....	88
付録 E	DPMが出力するログ.....	96
付録 F	各コンポーネントのバージョン確認方法.....	102
付録 G	用語集.....	103
付録 H	改版履歴.....	105

はじめに

対象読者と目的

「リファレンスガイド 注意事項、トラブルシューティング編」は、WebSAM DeploymentManager(以下、DPM)のメンテナンス関連情報、およびトラブルシューティングについて説明します。

本書の構成

- ・ 1 「保守」: DPMの保守情報について説明します。
- ・ 2 「注意事項」: DPMに関する各種注意事項を説明します。
- ・ 3 「トラブルシューティング」: DPMのエラー情報に対する対処方法を説明します。

付録

- ・ 付録 A 「サービス一覧」
- ・ 付録 B 「イベントログ」
- ・ 付録 C 「エラー情報」
- ・ 付録 D 「ネットワークポートとプロトコル一覧」
- ・ 付録 E 「DPMが出力するログ」
- ・ 付録 F 「各コンポーネントのバージョン確認方法」
- ・ 付録 G 「用語集」
- ・ 付録 H 「改版履歴」

DeploymentManager マニュアルの表記規則

「ファーストステップガイド DeploymentManagerマニュアルの表記規則」を参照してください。

1. 保守

本章では、DPMの保守に関する情報について記載します。

1.1. 管理サーバの IP アドレス変更手順

DPMの運用中に、DPMサーバをインストールしている管理サーバ自身のIPアドレスを変更する手順について説明します。

注:

- 手順どおりに行わなかった場合は、DPMサーバが正常に動作しません。IPアドレス変更と同時にネットワーク構成も変更する場合については、「リファレンスガイド Webコンソール編 3.5.1 マシングループ編集」を参照して、各グループの「ネットワーク設定」も変更してください。

- (1) 管理サーバに管理者権限を持つユーザでログインします。
- (2) DPM の操作(以下)がすべて完了/終了していることを確認してください。
 - ・ 管理対象マシンに対して実施している操作(シナリオ実行、自動更新、ファイル配信、ファイル実行、ファイル削除、「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得)が完了していること。
 - ・ Web コンソール、DPM の各種ツール類を終了していること。
- (3) 管理サーバの IP アドレスを変更します。
- (4) 管理サーバを再起動してください。
- (5) Web コンソールの「管理」ビュー→「DPM サーバ」アイコン→「詳細設定」画面→「全般」タブの「IP アドレス」で「ANY」以外を選択していた場合は、DPM サーバが使用する IP アドレスを正しく選択し直し、「OK」ボタンをクリックします。
- (6) 管理対象マシンを再起動してください。

1.2. データベースサーバの IP アドレス変更手順

DPMの運用中に、データベースサーバのIPアドレスを変更する手順について説明します。

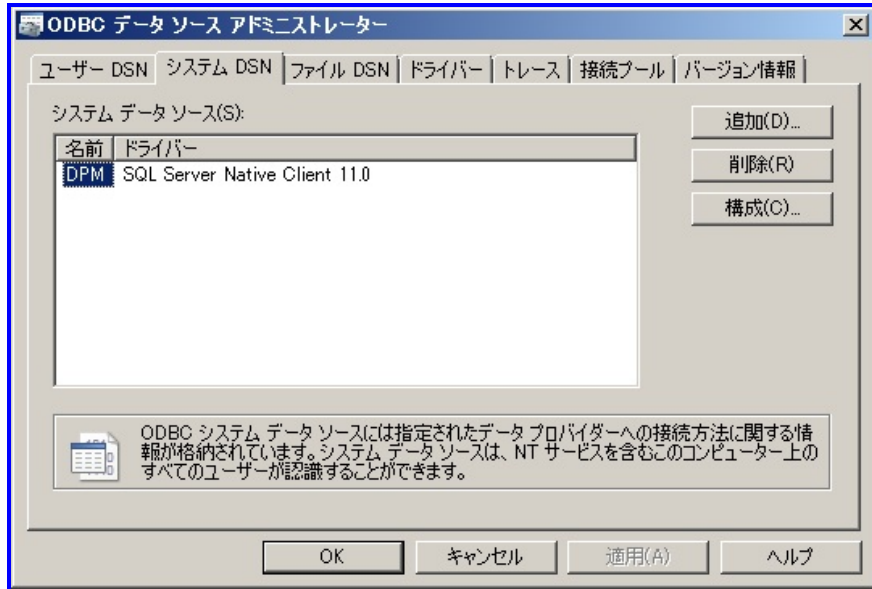
- (1) 管理サーバに管理者権限を持つユーザでログインします。
- (2) DPM の操作(以下)がすべて完了/終了していることを確認してください。
 - ・ 管理対象マシンに対して実施している操作(シナリオ実行、自動更新、ファイル配信、ファイル実行、ファイル削除、「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得)が完了していること。
 - ・ Web コンソール、DPM の各種ツール類を終了していること。
- (3) 管理サーバ上で、「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「DeploymentManager」で始まる名前のサービスをすべて停止します。
- (4) データベースサーバ上で IP アドレスを変更します。
- (5) 管理サーバ上で、レジストリエディタにて、以下のレジストリの「値のデータ」を、変更したデータベースサーバの IP アドレスに変更してください。
 - ・ キー: HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\DeploymentManager
 - ・ 値の名前: DBSrMPAddress

- (6) 「ODBC データ ソース アドミニストレーター」画面を起動します。
コマンドプロンプトで、以下のコマンドを実行してください。

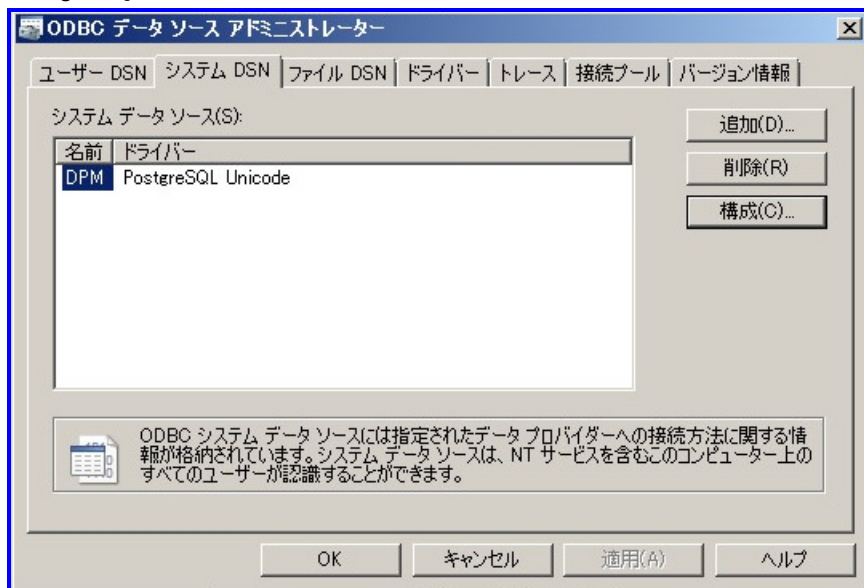
%WINDIR%\%SysWOW64%\odbcad32.exe

- (7) 「ODBC データ ソース アドミニストレーター」画面が表示されますので、「システム DSN」タブを選択した後に、システム データ ソースの一覧から「DPM」を選択し、「構成」ボタンをクリックします。

■ SQL Server を使用している場合



■ PostgreSQL を使用している場合



(8) 変更後のデータベースサーバの IP アドレスを設定します。

■ SQL Serverを使用している場合

以下の画面が表示されますので、「接続する SQL Server を選択してください。」の「サーバー」でデータベースサーバを選択し、「**変更後のデータベースサーバの IP アドレス,ポート¥インスタンス名**」に変更して、「完了」ボタンをクリックします。

■ PostgreSQLを使用している場合

以下の画面が表示されますので、「サーバー名」を「**変更後のデータベースサーバの IP アドレス**」に変更して、「保存」ボタンをクリックします。

(9) 管理サーバ上で、(3)で停止したサービスをすべて開始します。

1.3. 管理対象マシンの IP アドレス変更手順

管理対象マシンのIPアドレスを変更した場合は、自動的に管理サーバに通知されますので、特に操作する必要はありません。

ただし、管理サーバと管理対象マシンのIPアドレスを同じタイミングで変更した場合は通知されません。この場合は、「インストールガイド 3.3.2 DPMクライアントを手動アップグレードインストールする」の「■ インストール媒体によるDPMクライアントのアップグレード」を参照して、DPMクライアントがもつ管理サーバのIPアドレスの情報を再設定してください。

また、管理対象マシンにDPMクライアントをインストールしていない場合も通知されません。この場合は、「リファレンスガイド Webコンソール編 3.7.2. 管理対象マシン編集」を参照して、管理対象マシンのIPアドレスの情報を再設定してください。

なお、管理対象マシンのIPアドレス変更後は、バックアップシナリオの実行を推奨します。IPアドレス変更前のバックアップイメージをリストアすると、バックアップ採取時の状態に戻るため、IPアドレスも変更前のものとなります。

1.4. データバックアップ計画

1.4.1. データバックアップ手順

DPMを運用中にデータをバックアップする手順を説明します。

- (1) 管理サーバに管理者権限を持つユーザでログオンします。
- (2) DPMサーバをインストールした後にDPMサーバの詳細設定を変更している場合は、Webコンソールから「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」を選択し、表示された各設定値を控えてください。
- (3) DPMの操作(以下)がすべて完了/終了していることを確認してください。
 - ・ 管理対象マシンに対して実施している操作(シナリオ実行、自動更新、ファイル配信、ファイル実行、ファイル削除、「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得)が完了していること。
 - ・ Webコンソール、DPMの各種ツール類を終了していること。
- (4) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「DeploymentManager」で始まる名前のサービスをすべて停止します。
- (5) データのバックアップを行います。
以下の各種データをバックアップしてください。
 - ・ <DPMサーバのインストールフォルダ>%DataFile配下のすべてのファイル
 - ・ <DPMサーバのインストールフォルダ>%Linux配下のすべてのファイル
 - ・ <DPMサーバのインストールフォルダ>%Log配下のすべてのファイル
 - ・ <DPMサーバのインストールフォルダ>%WebServer%App_Data%Data
 - Encrypted.dat
 - DpmProfile.xml

注:

- DPMサーバのインストールフォルダのデフォルトは、「C:%Program Files (x86)%NEC%DeploymentManager」です。
-

- ・ イメージ格納用フォルダ配下のすべてのファイル

注:

- イメージ格納用フォルダは、Webコンソールの「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」→「全般」タブを選択し、「イメージ設定」の「イメージ格納用フォルダ」から確認してください。イメージ格納用フォルダのデフォルトは、「C:%Deploy」です。
-

- ・ バックアップイメージ格納用フォルダ配下のすべてのファイル

注:

- バックアップイメージ格納用フォルダは、Webコンソールの「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」→「全般」タブを選択し、「イメージ設定」の「バックアップイメージ格納用フォルダ」にて確認してください。バックアップイメージ格納用フォルダのデフォルトは、「C:¥DeployBackup」です。
-

- ・ TFTPルートフォルダ配下の以下のフォルダ/ファイル

- backup
- BehaviorOnError
- DOSFD
- EFI64
- EFI6C
- EFIIA32
- gpxelinux
- HW
- HW64
- hwinfo
- kernel
- NBP
- probe
- pxelinux
- pxelinux.cfg
- uefipxelinux
- nbprestar.ini
- Port.ini

注:

- 「インストレーションガイド 付録 F DPMサーバとNetvisorPro Vを同一マシン上に構築する」に記載の手順でDPMサーバと、NetvisorPro VのTFTPサービスの連携設定を行っている場合は、TFTPルートフォルダは、「NetvisorPro VのTFTPルートフォルダ」となります。
 - TFTPルートフォルダのデフォルトは、「C:¥Program Files (x86)¥NEC¥DeploymentManager¥PXE¥Images」です。
-

- ・ その他

手作業で変更したファイルやレジストリがある場合は、該当するファイル/レジストリ

(6) データベースをバックアップします。

コマンドプロンプトで以下のバックアップコマンドを入力し、バックアップファイル(DPM.bak)を採取します。

なお、Administrator以外のユーザでログオンしている場合は、コマンドプロンプトは管理者として実行してください。

■ SQL Serverを使用している場合

```
sqlcmd.exe -E -S localhost¥インスタンス名
BACKUP DATABASE DPM
TO DISK='DPM.bak'
WITH INIT
GO
```

例)

```
sqlcmd.exe -E -S localhost¥DPMDBI
BACKUP DATABASE DPM
TO DISK='DPM.bak'
WITH INIT
GO
```

注:

- データベース名は、「DPM」(固定)となります。
 - バックアップファイル(DPM.bak)は、以下のフォルダに作成されます。
 <Microsoft SQL Serverのインストールフォルダ>%Backup
 <Microsoft SQL Serverのインストールフォルダ>のデフォルトは、
 「C:%Program Files%Microsoft SQL Server%MSSQL13.インスタンス名%MSSQL」です。
-

■ PostgreSQLを使用している場合

(1) コマンドプロンプトを起動し、PostgreSQL インストールフォルダ(※)%binに移動します。

```
cd /d PostgreSQLインストールフォルダ(※)%bin
```

例)

```
cd /d C:%Program Files%PostgreSQL%9.5%bin
```

(2) コマンドプロンプトから、以下のコマンドを実行します。

```
pg_dump.exe -h 127.0.0.1 -U ユーザ名 -p ポート -F c -b -v -f "DPM.bak" データベース名
```

例)

```
pg_dump.exe -h 127.0.0.1 -U dpmuser -p 5432 -F c -b -v -f "DPM.bak" dpm
```

注:

- バックアップファイル(DPM.bak)は、以下のフォルダに作成されます。
 < PostgreSQLインストールフォルダ(※)>%bin
 ※<PostgreSQLインストールフォルダ>のデフォルトは、「C:%Program Files%PostgreSQL%9.5」です。
-

(7) レジストリデータのバックアップを行います。

- ・ DPMサーバのレジストリデータのバックアップ

コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行して、バックアップファイル(RegExportDPM.reg)を採取してください。

(以下のコマンドは、表記の都合上複数行で記載している箇所がありますが、1行で入力してください。)

```
regedit /e RegExportDPM.reg
```

```
"HKEY_LOCAL_MACHINE%SOFTWARE%Wow6432Node%NEC%DeploymentManager"
```

- ・ データベースのレジストリデータのバックアップ

コマンドプロンプトで以下のコマンドを実行して、バックアップファイル(RegExportDPMDB.reg)を採取してください。

なお、データベースサーバを構築している場合は、データベースサーバにデータベースを構築したユーザでログインして、採取してください。

(以下のコマンドは、表記の都合上複数行で記載していますが、1行で入力してください。)

- OSがx64の場合:

```
regedit /e RegExportDPMDB.reg
```

```
"HKEY_LOCAL_MACHINE%SOFTWARE%Wow6432Node%NEC%DeploymentManager_DB"
```

- OSがx86の場合:

```
regedit /e RegExportDPMDB.reg
```

```
"HKEY_LOCAL_MACHINE%SOFTWARE%NEC%DeploymentManager_DB"
```

注:

- PostgreSQLを使用している場合、データベースのレジストリデータのバックアップは不要です。
 - バックアップファイル(RegExportDPM.reg、RegExportDPMDB.reg)は、コマンドを実行したフォルダに作成されます。
-

(8) (4)で停止したサービスをすべて開始します。

以上で、DPMの運用時に更新されるデータのバックアップは完了です。

1.4.2. データ復旧手順

「1.4.1 データバックアップ手順」でバックアップしたデータを以下の手順に沿って復旧してください。

(1) 管理サーバに管理者権限を持つユーザでログオンします。

注:

- DPMサーバと同一マシン上にデータベースを構築する場合は、Administratorでログオンして、DPMサーバをインストールすることを推奨します。Administrator以外の管理者権限を持つユーザでDPMサーバをインストールした場合は、DPMサーバと同一マシン上にインストールされるイメージビルダを使用する際に管理者として実行する必要があります。

(2) DPMサーバのインストールと、詳細設定を行います。

・ DPMサーバのインストールから行う

以下の内容を参照して、DPMサーバのインストール、および詳細設定を行ってください。

- インストレーションガイド

- DPMサーバをインストールした際に控えておいた各設定項目

ただし、DPMサーバのインストールの際に表示される「詳細設定」画面の設定については、「1.4.1 データバックアップ手順」の(2)で控えた内容があれば、その内容を入力してください。

・ データ復旧のみ行う(既にDPMサーバをインストール済み)

Webコンソールの「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」に、「1.4.1 データバックアップ手順」の(2)で控えた内容を設定してください。

なお、DPMサーバをインストールした後に詳細設定を変更していない場合は、DPMサーバをインストールした際に控えておいた内容を設定してください。

(3) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「DeploymentManager」という名前で始まるサービスをすべて停止します。

(4) 「1.4.1 データバックアップ手順」の(5)で採取したデータのバックアップを、バックアップ時と同じフォルダ/ファイルパスに上書きします。

また、「1.4.1 データバックアップ手順」の(5)の「その他」で控えた内容がある場合は、控えた内容を設定してください。

(5) 「1.4.1 データバックアップ手順」の(6)で採取したデータベースのバックアップを、バックアップ時と同じフォルダパスにコピーします。

なお、データベースサーバを構築している場合は、データベースサーバにデータベースを構築したユーザでログオンして、行ってください。

(6) データベースの設定を確認します。(SQL Serverを使用している場合)

なお、データベースサーバを構築している場合は、データベースサーバにデータベースを構築したユーザでログオンして、行ってください。

1) エクスプローラなどから、DPM.bakのプロパティを表示して、「セキュリティ」タブで「MSSQL\$**インスタンス名**」で始まるユーザが存在するかを確認します。

2) 「詳細設定」タブをクリックして、1)で「MSSQL\$**インスタンス名**」で始まるユーザが存在した場合は、「このオブジェクトの親からの継承可能なアクセス許可を含める」にチェックが入っているかを確認します。

1)で、「MSSQL\$**インスタンス名**」で始まるユーザが存在しない場合は、「このオブジェクトの親からの継承可能なアクセス許可を含める」にチェックを入れます。(この項目にチェックを入れると、「セキュリティ」タブに「MSSQL\$**インスタンス名**」から始まるユーザが追加されます。)

(7) コマンドプロンプトを起動して、以下のコマンドを実行します。

なお、Administrator以外のユーザでログオンしている場合は、コマンドプロンプトは管理者として実行してください。

■ SQL Serverを使用している場合

```
sqlcmd.exe -E -S localhost¥インスタンス名  
RESTORE DATABASE DPM  
FROM DISK = 'DPM.bak'  
WITH REPLACE  
GO
```

例)

```
sqlcmd.exe -E -S localhost¥DPMDBI  
RESTORE DATABASE DPM  
FROM DISK = 'DPM.bak'  
WITH REPLACE  
GO
```

■ PostgreSQLを使用している場合

(1) コマンドプロンプトを起動し、PostgreSQL インストールフォルダ (※)¥binに移動します。

```
cd /d PostgreSQLインストールフォルダ(※)¥bin
```

※ デフォルトは「C:¥Program Files¥PostgreSQL¥9.5」です。

例)

```
cd /d C:¥Program Files¥PostgreSQL¥9.5¥bin
```

(2) コマンドプロンプトから、以下のコマンドを実行します。

```
pg_restore.exe -h 127.0.0.1 -U ユーザ名 -p ポート -d データベース名 -v "DPM.bak"
```

例)

```
pg_restore.exe -h 127.0.0.1 -U dpmuser -p 5432 -d dpm -v "DPM.bak"
```

(8) 「1.4.1 データバックアップ手順」の(7)で採取したレジストリデータのバックアップファイルを、適用(エクスプローラからダブルクリック)します。

(9) (3)で停止したサービスをすべて開始します。

(10) コマンドプロンプトを起動し、以下のコマンドを実行します。

```
iisreset /restart
```

以上で、DPMのデータ復旧は完了です。

1.5. シナリオ移行手順

本章では、シナリオ移行ツールを使用して、シナリオを別サーバに移行する手順を説明します。

- シナリオ移行ツールはDPMのインストール媒体の以下のフォルダに格納されています。
<インストール媒体>:\DPM\TOOLS\ScenarioMigration
ファイル名は以下のとおりです。
 - ・ ScenarioMigration.exe
 - ・ ScenarioMigration50-63.exe(DPM6.3x以前の環境でエクスポートに使用)
- 以下のシナリオタイプをサポートします。
 - ・ バックアップシナリオ
 - ・ リストアシナリオ
 - ・ ディスク構成チェックシナリオ
- シナリオで指定しているイメージファイルやパラメータファイルは、手動で移行する必要があります。
- エクスポート機能はDPM5.0以降で使用できます。
- インポート機能はDPM6.6以降で使用できます。
- ScenarioMigration50-63.exeを実行する場合は、事前にVisual C++ 2008のランタイムを用意する必要があります。

■ シナリオエクスポート手順

シナリオをエクスポートする管理サーバで以下を実行します。

- (1) コマンドプロンプトを起動します。
- (2) 以下のコマンドを実行します。
DPM6.4以降の場合
ScenarioMigration.exe /E "エクスポート先のフォルダ"
DPM5.0～DPM6.3xの場合
ScenarioMigration50-63.exe /E "エクスポート先のフォルダ"
ツールのファイルは<インストール媒体>のままでも実行できます。

注:

- ユーザアカウントの権限に制限はありません。
-

■ シナリオインポート手順

シナリオをインポートする管理サーバで以下を実行します。

- (1) コマンドプロンプトを起動します。
- (2) 以下のコマンドを実行します。
ScenarioMigration.exe /I "インポート元のフォルダ"
ツールのファイルは<インストール媒体>のままでも実行できます。
- (3) 管理サーバを再起動します。

1.6. DPM で使用するポート変更手順

本章では、DPMで使用するポートの変更手順を説明します。

手順どおりに行わなかった場合は、管理サーバ/管理対象マシンが正常に動作しなくなります。

- 本章の手順に沿ってftsvc.exeで使用するポート(TCP:26508)を変更する場合は、イメージビルダ(リモートコンソール)の「接続設定」画面でも同じポートを指定してください。

- SQL Server(TCP:26512)およびPostgreSQL(TCP:5432)のポート番号を変更する場合は、DPMサーバを新規インストールする前に行ってください。それ以降は、変更できません。
- DPM Ver6.1より前のバージョンでは使用するポートのデフォルトが異なります。ポート番号の詳細については、「付録 D ネットワークポートとプロトコル一覧」を参照してください。
- DPMサーバを新規インストールした場合は、DPM Ver6.1より前のDPMクライアントを自動アップグレードインストールできません。

以下のいずれかを行ってください。

- ・ DPMサーバを新規インストールする前に、本章の手順に沿ってPort.iniに旧環境で使用していたポートを設定してください。
- ・ DPMサーバを新規インストールした後に、「インストレーションガイド 3.3.2 DPMクライアントを手動アップグレードインストールする」を参照して、シナリオによるDPMクライアントのアップグレードインストールを行ってください。(シナリオ完了まで20分程度かかります。)
- DPM Ver6.1より前のバージョンで作成したディスク複製OSインストール用のマスタイメージは、DPMサーバを新規インストールした環境では使用できません。マスタイメージを再作成するか、DPMサーバを新規インストールする前に本章に記載の手順に沿ってPort.iniにアップグレードインストール前に使用していたポートを設定してください。

■ DPMサーバを新規インストール前にポートを変更する手順

- (1) 管理サーバに管理者権限を持つユーザでログインします。
- (2) 以下のファイルを%SystemDrive%(デフォルトC:)¥DPMPort¥にコピーします。
<インストール媒体>:¥DPM¥Setup¥DPM¥Port.ini
- (3) コピーしたファイルを編集し、使用するポートを指定して保存します。
- (4) DPMサーバを新規インストールします。

注:

- アップグレードインストールを行った場合は、アップグレードインストール前に使用していたポートを引き継ぎます。
-

■ DPMサーバをインストール後にポートを変更する手順

以下の手順を管理サーバで実施します。

- (1) 管理サーバに管理者権限を持つユーザでログインします。
- (2) DPM の操作(以下)がすべて完了/終了していることを確認してください。
 - ・ 管理対象マシンに対して実施している操作(シナリオ実行、自動更新、ファイル配信、ファイル実行、ファイル削除、「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得)が完了していること。
 - ・ Web コンソール、DPM の各種ツール類を終了していること。
- (3) <TFTP ルートフォルダ>¥Port.ini を編集します。
 - TFTP ルートフォルダのデフォルトは、「C:¥Program Files (x86)¥NEC¥DeploymentManager¥PXE¥Images」です。
 - Web サービス用ポート(デフォルト: 26500)を変更する場合は、<TFTP ルートフォルダ>¥WebServer¥App_Data¥Config¥MgrServerList.xml の以下の行を修正してください。
<Port>変更するポート</Port>
- (4) 管理サーバを再起動します。
- (5) 管理対象マシンを再起動します。

1.7. データベース移行手順

本章では、データベース移行手順を説明します。

- 本手順はMicrosoft SQL Server 2012以降をサポートします。また、PostgreSQLはサポートしません。
- 手順どおりに行わなかった場合は、管理サーバが正常に動作しなくなります。
- 移行先ではSQL Serverのインストールパス/アーキテクチャ/インスタンス名などを移行元環境と同じ設定にしてインストールを行ってください。
- 「SQL認証」を指定する場合は、SQLインスタンスの認証モードは「混合モード」を設定してください。
- データベース移行先を、管理サーバと別のマシンで構築している場合に、「Windows認証」を指定する際は、管理サーバマシンとデータベースサーバの両方ともドメインに参加している必要があります。
- Microsoft SQL Server 2012 Native Clientが既にインストールされている場合は、SQL Serverのインストールに失敗する場合があります。Microsoft SQL Server 2012 Native Clientをアンインストールして、SQL Serverを再インストールしてください。

- (1) 管理サーバに管理者権限を持つユーザでログオンします。
- (2) DPM の操作(以下)がすべて完了/終了していることを確認してください。
 - ・ 管理対象マシンに対して実施している操作(シナリオ実行、自動更新、ファイル配信、ファイル実行、ファイル削除、「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得)が完了していること。
 - ・ Web コンソール、DPM の各種ツール類を終了していること。
- (3) データベース移行先のマシンで SQL Server インスタンスを構築します。
移行先のデータベース認証に「SQL認証」を指定する場合は、手順の詳細については、「インストレーションガイド 付録 D データベースサーバにSQL Serverのデータベースを構築する」の「■データベースを構築する」を参照してください。
移行先のデータベース認証に「Windows認証」を指定する場合は、手順の詳細については、「インストレーションガイド 付録 D データベースサーバにSQL Serverのデータベースを構築する」の「■データベースを構築する」の(1)～(6)、(8)～(13)を参照してください。
- (4) DB データをデータベース移行元からデータベース移行先へ移行します。
手順の詳細については、「1.4.1. データバックアップ手順」の(6)と「1.4.2. データ復旧手順」の(6)(7)を参照してください。
- (5) データベース移行先で、アクセスするドメインユーザを作成します。
データベース移行先と管理サーバがドメインに参加している場合は、コマンドプロンプトを起動し以下のコマンドを実行してください。それ以外は、(8)へ進んでください。

(以下のコマンドは、表記の都合上複数行で記載している箇所がありますが、1行で入力してください。)

```
C:¥>sqlcmd -E -S .¥ インスタンス名
1> CREATE LOGIN [ドメイン名¥DPMサーバのユーザ名] FROM WINDOWS
    WITH DEFAULT_DATABASE=DPM
2> go
1> EXEC master..sp_addsrvrolemember @loginame = N'ドメイン名¥DPMサーバのユーザ名',
    @rolename = N'sysadmin'
2> go
1> CREATE LOGIN [ドメイン名¥DPMサーバのコンピュータ名$] FROM WINDOWS
    WITH DEFAULT_DATABASE=DPM
2> go
1> EXEC master..sp_addsrvrolemember @loginame = N'ドメイン名¥DPMサーバのコンピュータ名$',
    @rolename = N'sysadmin'
2> go
1> exit
```

例)

```
C:¥>sqlcmd -E -S .¥DPMDBI
1> CREATE LOGIN [MCIPT¥test2] FROM WINDOWS WITH DEFAULT_DATABASE=DPM
2> go
1> EXEC master..sp_addsrvrolemember @loginame = N'MCIPT¥test2', @rolename = N'sysadmin'
2> go
1> CREATE LOGIN [MCIPT¥computer2$] FROM WINDOWS WITH DEFAULT_DATABASE=DPM
2> go
1> EXEC master..sp_addsrvrolemember @loginame = N'MCIPT¥computer2$', @rolename = N'sysadmin'
2> go
1> exit
```

(6) データベース移行先の「SQL Server Browser」サービスの「スタートアップの種類」を「自動」に変更した後、サービスを開始します。

(7) データベース移行先で、Windows ファイアウォールを設定し、以下のプログラムの通信を許可します。

・プログラム : sqlbrowser.exe

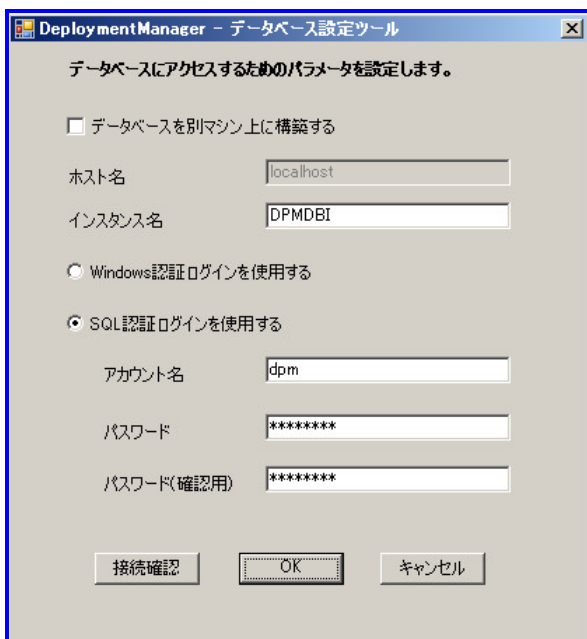
注:

- sqlbrowser.exe のインストールパスのデフォルトは、以下です。
C:¥Program Files (x86)¥Microsoft SQL Server¥90¥Shared

(8) 管理サーバで DPM サーバをインストールしたフォルダに移動し、データベース設定ツール(DPMDBIConfig.exe)を実行します。

注:

- DPM サーバのインストールフォルダのデフォルトは、以下です。
C:¥Program Files (x86)¥NEC¥DeploymentManager



画面が表示された後に、各項目を設定し、「接続確認」ボタンをクリックします。「接続が成功しました」というメッセージが出た後、「OK」ボタンをクリックします。

「データベースの設定が完了しました」というメッセージが表示されます。

ツールを閉じる場合は、「キャンセル」ボタンをクリックしてください。

- 画面でのインスタンス名、アカウント名、パスワードについては、(3)で構築されているデータベース移行先の設定値と同じ値を設定してください。
- データベース移行先を、管理サーバと別のマシンで構築している場合は、「データベースを別マシン上に構築する」を選び、「ホスト名」にデータベース移行先のホスト名またはIPアドレスを入力してください。
 - ・ホスト名を用いてデータベース接続する場合は、データベース移行先のWindows ファイアウォールの受信の

規則で「ネットワーク探索(NB名受信)」を有効にしてください。

- ・ IPアドレスを用いてデータベース接続する場合は、DNSの逆引きができるように設定してください。
設定を行わない場合は、データベース接続や処理に時間がかかり、DPMサービスの起動に失敗する場合があります。

(9) 管理サーバでコマンドプロンプトを起動し以下のコマンドを実行してください。

(以下のコマンドは、表記の都合上複数行で記載している箇所がありますが、1行で入力してください。)

```
C:¥> "<DPM サーバのインストールフォルダ>%svcctrl.exe" -remove -c "apiserv.exe" "apiserv"
```

```
"DeploymentManager API Service"
```

```
C:¥> "<DPM サーバのインストールフォルダ>%svcctrl.exe" -remove -c "schwatch.exe" "schwatch"
```

```
"DeploymentManager Schedule Management"
```

```
C:¥> "<DPM サーバのインストールフォルダ>%apiserv.exe" /service
```

```
C:¥> "<DPM サーバのインストールフォルダ>%schwatch.exe" /install
```

(10) 以下のサービスを開始します。

- ・ DeploymentManager API Service

DeploymentManager Schedule Management は自動で開始されます。

(11) データベース移行元で SQL Server インスタンスをアンインストールします。

手順の詳細については、「インストレーションガイド 付録 D データベースサーバに SQL Server のデータベースを構築する」の「■データベースをアンインストールする」を参照してください。

2. 注意事項

本章では、DPMに関する各種注意事項を説明します。

2.1. 装置/ストレージの注意事項

2.1.1. 機種対応モジュール

機種対応モジュールとは、製品に標準で添付されているDeploy-OSで対応していない機種を管理対象マシンとするためのアップデートモジュールです。

機種対応モジュールについての注意事項は、以下の製品Webサイトで公開されているモジュール内の手順書に記載しています。

WebSAM DeploymentManager(<http://jpn.nec.com/websam/deploymentmanager/>)

→「動作環境」を選択

→「対応装置一覧」を選択

2.2. 管理サーバ、および管理対象マシンのコンピュータ名(ホスト名)を変更する場合の注意事項

管理サーバ、および管理対象マシンのOS上のコンピュータ名(ホスト名)は、任意のタイミングで変更できます。

WebコンソールのURLにホスト名を使用している場合は、管理サーバのコンピュータ名にあわせて変更してください。

管理対象マシンのコンピュータ名(ホスト名)を変更した場合は、コンピュータ名(ホスト名)変更前のバックアップイメージをリストアすると、バックアップ採取時の状態に戻るため、コンピュータ名(ホスト名)も変更前のものとなってしまいます。変更した後にバックアップすることを推奨します。

2.3. 管理サーバ、および管理対象マシンのOSのユーザ名/パスワードを変更する場合の注意事項

管理サーバおよび管理対象マシンともOSのユーザ名/パスワードを変更した場合は、以後の運用に影響はありません。

ただし、管理対象マシンのOSのユーザ名/パスワードを変更前のバックアップイメージをリストアすると、バックアップ採取時の状態に戻るため、ユーザ名/パスワードも変更前のものとなります。変更後の時点でバックアップすることを推奨します。

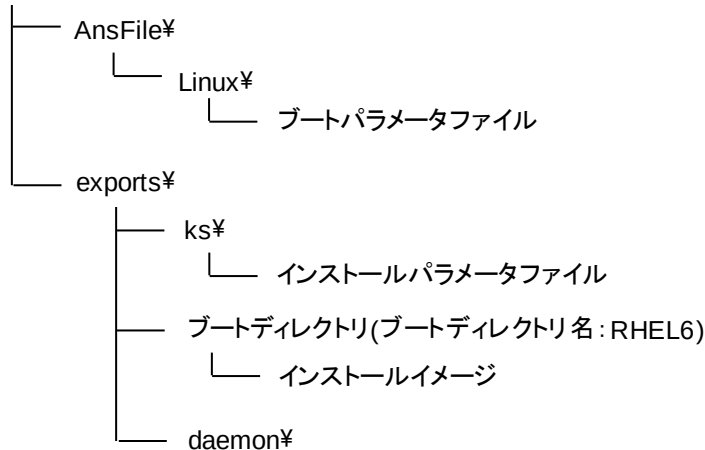
2.4. OS クリアインストールに関する注意事項

NFS サーバを構築できない場合は、管理サーバ上に FTP/HTTP サーバを構築することで Red Hat Enterprise Linux 6 の OS クリアインストールを行うことができます。

本章は、その際の注意事項について説明します。なお、イメージ格納用フォルダを以下の構成として説明します。

管理サーバ(IPアドレス: 192.168.0.1)

イメージ格納用フォルダ



- ・「オペレーションガイド 3.5.1 イメージを作成、登録する」の説明に沿ってイメージの作成、登録を行ってください。
なお、「オペレーションガイド 3.5.1.1 NFS サービスをセットアップする」については、以下に読み替えてください。

FTP/HTTPサーバの説明書などを参照の上、FTP/HTTPサーバを構築後、Webコンソールで設定した「イメージ格納用フォルダ」の下の"exports"フォルダをFTP/HTTPサーバの仮想ディレクトリに設定してください。

- ・「オペレーションガイド 3.5.2 シナリオを作成する」の手順を行う前に、以下を行ってください。
 - ブートパラメータファイルをテキストエディタなどで開き、以下例)を参考にして、使用している環境に合わせてファイルサーバの指定(下線部分)を修正してください。

例)

修正前: `append initrd= RHEL6/initrd.img ks=nfs:192.168.0.1:/exports/ks/ks.cfg ksdevice=eth0`

修正後:

- FTP サーバ

`append initrd= RHEL6/initrd.img ks=ftp://192.168.0.1/exports/ks/ks.cfg ksdevice=eth0`

- HTTP サーバ

`append initrd= RHEL6/initrd.img ks=http://192.168.0.1/exports/ks/ks.cfg ksdevice=eth0`

- インストールパラメータファイルをテキストエディタなどで開き、以下例)を参考にして、使用している環境に合わせてファイルサーバの指定(下線部分)を修正してください。

例)

修正前:

```
...
nfs --server 192.168.0.1 --dir /exports/RHEL6
...
#Mount /mnt/exports
mkdir /mnt
mkdir /mnt/exports
/bin/mount -o nolock -t nfs $NFSSERVER:/exports /mnt/exports
...
```

修正後:

- FTP サーバ

```
...  
url -url ftp://192.168.0.1/exports/RHEL6  
...  
#Mount /mnt/exports  
mkdir -p /mnt/exports/daemon/redhatal/ia32/  
cd /mnt/exports/daemon/redhatal/ia32/  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depagt  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depagtd  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depagtd.res  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depcancel  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depinst  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depinst.res  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depinst.sh  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/dpmversion.inf  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/GetBootServerIP  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/getinfo.sh  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/server.inf  
wget ftp://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/xdpmmsg  
...
```

- HTTP サーバ

```
...  
url -url http://192.168.0.1/exports/RHEL6  
...  
#Mount /mnt/exports  
mkdir -p /mnt/exports/daemon/redhatal/ia32/  
cd /mnt/exports/daemon/redhatal/ia32/  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/de pagt  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/de pagtd  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/de pagtd.res  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depcancel  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depinst  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depinst.res  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/depinst.sh  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/dpmversion.inf  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/GetBootServerIP  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/getinfo.sh  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/server.inf  
wget http://192.168.0.1/exports/daemon/redhatal/ia32/xdpmmsg  
...
```

- Red Hat Enterprise Linux 6 のインストール用 ISO ファイルをマウントして、ISO 内のすべての内容をブートディレクトリにコピーしてください。

3. トラブルシューティング

本章では、DPM のエラー情報に対する対処方法を説明します。

注:

- 最新の情報は、以下の製品 Web サイトから確認できます。
WebSAM DeploymentManager(<http://jpn.nec.com/websam/deploymentmanager/>)
-

3.1. Web コンソール

Q1

「管理対象マシン詳細」画面で「HotFix/アプリケーション」の「詳細」をクリックした時に表示される「HotFix/アプリケーション一覧」画面の項目が表示されない。

A1-1

管理対象マシンを管理するには、DPMサーバと同じバージョンのDPMクライアントが管理対象マシンにインストールされている必要があります。既にインストールされている場合は、再インストールしてください。インストール方法については、「インストレーションガイド 2.2 DPMクライアントをインストールする」を参照してください。

A1-2

管理対象マシンの「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「DeploymentManager Agent Service」、「DeploymentManager Remote Update Service Client」が起動しているか確認してください。

Q2

「管理対象マシン詳細」画面で「HotFix/アプリケーション」の「詳細」をクリックし、「HotFix/アプリケーション一覧」画面を表示すると、HotFix、またはアプリケーションが文字化けしている。

A2

管理対象マシンにJIS2004の文字を含むHotFix、またはアプリケーションがインストールされている場合に発生する可能性があります。DPMは、JIS2004に対応していないため表示できません。また、この現象は「HotFix/アプリケーション一覧」表示以外の機能には、影響ありません。

Q3

情報の最新化を行うと、「ソケットでエラーが発生しました。」という画面が表示される。または、詳細情報として以下のメッセージが表示されている。

「対象のコンピュータによって拒否されたため、接続できませんでした。管理サーバのIPアドレス:26500」

A3

管理サーバが停止している可能性があります。「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「付録 A サービス一覧」の「■DPMサーバ」に記載しているすべてのサービスが起動していることを確認してください。サービスが停止している場合は、停止しているサービスをすべて開始してください。また、サービスを開始した後に管理サーバへ再接続を行ってください。

Q4

WebブラウザからWebコンソールを起動すると、Webブラウザに「ページを表示できません」というエラーが表示される。

A4

以下のいずれかが考えられます。

- ・ Webコンソールを起動するためのURLが誤っている可能性があります。URLが正しいか確認してください。
- ・ DPMサーバのWebサイトが起動していない可能性があります。「スタート」メニューから「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を選択し、「Web サイト」が起動状態となっているか確認してください。

Q5

Web コンソールを起動すると以下のエラーが表示されて使用できません。

「HTTP エラー500.19 この構成セクションをこのパスで使用できません。」

A5

ASP.NETのインストールの時に、クラシックモードで動作するために必要なモジュール"IsapiModule"または"IsapiFilterModule"がインストールされていない可能性があります。

DeploymentManager では Web サーバとの通信はクラシックモードで行われるため上記モジュールは必要です。
"IsapiModule"、"IsapiFilterModule"がインストールされているかどうかの確認手順は以下となります。

[確認手順]

1. IIS マネージャを起動する。
2. ご使用のサーバを選択する。
3. 表示画面の「IIS」-「モジュール」を開く。
4. "IsapiModule"、"IsapiFilterModule"が存在するか確認する。

"IsapiModule"、"IsapiFilterModule"が存在しない場合は、以下の手順でモジュールの追加してください。

[追加手順]

1. IIS マネージャを起動する。
2. ご使用のサーバを選択する。
3. 表示画面の「IIS」-「モジュール」を開く。
4. 右側のメニュー「ネイティブモジュールの構成...」を選択する。
5. 表示されたダイアログから"IsapiModule"または"IsapiFilterModule"にチェックを入れ、「OK」を選択する。
6. IISを再起動する。

Q6

複数のウィンドウ/タブからWebコンソールへアクセスした場合は、Internet Explorerのセッション共有機能により、以下のような事象が発生する。

- ・ Webコンソールのユーザ権限が、最後にWebコンソールにログインしたユーザ権限と同じになる。
- ・ 最初に開いたウィンドウ/タブ内のページの切り替え、または表示件数の変更がエラーになる。

A6

Webコンソールの画面を複数開く場合は、新規セッションでInternet Explorerを起動してWebコンソールを開いてください。新規セッションとしてInternet Explorerを起動させるためには、既に起動済みのInternet Explorerの「ファイル」→「新規セッション」を選択してください。

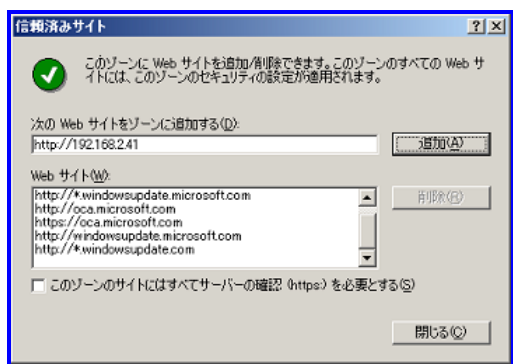
Q7
エラーメッセージの表示がおかしい。

A7
マシン名、またはグループ名などにHTMLのタグ(<XX>)を使用すると、エラーメッセージの表示の際にHTML構文と解釈し、不正な表示を行う場合がありますが、動作上問題はありません。

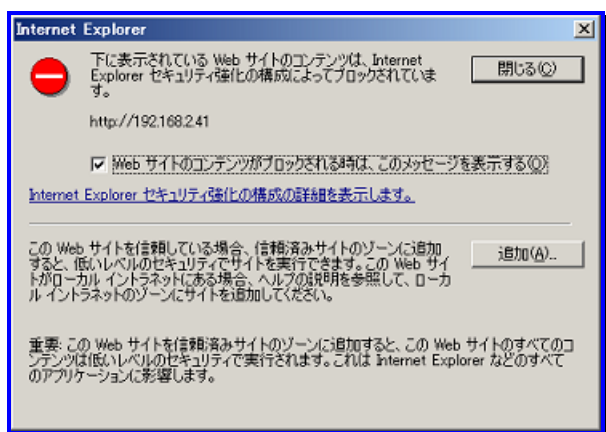
Q8
WebブラウザからWebコンソールを起動しても、Webブラウザに何も表示されない。

A8
Internet Explorerの「ツール」メニュー→「インターネットオプション」から、「セキュリティ」タブの信頼済みサイトを選択し、「サイト」をクリック後に管理サーバに接続するURLの追加を行ってください。

例)
管理サーバのIPが「192.168.2.41」の場合



Q9
Windows Server 2003/Windows Server 2003 R2上でWebコンソールを起動すると、以下のメッセージが表示される。



A9
表示されているURLに間違いがないことを確認し、「追加」をクリックしてWebサイトを「信頼済みサイトのゾーン」に追加してください。

Q10

以下のいずれかの操作を行ったが「ファイルのダウンロード」画面が表示されず、CSVファイルをダウンロードできない。

- ・ 監視ビュー→「シナリオ実行結果一覧」→「シナリオ実行結果一覧」画面にて「操作」メニューの「CSV形式で保存」をクリックする。
- ・ 監視ビュー→「自動更新結果一覧」→「自動更新結果一覧」画面にて「操作」メニューの「CSV形式で保存」をクリックする。
- ・ 運用ビュー→「マシン」→「グループ一覧」画面にて「設定」メニューの「マシン情報エクスポート」をクリックする。

A10

Internet Explorerのセキュリティ設定を確認してください。

Internet Explorerの「ツール」メニュー→「インターネットオプション」を選択し、「セキュリティ」タブの「信頼済みサイト」の「このゾーンのセキュリティレベル」の「レベルのカスタマイズ」ボタンをクリックして、以下の設定にしてください。

- ・ 「ダウンロード」-「ファイルのダウンロード」を「有効にする」に設定する。

Q11

Webコンソールを起動しようとしたが、画面に「Internet Explorer ではこのページは表示できません」と表示され、起動できない。

A11-1

Webサーバが起動していない可能性があります。「スタート」メニューから「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を選択し、「Default Web Site」が開始状態となっているか確認してください。

A11-2

IISの匿名認証が無効になっている可能性があります。以下のとおり、設定を変更してください。

- (1)「スタート」メニューから「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を選択します。
- (2)「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」画面が表示されますので、画面左側の「Default web Site」直下の「DPM」をクリックします。
- (3)画面中央の「IIS」で「認証」を選択して、画面右側の「操作」で「機能を開く」をクリックします。
- (4)画面中央の「認証」画面で「匿名認証」を選択して、画面右側の「操作」で「編集...」をクリックします。
- (5)「匿名認証資格情報の編集」画面が表示されますので、「特定のユーザ」にチェックが入っており、ユーザ名が「IUSR」となっていることを確認してください。もし、「IUSR」となっていない場合は、「設定」ボタンをクリックして、ユーザ名を「IUSR」に設定してください。
- (6)「匿名認証資格情報の編集」画面で「OK」をクリックして画面を閉じます。
- (7)「認証」画面で「匿名認証」を選択して、画面右側の「操作」で「有効にする」をクリックします。

Q12

Web コンソール操作時に以下の事象が発生する。

- ・ 画面遷移に時間がかかる。(数分～数十分)
- ・ 画面遷移の際に「未定義または NULL 参照のプロパティ'src'は取得できません。」と表示され画面が表示されない。
- ・ ボタン、メニューが表示されない。

A12

Internet Explorerの互換表示が無効になっている可能性があります。

アドレスバーに表示されている「互換表示」ボタンをクリックして有効にしてください。

なお、Internet Explorer 11は、Webコンソールの起動時に自動的にInternet Explorer 8 互換モードに設定されるため、明示的に互換モードを設定する必要はありません。

Q13

Webコンソールの画面(「管理対象マシン追加」画面や「シナリオ追加」画面など)を開いた際に、画面が文字化けしている。

A13

Internet Explorerの「エンコード」の「自動選択」をOFFにすることで回避できる可能性があります。

Internet Explorerの「表示」メニュー→「エンコード」→「自動選択」のチェックを外すことで、設定をOFFにできます。

Q14

シナリオの「バックアップ/リストア」タブでイメージファイルの「参照...」ボタンをクリックしても、ネットワークドライブや、USBハードディスクが表示されない。

A14

ドライブの表示はローカルディスクのみとなります。

ネットワークドライブやUSBハードディスクを指定する場合は、「イメージファイル」欄に直接、イメージファイルのパスを入力してください。

詳細については、「リファレンスガイド Webコンソール編 3.13.4 「バックアップ/リストア」タブ」を参照してください。

Q15

Webコンソールで、管理対象マシンのMACアドレスが表示されない。

A15-1

別のマシンへのLANボードの交換などで、一時的にMACアドレスが表示されない場合があります。

このような現象が発生した場合は、管理対象マシンを手動で再起動してください。再起動後も現象が回復しない場合は、Webコンソールから該当の管理対象マシンを削除して、再度登録してください。

※管理対象マシンのMACアドレスが表示されない場合は、下記の操作ができません。

- ・管理対象マシンへの自動更新時間設定
- ・電源状態の取得
- ・管理対象マシンの情報取得
- ・シナリオ実行
- ・電源ON
- ・シャットダウン

A15-2

管理対象マシンがLinux OSで、かつ複数のLANボードを搭載している場合は、操作中にMACアドレスが表示されない可能性があります。

このような場合は、該当の管理対象マシンが、新規マシングループに登録されている可能性があります。新規マシングループから該当する管理対象マシンを削除して、管理対象マシンのDPMクライアントを再起動してください。再起動後も現象が回復しない場合は、Webコンソールから該当の管理対象マシンを削除して、再度登録してください。

Q16

Webコンソールで画面を表示したまま一定時間が経過すると、次の操作時に「DeploymentManagerログイン」画面に戻る。

A16

Webコンソールでセッションタイムアウトが発生すると、「DeploymentManagerログイン」画面に戻ります。

ログインし直してください。

なお、タイムアウトまでの時間は、以下の手順で変更することもできます。

- 1) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「インターネット インフォメーションサービス (IIS) マネージャー」を選択します。

- 2) 「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャー」画面が表示されますので、画面左側の「アプリケーション プール」をクリックします。
- 3) 画面中央の「アプリケーション プール」で「ASP.NET v4.0 DeploymentManagerPool」を選択して、画面右側の「アプリケーション プール タスク」で「停止」をクリックします。
Windows Server 2012以降の場合は、「DeploymentManagerPool」を選択してください。
- 4) 画面左側の「Default Web Site」をクリックして、画面右側の「Web サイトの管理」で「停止」をクリックします。
- 5) 画面左側の「Default Web Site」直下の「DPM」をクリックして、画面中央の「ASP.NET」で「セッション状態」を選択して、画面右側の「操作」で「機能を開く」をクリックします。
- 6) 画面中央の「セッション状態」画面で「Cookie の設定」-「タイムアウト(分)(O):」(デフォルト20分)でタイムアウト値を指定して、画面右側の「操作」で「適用」をクリックします。
- 7) 画面左側の「Default Web Site」直下の「DPM」をクリックして、画面中央の「IIS」で「認証」を選択して、画面右側の「操作」で「機能を開く」をクリックします。
- 8) 画面中央の「認証」画面で「フォーム認証」を選択して、画面右側の「操作」で「編集...」をクリックします。
- 9) 「フォーム認証設定の編集」画面が表示されますので、「認証 Cookie のタイムアウト (分)(A)」(デフォルト30分)でタイムアウト値を指定して、「OK」ボタンをクリックします。
- 10) 画面左側の「アプリケーション プール」をクリックして、画面中央の「アプリケーション プール」で「ASP.NET v4.0 DeploymentManagerPool」を選択して、画面右側の「アプリケーション プールの編集」で「詳細設定...」をクリックします。
Windows Server 2012以降の場合は、「DeploymentManagerPool」を選択してください。
- 11) 「詳細設定」画面が表示されますので、以下の2項目にタイムアウト値を指定して、「OK」ボタンをクリックします。
 - ・ 「プロセスモデル」-「アイドル状態のタイムアウト(分)」(デフォルト20分)
 - ・ 「リサイクル」-「定期的な間隔 (分)」(デフォルト1740分)
- 12) 画面右側の「アプリケーション プールタスク」で「開始」をクリックします。
- 13) 画面左側の「Default Web Site」をクリックして、画面右側の「Web サイトの管理」で「開始」をクリックします。

Q17

Webコンソールを起動した際に、以下のメッセージが表示されたので、管理対象マシンを削除しようとしたが、Webコンソールから削除できない。

「登録台数以上のライセンスを登録してください。」

A17

ライセンス数が不足した場合は、ライセンスを追加するか、管理対象マシンを削除してください。

管理対象マシンを削除する際は、Webコンソール上に登録情報が表示されないため、DPMコマンドラインの cliremove コマンドを使用して、管理対象マシンを削除してください。管理対象マシンを削除した後は、Webコンソールを再起動してください。

コマンドラインの使用方法については、「リファレンスガイド ツール編 4.1.11 管理対象マシンの削除」を参照してください。

3.2. 管理サーバ

Q1

DHCPサーバと管理サーバを別々のマシンにすると、管理対象マシンのMACアドレスの取得ができなくなった。

A1-1

管理サーバ側のDHCPのサービスが、まだ起動している可能性があります。管理サーバで、「スタート」メニューから「管理ツール」から「サービス」を選択して、「DHCP Server」の「状態」が「開始」となっていないことを確認してください。「開始」になっていたら、プロパティ画面を開き、スタートアップの種類を無効にして、サービスを停止してください。

A1-2

詳細設定で、「DHCPサーバが別のマシン上で動作している」にチェックが入っていない可能性があります。Webコンソールの「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」を選択し、「DHCPサーバ」タブをクリックし、「DHCPサーバが別のマシン上で動作している」にチェックが入っていることを確認してください。チェックが入っていない場合は、チェックを入れて「OK」ボタンをクリックした後、管理サーバを再起動してください。(管理サーバの再起動が不可の場合は、「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「付録 A サービス一覧」に記載のすべてのサービスを停止後、停止したサービスをすべて開始してください。)

Q2

DPMサーバのサービスが起動していない。

A2-1

シナリオ実行時に問題が発生してサービスが終了している場合があります。
実行中のシナリオがあれば終了するのを待って、以下の操作を行ってください。
管理サーバで「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、以下のサービスを再起動してください。(停止していれば開始してください。)

- DeploymentManager API Service
- DeploymentManager Backup/Restore Management
- DeploymentManager Get Client Information
- DeploymentManager PXE Management
- DeploymentManager PXE Mftp(スタートアップの種類が無効となっている場合は、再起動は必要ありません。)
- DeploymentManager Remote Update Service
- DeploymentManager Schedule Management
- DeploymentManager Transfer Management

A2-2

DPMサーバを上書きインストールすることにより復旧する場合があります。

Q3

「DeploymentManager API Service」サービスが、起動できない。

A3

ポート(TCP:56050/26500)が、他のアプリケーションなどで使用されている可能性があります。
他のアプリケーションにより使用されている場合は、DPMと他のアプリケーションのどちらかのポート番号の設定を変更し、通信できるようにしてください。

DPMのポート番号を変更する場合は、「1.6. DPMで使用するポート変更手順」を参照してください。

Q4

「DeploymentManager Remote Update Service」サービスが、起動できない。
また、<DPMサーバのインストールフォルダ>%Log%rupdssvc.csvに以下のエラーログが記載されている。
「RUPDSSVC: FUNCTION: CreateSocket(): bind Failed, error code=10048」

A4

ポート(TCP:56024/26506、TCP:56028/26507)が、他のアプリケーションなどで使用されている可能性があります。
他のアプリケーションにより使用されている場合は、DPMと他のアプリケーションのどちらかのポート番号の設定を変更し、通信できるようにしてください。
DPMのポート番号を変更する場合は、「1.6. DPMで使用するポート変更手順」を参照してください。

Q5

DPMサーバをアンインストールしてからインストールした際、アンインストールする前のシナリオやグループが残っている。

A5

アンインストールが正常に行われない場合があります。以下の手順で再インストールしてください。
(1)再度アンインストールを行う。
(2)DPMサーバをインストールしたマシンを再起動する。
(3)DPMサーバをインストールしたフォルダ配下とイメージ格納用フォルダ
(デフォルトは、C:%Program Files (x86)%NEC%DeploymentManagerとC:%Deploy)を削除する。
(4)再度インストールを行う。

Q6

アンインストールを中断した後に上書きインストールを行うと、エラーメッセージが表示され上書きできない。

A6

DPMサーバを完全にアンインストールした後、新規にインストールしてください。

Q7

DPMサーバのサイレントインストールを実行しても応答がない。

A7

ネットワーク接続が検出できなかった可能性があります。
ネットワーク環境を確認し、再度DPMサーバをインストールしてください。

Q8

DPMサーバのインストールの際に、以下のメッセージが表示され、インストールが失敗する。
「DPMサーバ(データベース)のインストールに失敗しました。」

A8

Microsoft SQL Server 2012 Native Clientが既にインストールされている場合は、DPMサーバのインストールに失敗する場合があります。
Microsoft SQL Server 2012 Native Clientをアンインストールして、DPMサーバを再インストールしてください。

Q9
DPMサーバのインストール先のフォルダパスに「\」を含む場合は、上書きインストールを行うと、「DSNが設定できませんでした。」というエラーメッセージが表示され上書きできない。

A9
次の手順でMicrosoft SQL Server 2012 Native Clientをインストールした後、DPMサーバの上書きインストールを再度行ってください。
1) 次のファイルを他の場所(C:*)にコピーします。
 <インストール媒体>:\DPM\Setup\SQLNCLI\sqlncli_x64.msi
2) コピーしたファイルをsqlncli.msiにリネームします。
3) sqlncli.msiを実行します。
4) 実行完了後、コピーしたファイルを削除します。

3.3. 管理対象マシン

Q1
管理対象マシンの終了時にスタンバイ機能が表示されていない。

A1
以下について確認してください。
・ ターミナルサービスが有効の場合は、スタンバイ機能は使用できません。コントロールパネルからターミナルサービスを無効化してください。
・ デバイスのドライバなどが正常にインストールされていないと、スタンバイ機能が使用できない場合があります。

Q2
リモートデスクトップを使用してDPMクライアントのインストール/アップグレードインストール/アンインストールを行うと、以下のメッセージが出力された。
「ファイルに次のエラーが発生しました、xxxxx\DepAgent.dll.
アクセスが拒否されました。(0x5)」
※xxxxxは、ファイルパス(可変)です。

A2
管理対象マシンのイベントビューアを開いた状態でインストール/アップグレードインストール/アンインストールを行うと上記メッセージが表示される場合があります。
「無視」ボタンを選択して上記メッセージを閉じた後、インストール/アップグレードインストールの場合は、管理対象マシンを再起動して、再度実行してください。
アンインストールの場合は、再起動後に自動的にDepAgent.dllファイルが削除されますので再度実行する必要はありません。

Q3

「DeploymentManager Remote Update Service Client」サービスが起動できない。
また、rupdsvc.logに以下のエラーログが記載されている。

「RUPDSVC: bind() failed, code = 10048」

※rupdsvc.logは、以下のフォルダに格納されています。

- ・ x64: C:\Program Files (x86)\NEC\DeploymentManager_Client\
- ・ x86: C:\Program Files\NEC\DeploymentManager_Client\

A3

ポート(TCP:56000/26510、TCP:56025/26511)が、他のアプリケーションなどで使用されている可能性があります。
他のアプリケーションにより使用されている場合は、DPMと他のアプリケーションのどちらかのポート番号の設定を変更し、通信できるようにしてください。

DPMのポート番号を変更する場合は、「1.6. DPMで使用するポート変更手順」を参照してください。

Q4

「DeploymentManager Remote Update Service Client」サービスが起動できない。
また、rupdsvc.logに以下のエラーログが記載されている。

「Multicast receive socket create error, code = 10048」

※rupdsvc.logは、以下のフォルダに格納されています。

- ・ x64: C:\Program Files (x86)\NEC\DeploymentManager_Client\
- ・ x86: C:\Program Files\NEC\DeploymentManager_Client\

A4

ポート(UDP:56001/26529)が、他のアプリケーションなどで使用されている可能性があります。

他のアプリケーションにより使用されている場合は、DPMと他のアプリケーションのどちらかのポート番号の設定を変更し、通信できるようにしてください。

DPMのポート番号を変更する場合は、「1.6. DPMで使用するポート変更手順」を参照してください。

Q5

Windows Server 2008/Windows Vista以降の管理対象マシンをドメインに参加させると、ファイアウォールの設定が初期化され、ファイアウォールが有効になってしまう。

A5

ドメインサーバでドメインセキュリティポリシーが未定義の場合に発生します。

ドメインに参加する前にドメインセキュリティポリシーを定義しておいてください。

Q6

管理対象マシンをリモートで電源ON(WOL)できない。

A6

以下を確認してください。

- ・ ハードウェアのマニュアルを参照して、管理対象マシンにWOLとネットワークブートの設定を有効にしてください。
- ・ DPMではオンボードLANを使用したWOLに対応します。
管理対象マシンを増設LANボードで接続して使用する場合には対応していません。
- ・ 管理対象マシンを電源ボタン長押しなどで強制電源断した場合は、ハードウェアの仕様により次回のWOLが失敗する場合があります。
この場合は、一度手動で電源をONしてOSの起動後にシャットダウンを行うことで、次回WOLをできるようになります。
- ・ 管理対象マシンと接続しているスイッチのポートのLink SpeedとDuplexがAutoに設定されていないと、WOLで

きない場合があります。

管理対象マシンの電源がOFFの状態、LANがリンクアップしているか確認してください。LANがリンクアップしていないと、DPMからWOLできない場合があります。スイッチのポートとOS上のドライバの設定を確認して、Link SpeedとDuplexの設定をAutoにしてください。電源がONにならない場合は手動で電源をONにしてください。

管理サーバと管理対象マシンが別セグメントに存在する場合は、以下の2点の設定が必要です。

- DPMのグループ設定

「リファレンスガイド Webコンソール編 3.3.1 マシングループ追加」を参照の上、グループの設定が正しいかどうかを確認してください。

- ルータ/スイッチの設定

管理サーバから送信した電源ONの通信が当該管理対象マシンに届いていない可能性があるため、「ファーストステップガイド 2.2.1 ネットワーク環境について」を参照の上、ネットワーク設定を確認してください。

- ・ 管理対象マシンのLANポートをTeaming設定している場合は、Teamingした仮想LANのMACアドレスを実マシンの物理LANのMACアドレス(DPMサーバに登録しているMACアドレス)と同じ値になるように設定してください。

仮想LANのMACアドレスと物理LANのMACアドレスが異なる場合は、DPMによる電源ON(WOL)ができません。

なお、SigmaSystemCenterをご使用の場合は、以下の資料を参照してください。

SigmaSystemCenter(<http://jpn.nec.com/websam/sigmasystemcenter/>)

→「ダウンロード」を選択

→「SigmaSystemCenter ネットワークアダプタ冗長化構築資料」

- ・ 一部機種では、DPMへネットワークブートでマシンを自動で登録した際に電源OFFすると管理対象マシンがWOLしない場合があります。

電源がONにならない場合は、手動で電源をONにしてください。

DPMによる電源ON(WOL)はハードウェアの仕様に依存しますので、上記について確認・対応後も現象が改善されない場合は、ハードウェアの仕様について確認してください。

Q7

自動更新状態表示ツールをタスクトレイに再表示する方法を教えてください。

A7

「リファレンスガイド ツール編 3.3.1 クライアント設定ツール」を参照してください。

3.4. シナリオ

Q1

管理対象マシンにシナリオ割り当てできない。

A1

シナリオ割り当て先のマシンがシナリオ実行中、シナリオ実行エラー、シナリオ実行中断、リモート電源ONエラー状態のときは、シナリオ割り当てできません。シナリオが実行完了するか、マシンのステータスをクリアしてからシナリオ割り当てしてください。

Q2

シナリオファイル名を変更したい。

A2

シナリオファイル名の変更はできませんので、新しくシナリオを作り直してください。

3.5. シナリオ実行

3.5.1. 全般

Q1

シナリオ実行したのに「管理対象マシンの状態」がシナリオ実行中にならない。

A1

「操作」メニューの「画面更新」をクリックするか、「F5」キーを押して画面を更新させると、状態が「シナリオ実行中」に変わります。またマシンのアイコンが実行中を示すまでは、実行中のシナリオに対し、編集、削除、またはシナリオ割り当て解除を行わないでください。シナリオが正常に実行されない場合があります。

Q2

シナリオの「オプション」タブ「シナリオ開始時に対象マシンのOSを再起動する」にチェックを入れてシナリオ実行したのに、マシンが再起動しない。

A2

サービスパック/HotFixの適用、アプリケーションインストールの場合は、シナリオの実行前にマシンの再起動は行われません。

Q3

シナリオ実行中にエラーが発生した。

A3

以下の方法で、エラー解除してください。

その後、イベントビューアにてエラーの内容を確認し、Webコンソールでマシンが正常な状態となっていることを確認してから、再度シナリオ実行してください。

例1)エラー解除の方法

- (1) 管理対象マシン一覧でエラーとなるマシンをクリックしてマシン情報画面が表示される。
- (2) マシン情報画面で「操作」メニューの「エラー解除」をクリックする。

例2)エラー解除の方法

- (1) 「管理」ビュー→「シナリオ実行一覧」をクリックする。
- (2) ツリービュー上で、「シナリオ実行一覧」アイコンをクリックする。
- (3) 「操作」メニューの「ステータスの一括クリア」をクリックする。
- (4) 「ステータスの一括クリア」画面で「シナリオ実行エラー」を選択状態にする。
- (5) 「OK」ボタンをクリックする。

Q4

シナリオ実行中のまま完了にならない。

A4

以下を確認してください。

- ・ DPMクライアントがインストールされていることを確認してください。
DPMクライアントをインストールしていない場合は、シナリオの中断後、DPMクライアントをインストールしてから再度実行してください。
- ・ 管理対象マシンにて、DPMクライアントのインストール時に設定した管理サーバのIPアドレスが正しいことを確認してください。
正しくない場合は、以下のレジストリを変更するか、DPMクライアントの再インストールを行って、正しいIPアドレスを設定してください。

<Windows>

キー:

HKEY_LOCAL_MACHINE\SYSTEM\CurrentControlSet\Services\depagent\Parameters

値の名前: ServerIpAddress

<Linux>

/opt/dpmclient/agent/etc/フォルダの以下のファイルを修正してください。

ファイル名: server.inf

キー名: dpmserverip=

- ・ シナリオ完了時にDPMクライアントが管理サーバと通信できる設定であることを確認してください。
- ・ シナリオ実行中にWebコンソールの「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」→「DHCPサーバ」タブ内の設定を変更した場合は、管理対象マシンがPXEブートに失敗するため、シナリオの完了を正しく検知できなくなります。シナリオを中断後、正しい環境に合わせて、「DHCPサーバ」タブ内の項目を設定した後にシナリオを再実行してください。

Q5

シナリオ実行後、すぐにシナリオ実行エラーが発生した。

A5-1

DHCPサーバの設置場所や設定が間違っているか、DHCPサーバがIPアドレスをリースできない状態になっているか、DHCPサーバが正常に動作していない可能性があります。以下から現在の状況を確認してください。

- ・ Webコンソールの「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」→「DHCPサーバ」タブを選択して、正しく設定されていることを確認してください。
- ・ リースすべきIPアドレスを持つDHCPスコープが、非アクティブになっていないことを確認してください。
- ・ DHCPサーバが承認され(DHCPサーバがドメインに参加している場合は、Active Directoryに承認され)、IPアドレスをリースできる状態であることを確認してください。
- ・ DHCPのアドレスプールが枯渇していないことを確認してください。枯渇している場合は、十分な量のアドレスプールを確保してください。
- ・ Windows以外のDHCPサーバを使用している場合は、固定アドレス設定が行われていることを確認してください。

A5-2

リモートアップデートのシナリオを、シナリオで設定した「マルチキャスト配信開始条件」→「最大ターゲット数」を越えたマシンに実行した可能性があります。

実行するマシンの台数を減らすか、「最大ターゲット数」を増やしてください。

A5-3

電源がONになっているマシンに対して、HW設定、OSインストール、ディスク構成チェック、バックアップ/リストアのシナリオを実行した可能性があります。

マシンの電源をOFFにして再実行するか、電源ONのマシンに対して強制的に実行する場合は、シナリオの「オプション」タブで「シナリオ開始時に対象マシンのOSを再起動する」にチェックを入れてください。

A5-4

リモートアップデートのシナリオで、実行したパッケージのコマンド(実行ファイルパス + 実行ファイル名 + セットアップパラメータ)が259Byteを越えている可能性があります。イメージビルダ、PackageDescriberで259Byte以内になるように修正してください。

Q6

シナリオ実行中にエラーが発生した。

イベントビューアを確認すると、エラーログ情報が登録されている。

A6

イベントビューアに登録されたログ情報を確認し、それぞれの処理を行ってください。

再実行後も問題が発生する場合は、その問題のため関連サービスが不正動作している可能性があります。実行中のシナリオがあれば終了するのを待って、管理サーバから以下の操作を行ってください。管理サーバで「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、以下のサービスを再起動してください。(停止していれば開始してください。)

DeploymentManager API Service
 DeploymentManager Backup/Restore Management
 DeploymentManager Get Client Information
 DeploymentManager PXE Management
 DeploymentManager PXE Mfttp(スタートアップの種類が無効となっている場合は、再起動は必要ありません。)
 DeploymentManager Remote Update Service
 DeploymentManager Schedule Management
 DeploymentManager Transfer Management

■ ログ情報1

・ Error : Timeout error and stop run scenario. No response from target:

「説明」

一定時間、マシンからのレスポンスが無かったため、シナリオが実行タイムアウトしました。マシンが入力待ち状態、もしくはエラー表示などで停止している可能性があります。マシン、シナリオ内容、セットアップパラメータファイルなどを確認の上、マシンのエラーを解除し、マシンの電源をOFFにした後、再度シナリオを実行してください。

■ ログ情報2

・ Error cannot create thread(xxxxxxxxxxxxx)

・ Error cannot allocate xxxxxxxxxxxxxxxxx

「説明」

マシンの要求を処理するスレッドの作成や、バッファのメモリ確保に失敗しました。管理サーバの高負荷状態などの要因により、リソースが不足している可能性があります。

管理サーバの状態を確認の上、マシンのエラーを解除し、マシンの電源をOFFにした後、再度シナリオを実行してください。

■ ログ情報3

・ Error cannot read CLF

・ Error cannot change CLF

「説明」

管理しているマシン情報の読み込み、書き込みに失敗しました。

マシンのエラーを解除し、マシンの電源をOFFにした後、しばらく待って再度シナリオを実行してください。

■ ログ情報4

・ Error cannot get xxxxxx path

・ Error cannot read xxxxxx

・ Error cannot open xxxxxx

「説明」

ファイルxxxxxxのパス取得、オープン、読み込みに失敗しました。

管理サーバの高負荷状態などの要因により、リソースが不足しているか、レジストリ情報が破壊されている場合があります。管理サーバの状態を確認の上、マシンのエラーを解除し、マシンの電源をOFFにした後、再度シナリオを実行してください。

■ ログ情報5

・ Starting process of the computer failed MAC = XX-XX-XX-XX-XX-XX

「説明」

マシンのリモート電源ONに失敗しました。

ネットワークケーブルが接続されていないか、リモート電源ONする設定になっていません。POST画面中に強制電源オフした場合は、次回起動時リモート電源ONしないことがあります。

HW設定を確認して再度やり直してください。

■ ログ情報6

・ Starting process of the computer failed when execute scenario MAC = XX-XX-XX-XX-XX-XX

「説明」

マシンのリモート電源ONに失敗しました。

ネットワークケーブルが接続されていないか、リモート電源ONする設定になっていません。POST画面中に強制電源オフした場合は、次回起動時リモート電源ONしないことがあります。

HW設定を確認して再度やり直してください。

■ ログ情報7

・ scenario start write shared memory MAC : error = XX-XX-XX-XX-XX-XX : XXX

「説明」

サービスが異常終了した可能性があります。

(1)管理サーバで「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、以下のサービスを停止させてください。

DeploymentManager API Service
DeploymentManager Backup/Restore Management
DeploymentManager Get Client Information
DeploymentManager PXE Management
DeploymentManager PXE Mtftp(スタートアップの種類が無効となっている場合は、停止する必要はありません。)
DeploymentManager Remote Update Service
DeploymentManager Schedule Management
DeploymentManager Transfer Management

(2)(1)で停止させたサービスを開始させてください。

(3)再度、シナリオ実行を行ってください。

■ ログ情報8

- ・ scenario start write shared memory MAC : error = XX-XX-XX-XX-XX-XX : 112

「説明」

シナリオ実行対象のマシンでWOLしなかったか、PXEブートに失敗したことが原因です。

DPMは電源OFFのマシンに対してシナリオを実行するとき、PXEブートが正常に行えることを監視しています。

PXEブートが実行されない場合はWOLしなかったと判断しシナリオ実行エラーになります。対象マシンのBIOS設定でWOLならびにネットワークブートの設定を行ってください。BIOSの設定方法についてはハードウェア添付のマニュアルを参照してください。

Q7

電源ON、またはシナリオ実行で、管理対象マシンの電源がONされない。

A7

POST画面中、強制的に電源をOFFにすると次回起動時にリモート電源ONしない場合があります。

その場合は、POST画面の完了後電源をOFFとするか、OSを起動してシャットダウンを行ってください。

Q8

シナリオ実行中に誤って電源を落としてしまった。

A8

Webコンソール上で、タイトルバーの「運用」をクリックして、「運用」ビューに切り替えます。ツリービュー上で、「マシン」アイコンをクリックし、電源を落としたマシンを登録したグループを選択します。指定するマシンを選択し、「シナリオ実行中断」を選択し、シナリオを中断してください。ステータスが正常に戻った後、再度シナリオを実行してください。

Q9

管理対象マシンがネットワークブートしないため、実行したシナリオがタイムアウトエラーになった。

A9-1

BIOSの設定のネットワークブート順位がHDDよりも低く設定されている可能性があります。ネットワークブートの起動順位をHDDよりも上にして、再度実行し直してください。

A9-2

管理サーバに登録されているMACアドレスとは異なるMACアドレスを持つネットワークデバイスでPXEブートするように設定されている可能性があります。管理サーバに登録されているMACアドレスを持つネットワークデバイスがPXEブートするように設定されているか確認し、再度実行し直してください。

PXEブートの確認および設定方法については、ハードウェアのマニュアルを参照、または販売元に問い合わせてください。

A9-3

UEFIモードの管理対象マシンを使用している場合は、リストア、またはディスク複製OSインストールのシナリオ完了後の環境でWindows OSの起動を行う、またはUEFIブートオプションを変更した後にWindows OSの起動を行うと、UEFIブートオプションの「Windows Boot Manager」が複数となり、ネットワークブートの優先順位が変更される可能性があります。

ネットワークブートの優先順位を「Windows Boot Manager」よりも上位になるように変更して、シナリオを再実行してください。

A9-4

DPMクライアントがDPMサーバからの再起動要求を受け取れない状態になっている可能性があります。

DPMクライアントが使用するポート番号が他のアプリケーションに使用されていないか確認してください。

DPMクライアントが使用するポート番号が他のアプリケーションにより使用されている場合は、どちらかのポート番号の設定を変更し、DPMクライアントが通信できるようにしてください。

DPMのポート番号を変更する場合は、「1.6. DPMで使用するポート変更手順」を参照してください。

Q10

DPMコマンドラインを実行しても指定したコマンドが実行されない。

またコマンドプロンプトにもエラーが表示されない。

A10

旧バージョンのDPMコマンドライン(コマンドライン for DPM)を使用している可能性があります。旧バージョンのDPMコマンドライン(コマンドライン for DPM)を使用している場合は、「インストレーションガイド 3.5 DPMコマンドラインをアップグレードインストールする」を参照して、アップグレードインストールを行ってください。

Q11

複数台の管理対象マシンに対して同時にシナリオを実行し、リモート電源ONエラーが発生した。

A11

複数台の管理対象マシンに対して同時にシナリオを実行する場合は、「管理」ビュー→「DPMサーバ」アイコン→「詳細設定」→「ネットワーク」タブのリモート電源ONタイムアウト値のデフォルトでは、タイムアウトエラーが発生する場合があります。

目安として、リモート電源ONタイムアウト値に、リモート電源ON実行間隔×シナリオ実行台数と管理対象マシンの起動時間を加えた程度の値に設定ください。

Q12

シナリオ実行完了時やシナリオ中断時に、管理対象マシンの画面に以下が表示され、マシンの電源がOFFされない。

「ERROR: Failed to power down by calling APM BIOS. The system has halted.」

A12

APMに対応していないマシンではシャットダウン時に自動的に電源OFFされない可能性があります。

この場合は、管理対象マシンの電源を手動でOFFしてください。

Q13

DPMコマンドラインを実行すると以下のメッセージが出力されコマンドが実行できない。

指定されたプログラムは実行できません。

A13

DPMコマンドラインを実行するために必要なランタイムが正しくインストールされていない場合に出力されます。

以下のファイルを実行し、ランタイムのインストールを行ってください。

<インストール媒体>:\%DPM%\Setup\VCRTL\vc_redist_x86_2013.exe

Q14

DPMコマンドラインを実行すると[イベント ビューア]の"システム"に以下のログが出力される。

ソース: SideBySide

イベントID: 32

説明: 従属するアセンブリ Microsoft.VC120.CRT を検出できませんでした。

エラー: 参照されたアセンブリはシステムにインストールされていません。

A14

DPMコマンドラインを実行するために必要なランタイムが正しくインストールされていない場合に出力されます。

以下のファイルを実行し、ランタイムのインストールを行ってください。

<インストール媒体>:¥DPM¥Setup¥VCRTL¥wcredist_x86_2013.exe

Q15

DPMの以下のサービスが起動されません。手動で起動しようとしても「エラー 1067 プロセスを途中で強制終了しました」というエラーメッセージが表示されます。

DeploymentManager API Service

DeploymentManager PXE Management

DeploymentManager Backup/Restore Management

A15

管理サーバのIPアドレスを正規の手順以外で変更した場合このエラーが発生します。

いったん、管理サーバを変更前のIPアドレスに戻した後に「1.1. 管理サーバのIPアドレス変更手順」を参照して、IPアドレスの変更を行ってください。

Q16

シナリオ実行すると、"Starting kswapd", "NTFS driver v1.1.2.2[Flags:R/O]"と表示されます。

A16

BIOS設定のキーボード設定で、[USBレガシー機能]を無効にすることで回避できます。

Q17

DPMコマンドラインを実行すると「引数が不正です。」とエラーが表示されます。

A17

引数に空白、もしくは「>」が含まれるとエラーが発生します。

このような場合は、該当の引数を「"」(ダブルクォーテーション)で括ってください。

Q18

DPMコマンドラインを実行すると、下記のエラーが表示されて動作しません。

「ERROR:xxxx

ERROR CODE:7304

ERROR MSG:xxxx」

A18

DPMコマンドラインを実行するマシンにプロキシサーバが設定されており、DPMサーバにプロキシサーバを経由してアクセスする必要がない場合は、DPMコマンドラインの実行時に下記のエラーが表示されることがあります。

ERROR:DPMサーバの設定に失敗しました。

〇〇〇は行われません。
ERROR CODE:7304
ERROR MSG:Session:DPMサーバが成功以外の終了コードを返却しました。(HTTP Status is not 200)

※〇〇〇はコマンドの実行内容に応じて変化します。

DPMコマンドラインとDPMサーバの間の通信はHTTPを使用していますが、ローカルサーバ(内部ネットワークサーバ)に対しプロキシサーバ経由でアクセスを試みているためHTTPエラーが発生しています。
下記の手順でプロキシサーバのバイパス(例外)設定を行い、プロキシサーバを経由しないようにしてください。

WinHTTPのプロキシ設定にバイパスを設定します。

- ・ Windows Server 2008以降のバージョン
コマンドプロンプトを起動し、下記のコマンドを実行します。
 - x64OSの場合:
%SystemRoot%\SysWOW64\netsh winhttp set proxy proxy-server="プロキシサーバのアドレス"
bypass-list="DPMサーバのアドレス"
 - x86OSの場合:
netsh winhttp set proxy proxy-server="プロキシサーバのアドレス"bypass-list="DPMサーバのアドレス"

実行例は下記のとおりです。

コマンド

```
%Windows%\SysWOW64\netsh winhttp set proxy proxy-server="testproxy.co.jp:8080"  
bypass-list="192.168.1.1"
```

実行結果

現在の WinHTTP プロキシ設定:
プロキシ サーバー: testproxy.co.jp:8080
バイパス一覧 : 192.168.1.1

- ・ Windows Server 2003以前のバージョン
コマンドプロンプトを起動し、下記のコマンドを実行します。
proxycfg -p プロキシサーバのアドレス DPMサーバのアドレス

実行例は下記のとおりです。

コマンド

```
proxycfg -p testproxy.co.jp:8080 192.168.1.1
```

実行結果

更新されたプロキシ設定
現在の WinHTTP プロキシ設定:
HKEY_LOCAL_MACHINE\SOFTWARE\Microsoft\Windows\CurrentVersion\InternetSettings\Connections\WinHttpSettings :
プロキシ サーバー: testproxy.nec.co.jp:8080
バイパス一覧: 192.168.1.1

Q19

イベントログに以下のメッセージが出力されて、DPMのサービスが起動できません。

- ・ 「DeploymentManager API Service サービスは予期せぬ原因により終了しました。」と表示され、DeploymentManager API Serviceが起動後に終了してしまう。
- ・ 「既に存在するファイルを作成することはできません。」と表示され、DeploymentManager Schedule Managementが起動できない。

A19

当該のDPMサービスは、起動の際にSQL Server (DPMDBI)またはpostgresql-x64-9.5 - PostgreSQL Server 9.5にアクセスを行うため、SQL Server (DPMDBI)またはpostgresql-x64-9.5 - PostgreSQL Server 9.5サービスが停止している場合や、何らかの要因でデータベースにアクセスできない場合は、起動に失敗します。

SQL Server (DPMDBI)またはpostgresql-x64-9.5 - PostgreSQL Server 9.5サービスを再起動して、再度、当該

サービスの起動をしてください。

Q20

Webコンソールの「ディスク情報(ディスクビューア)」画面で、「Unknown」と表示される。

A20

管理対象マシンのディスク内にDPMで対応していないファイルシステムやディスク形式が含まれている可能性があります。

管理対象マシンのディスクがDPMで対応しているファイルシステムやディスク形式でフォーマットされた状態になっているか確認してください。

DPMが対応しているファイルシステムやディスク形式については「ファーストステップガイド 付録 A 機能対応表」の「ファイルシステムやディスク形式の対応状況」を参照してください。

Q21

Webコンソールの「ディスク情報(ディスクビューア)」画面を表示する際に、エラーが表示されてディスク構成情報が表示されない。

A21

ディスク情報が破損しているか、存在していない可能性があります。

再度ディスク構成チェックシナリオを実行してください。

これは次の要因が考えられます。

- ・ ディスク構成チェックシナリオが一度も成功していない。
- ・ 管理対象マシンのFC-LUN構成を変更した後に、ディスク構成チェックシナリオが成功していない。
- ・ ディスク構成チェックシナリオを実行して採取したディスク情報が破損している。

3.5.2. Linux インストールパラメータファイルの作成

Q1

インストールパラメータ設定ツールの「ファイル」メニューの「開く」を選択して、既存のLinux インストールパラメータファイルを読み込んだ時に以下のメッセージが表示される。

「対象ホストファイルが読み込めません。」

A1-1

選択したLinux インストールパラメータファイルは、対応していないOSの可能性があります。詳細については、「ファーストステップガイド 3.9.1 システム要件」、および「ファーストステップガイド 付録 A 機能対応表」を参照してください。

A1-2

Linux インストールパラメータファイルが破損している可能性があります。

Linux セットアップパラメータファイル、およびLinux ブートパラメータファイルの内容を確認してください。

Q2

インストールパラメータ設定ツールから「ファイル」メニューの「開く」を選択し、既存のLinux インストールパラメータファイルを読み込んだ時に以下のメッセージが表示される。

「Linuxパラメータファイルが読み込めません。」

A2-1

選択されたLinux インストールパラメータファイルは、対応していないOSの可能性があります。詳細については、「ファーストステップガイド 3.9.1 システム要件」、および「ファーストステップガイド 付録 A 機能対応表」を参照してください。

A2-2

Linux インストールパラメータファイルが破損している可能性があります。

Linux セットアップパラメータファイル、およびLinux ブートパラメータファイルの内容を確認してください。

3.5.3. ディスク複製 OS インストール

Q1

ディスク複製OSインストールによるOSセットアップ中に、マシンの画面に以下のメッセージが表示されて処理が停止した。

「本マシン用のパラメータファイルが用意されていないかコピーに失敗しました。再起動後に表示されるウィザードにしたがってセットアップを行ってください。何かキーを押すと再起動します。」

A1

管理サーバの同時アクセス数の最大数を超えて接続しようとしている可能性があります。同時アクセスしているマシンを減らしてから再度実行してください。

Q2

ディスク複製OSインストールによるWindows OSのセットアップ中に、マシンにログオンした状態で処理が停止した。また、パラメータで指定したマシン名などが正しく設定されていない。

A2

Windows OS初期化に時間がかかり、固有情報反映に失敗した可能性があります。

<イメージ格納用フォルダ>%Sysprep%Windows%DepConfig.iniをテキストエディタなどで開き、以下のTimeoutに設定した数値(ミリ秒)を変更してください。(半角数字で記入してください。)

なお、DepConfig.iniはマスタイメージ作成時、マスタマシンでCopy-ExpressSysprep.vbsスクリプトを実行した後に編集できます。

```
[SYSPREP]
Timeout=60000
```

例)

```
[SYSPREP]
Timeout=300000
```

Q3

ディスク複製OSインストールによるOSセットアップ中に、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示されて処理が停止した。

「lnfct: ERROR: ioctl - SIOCGIFADDR<iLocalSocket>(99 - Cannot assign requested address).」

A3

ディスク複製用モジュールが管理サーバと通信できるIPアドレスを取得できませんでした。

管理対象マシンのLANボードが通信できる状態になっているか確認してください。

管理対象マシンのLANボードが通信できる状態になっている場合は、LANボードに管理サーバと通信できるIPアドレスが割り当てられているか確認してください。

Q4

Windows Server 2008/Windows Vista以降のOSのディスク複製OSインストールによるOSのセットアップ中に、マシンの画面に以下のいずれかのメッセージが表示されて処理が停止した。

- ・「パス[specialize]の無人応答ファイルを解析または処理できませんでした。応答ファイルで指定されている設定を適用できません。コンポーネント[Microsoft-Windows-Shell-Setup]の設定を処理中に、エラーが検出されました。」
- ・「コンピュータが予期せず再起動されたか、予期しないエラーが発生しました。Windowsのインストールを続行できません。Windowsをインストールするには「OK」ボタンをクリックしてコンピュータを再起動してから、インストールを

再実行してください。」

A4

展開先のマシンのディスク複製用情報ファイルの「OS種別」が、マスタマシンの「OS種別」と異なっている可能性があります。また、ディスク複製用情報ファイルの「プロダクトキー」の指定が間違っている可能性があります。ディスク複製用情報ファイルの「OS種別」をマスタマシンと同じ設定に変更して、「プロダクトキー」を正しく設定して、再度ディスクイメージの配布を行ってください。

Q5

ディスク複製OSインストールによるOSセットアップ中に、マシンの画面に以下のメッセージが表示されて処理が停止した。

「システムのレジストリに、無効なファイルパスが含まれています。インストールを続行できません。このシステムイメージは、ドライブ文字の割り当てがマシン間で整合性が取れているという保証なしで適用されました。」

A5

マスタイメージのシステム構成がマルチブートになっている場合に、表示される可能性があります。マスタイメージがマルチブートのシステム構成でないか確認してください。マルチブート環境でのディスク複製OSインストールはできません。(マスタイメージは、必ず単一システムとして構築したマスタマシンから作成してください。)

Q6

ディスク複製OSインストールによるOSセットアップ後、「ネットワークとダイヤルアップ接続」に登録されている接続名が文字化けしている。

A6

手動で接続名を変更してください。

Q7

ディスク複製OSインストールによるOSセットアップの際に、マスタマシンでSysprepコマンドを実行すると「Windows セキュリティの重要な警告」ダイアログが表示され"Microsoft Remote Desktop Help Session Manager"の通信がブロックされていると表示された。

A7

Windows Server 2003 R2の場合に表示される可能性があります。しばらくすると自動的に続行され、問題ありませんので、しばらくお待ちください。

Q8

ディスク複製OSインストール中にIMJP.ZP.DI_ファイル、またはその他のファイルを要求する画面が表示された。

A8

IMJP.ZP.DI_が要求された場合は、マスタマシンの「オペレーションガイド 3.3.1.3 マスタイメージ作成の準備をする」の「■インストール媒体内のツールを手動実行する」で作成した。¥SYSPREP¥I386¥LANG(Windows Server 2003 R2/Windows XP以前のOSの場合は、¥SYSPREP¥I386¥LANG¥JPN)フォルダに以下の場所からIMJP.ZP.DI_ファイルをコピーしてください。I386配下にLANGフォルダがない場合は作成してください。

- ・ Windows Server 2003 R2(x64)の場合:(CD-ROM)ドライブ:¥AMD64¥LANG¥IMJP.ZP.DI_
- ・ Windows XP/Windows Server 2003/Windows Server 2003 R2 (x86)の場合:
(CD-ROM)ドライブ:¥I386¥LANG¥IMJP.ZP.DI_

上記ファイルのコピー後、「オペレーションガイド 3.3.1.3 マスタイメージ作成の準備をする」の「■インストール媒体内のツールを手動実行する」を参照し、再度ディスク複製OSインストールを行ってください。

その他のファイルが要求された場合も同様の手順でマスタマシンにファイルを追加して、再度ディスク複製OSインストールを行ってください。

Q9
ディスク複製OSインストール後、LinuxOS起動時に以下のようなメッセージが表示される。または、X-Windowが起動しない。
「"ホスト名"※ のURLが見つかりませんでした。そのため、GNOMEが正しく動作しなくなるおそれがあります。
/etc/hosts ファイルに"ホスト名"※ を追加することでこの問題を解決できる場合があります。」
※"ホスト名": ディスク複製OSインストール後の各マシンのホスト名

A9
/etc/hostsファイルにホスト名が登録されていないためにX-Window起動時にエラーが発生することがあります。
/etc/hostsファイルにホスト名を登録してください。使用している環境が固定IPアドレスの場合は、以下のような行を登録してください。
例)
192.168.0.1 servername
DHCPの場合は、ループバックアドレスに登録してください。
例)
127.0.0.1 localdomain.localhost localhost servername

Q10
ディスク複製OSインストール後に、IPアドレスの競合が発生した。

A10
マスタマシンにエイリアスインタフェースが設定されていると、ディスク複製OSインストール後にIPアドレスの競合が発生します。以下の手順でエイリアスインタフェースの設定ファイルを削除した後、マシンを再起動してください。

cd /etc/sysconfig/network-scripts
rm -f ifcfg-eth*.*
rm -f ifcfg-bond*.*

Q11
LinuxをインストールしたVMware ESXiの仮想マシンをマスタマシンとしてディスク複製OSインストールのバックアップを行うと、バックアップ処理が完了して再起動した後のOS起動中に以下のエラーが表示され、シャットダウンされた。
「Determining IP information for ethX failed; no link present. Check cable?」

A11
マスタマシン上でのディスク複製OSインストールの準備時、「オペレーションガイド 3.4.1.3 マスタイメージ作成の準備をする」の「■インストール媒体内のツールを手動実行する」に記載している設定が正しく行われていない可能性があります。
手順、設定を確認して再度ディスク複製OSインストールを行ってください。

Q12
VMware ESXiの仮想マシンに対してディスク複製OSインストールを行うと、固有情報を反映して再起動した後のOS起動中に以下のエラーが表示され、ネットワークアダプタが認識できなくなった。
「Determining IP information for ethX failed; no link present. Check cable?」

A12
ディスク複製用情報ファイル作成時、「リファレンスガイド ツール編 1.4.3 ディスク複製用情報ファイルの作成 (Linux)」のスクリプト情報に記載されている設定が正しく行われなかった可能性があります。
手順、設定を確認して再度ディスク複製OSインストールを行ってください。

Q13

マスタマシンセットアップ用のシナリオ(System_LinuxMasterSetup/System_WindowsMasterSetup/System_WindowsMasterSetupVM)のシナリオ実行は成功したが、ディスク複製OSインストールに失敗する。

A13

DPM Ver6.12よりも前のDPMクライアントを使用している可能性があります。DPMクライアントをアップグレードインストール後、再度ディスク複製OSインストールを行ってください。

Q14

ディスク複製OSインストールのマスタイメージを作成する手順を間違えた場合は、間違った手順からやり直すことはできますか？

A14

マスタイメージの作成手順を間違った場合は、あらかじめ作成したマスタのバックアップイメージをリストア後、再度、オペレーションガイドに記載の手順に沿って最初からやり直してください。間違った手順からやり直した場合は、正しいディスク複製OSインストールのマスタイメージが作成されない場合があります。

Q15

ディスク複製OSインストールで、パラメータファイルが存在しないという内容のエラーが発生します。

A15

管理対象マシンは、管理サーバよりディスク複製用情報ファイルを取得する為、管理サーバへの接続を試みますが、この接続に失敗している可能性があります。この場合は、管理サーバの所属するドメインが、「ネットワーク経由でコンピュータへアクセス」のユーザ権限を許していない設定になっている可能性があります。
→管理サーバに接続するためには、このユーザ権限が必要になります。

Q16

ディスク複製OSインストール実行後、設定したセットアップパラメータが適用されていない項目があります。

A16

ディスク複製OSインストール時に一部の設定が反映されない場合があります。その場合はディスク複製終了後、手動で設定してください。

Q17

ディスク複製OSインストールの際、ログイン画面で停止します。(パスワードエラーが発生します。)

A17

マスタマシンでディスク複製OSインストールの準備を行った際に、パスワードが設定されたままになっています。マスタマシンのパスワードをなしに設定して、再度バックアップを行ってください。そのバックアップイメージを用いて、再度ディスク複製OSインストールを行ってください。

3.5.4. OS クリアインストール

Q1

BIOS/ファームウェア用フロッピーディスクのイメージ配信、OSクリアインストールのシナリオを実行した後、マシンが再起動する前に、シナリオ実行エラーになる。

A1

シナリオの「オプション」タブ-「シナリオ開始時に対象マシンのOSを再起動する」にチェックが入っていますか？チェックが外れている場合は、電源が入っているマシンに対しては、シナリオは実行されません。シナリオ修正するか、マシンの電源を切ってから再度お試しください。

Q2

OSクリアインストールのインストールシナリオを実行中に、マシンの画面に次のメッセージが表示されてシナリオが停止した。

「Cannot connect data server. Please stop running scenario on management server and press any key to reboot」

A2

管理サーバの同時アクセス数の最大数を超えて接続しようとしている可能性があります。同時アクセスしているマシンを減らしてから再度実行してください。

Q3

OSインストールがエラーで止まってしまう。

A3

マシン名に使用できない文字を指定されている場合は、OSインストールは途中でエラーとなります。使用できない文字の一覧は、使用しているOSのマニュアルなどを参照してください。

Q4

Linuxインストール中、次のメッセージが表示されインストールできない。

「Could not allocate requested partitions; Partitioning failed:
Could not allocate partitions as primary partitions」

A4

パーティションの設定が不正の可能性があります。(例えば、一つのベーシックディスク上に作成できるプライマリパーティションの数が上限値(4)を超えているなど。)

Linuxインストールパラメータファイル作成時に「ディスク情報設定」→「パーティションの設定」→「全ての既存パーティションを削除」を選択し、Linuxインストールを再度実行してください。

Q5

Linuxインストール中、次のメッセージが表示されインストールできない。

```
+----- Kickstart Error -----+
Error opening: kickstart file
/tmp/ks.cfg: No such file or
directory
[OK]
+-----+
```

A5-1

NFS共有フォルダの設定が正しいか確認してください。

「インストレーションガイド 付録 C NFSサーバを構築する」を参照し、正しく設定を行った後Linuxのインストールを行ってください。

A5-2

前述の「NFSサービスのセットアップ」にあるexportsフォルダをNFS共有とした状態でDPMサーバをいったんアンインストールして、再度インストールするとエクスプローラのプロパティではNFS共有が設定されていますが、実際にインストールを行うと上記のエラーが出ることがあります。このような状態になった場合は一度NFS共有を解除し、再度設定してください。

A5-3

Linuxインストールパラメータの「インストールデバイス」の設定において、使用しているインストールデバイスを設定しているか確認してください。

「リファレンスガイド ツール編 1.4.5 OSクリアインストール用パラメータファイル作成(Linux)」を参照し、「インストールデバイス」を正しく設定した後、再度Linuxのインストールを行ってください。

Q6

OSインストール後、ネットワークデバイスが不明デバイスとして存在します。

A6

デバイスドライバをインストールするためには、適切なデバイスドライバをDPMに登録しシナリオで指定する必要があります。

詳細は、対応装置一覧を参照してください。

WebSAM DeploymentManager(<http://jpn.nec.com/websam/deploymentmanager/>)

→「動作環境」を選択

→「対応装置一覧」を選択

3.5.5. サービスパック/HotFix/Linux パッチファイル/アプリケーションのインストール

Q1

リモートアップデートでシナリオ実行エラーが続く場合は、以下の操作を行ってください。

A1

管理サーバを再起動してください。(管理サーバの再起動が不可の場合は、「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「付録 A サービス一覧」に記載のすべてのサービスを停止後、停止したサービスをすべて開始してください。)

Q2

サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストールのシナリオを実行したところ、「監視」ビュー→「シナリオ実行一覧」の「状態」欄のマシンが、「シナリオ実行中」のままで、シナリオ実行完了にならない。

A2

セットアップパラメータが正しく設定されていない場合は、マシン上に確認ダイアログボックスが表示されてシナリオが実行完了になりません。セットアップパラメータはサービスパック/HotFixを「/h」、または「-?」のオプションをつけて実行するか、配布元のWebサイトなどで調べることができます。サイレントインストール型であり、インストール後に再起動を行わない設定のセットアップパラメータを必ず指定してください。

Q3

イメージビルダのサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストールでイメージファイルの作成に失敗する。

A3

サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストールでは、イメージファイルをZIP形式で保存しています。このZIPファイルが2GByteを越える場合は、イメージファイルの作成に失敗します。

Q4

イメージビルダでパッケージの修正を行うと「ファイルの圧縮に失敗しました。」、または「管理サーバへの登録に失敗しました。」と表示されパッケージの修正に失敗する。

A4

パッケージの作成日時より修正日時が古い場合は、パッケージの修正に失敗します。パッケージの作成後に、マシンの日付と時刻を変更した、管理サーバとイメージビルダ(リモートコンソール)の時刻が異なるなどの原因が考えられます。

パッケージの作成日時を経過するのを待ってから修正するか、パッケージをいったん削除して再度作成してください。パッケージは、管理サーバのイメージ格納用フォルダ¥HotFixかイメージ格納用フォルダ¥PPに格納されています。(イメージ格納用フォルダのデフォルトはC:¥Deploy、パッケージのファイル名は"サーバID"->"パッケージID".zipになります。)

Q5

サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイルの実行に失敗しても、Webコンソール上でシナリオ実行が正常に終了したように表示される。

A5

サービスパックやHotFixの実行に失敗しても検知できない場合があります。この場合は、実行が失敗した原因を取り除いてから、再度、シナリオを実行しなおしてください。

- Q6
BIOS/ファームウェア用フロッピーディスクのイメージ配信、またはサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストールのシナリオを実行すると、シナリオ実行エラーになる。
- A6
実行中断処理は正しく行われましたか？中断処理中に中断を解除してシナリオを実行すると、シナリオ実行エラーになる場合があります。
また、同じシナリオを同時に複数のマシンに実行させたい場合は、マルチキャスト配信条件の最大ターゲット数を実行させたいマシンの数に設定してから、シナリオ実行してください。
- Q7
複数のサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストールのシナリオを同時に実行しようとすると、シナリオ実行エラーになる。
- A7
「シナリオ詳細」画面を見て同じマルチキャストIPアドレスを指定していないか確認してください。もし同じマルチキャストIPアドレスを使用していなければ、最大転送レートを下げるか、シナリオを一つずつ実行するようにしてください。(同じシナリオであれば複数のマシンにシナリオ実行してもかまいません。)
- Q8
サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストールのシナリオが開始されない。
- A8
最大ターゲット数が設定されていない、もしくは実行しようとしているマシンよりも多い場合は、シナリオ実行は最大待ち時間待ってから実行されます。(最大待ち時間のデフォルトは10分です。)
- Q9
最大転送レートを高く指定したのに、シナリオ実行時間が短縮されない。
- A9
最大転送レートはお客様のネットワーク環境により大きく左右されます。ネットワーク環境の性能以上の転送レートは出せません。
- Q10
リモートコンソールからイメージビルダでアプリケーションやサービスパック/HotFixを登録する場合に「管理サーバへの登録に失敗しました」とエラーが表示される。
- A10
登録するファイルサイズが非常に大きいと発生する場合があります。
以下のレジストリに設定されているタイムアウト値(秒数)を編集することでエラーは表示されなくなります。
Hive : HKEY_LOCAL_MACHINE
KEY : SOFTWARE\Wow6432Node\NEC\DeploymentManager
NAME : DIBReqTimeOut
Type : REG_DWORD
Value : 120
→デフォルトは、120秒です。タイムアウト値を設定してください。
エラーが表示されても登録は成功していますので、再登録は不要です。
イメージビルダを終了する時に以下の操作をしてください。
(1)一括登録処理で「はい(登録)」を選択。
(2)表示される上書き確認で「いいえ(削除)」を選択。

Q11

リモートコンソールからイメージビルダでサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションをインストールする場合にデータの作成には成功するが、その後の管理サーバへの登録に失敗した。

A11

セットアップコマンド名のパスが非常に長いと発生する場合があります。
リモートコンソールから管理サーバに登録する場合は、アップロード処理が管理サーバ側のイメージ格納用フォルダパスも含めたフルパスを最大パス長としてチェックするため、フルパスの上限を超えてしまい登録に失敗します。リモートコンソールで登録するファイルをドライブのルートに近い場所に移動するなどしてフルパスを短くして登録してください。

Q12

サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストールのシナリオ実行を中断し、中断解除後、再度シナリオ実行した場合にシナリオ実行エラーになる。

A12

何らかの原因で管理対象マシンとの通信が不通になった状態で中断を行ったとき、中断処理を完了できずに中断状態のままになります。この状態で中断解除後シナリオ実行を行ってもシナリオ実行エラーになります。
このような場合は、しばらく待ってから(10分程度)再度シナリオを実行してください。
それでも、シナリオ実行エラーが続く場合は、お手数ですが、以下の操作を行ってください。

管理対象マシンで「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「Deployment Manager Remote Update Service Client」を再起動してください。(停止していれば開始してください。)

Q13

Linuxの管理対象マシンに対してDPMクライアントの自動アップグレードシナリオを実行した後、別のリモートアップデートシナリオを実行したが開始されない。

A13

DPMクライアントの自動アップグレードシナリオを実行した場合に2分以内に別のリモートアップデートを実行するとDPMクライアントが正しく起動されません。DPMクライアントを再起動するか、OSを再起動してください。DPMクライアントを再起動する場合は、コンソールを起動して、以下を実行してください。

- ・ Red Hat Enterprise Linux 7以降
>systemctl stop depagt.service
>systemctl start depagt.service
- ・ Red Hat Enterprise Linux 7より前/SUSE Linux Enterprise
>service depagt stop
>service depagt start

Q14

Linuxの管理対象マシンに対してリモートアップデートを実行するとシナリオ実行エラーになる。

A14

イメージビルダで、サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストールを行う際に、「実行設定」画面の「セットアップパラメータ」に標準出力するオプションを指定している可能性があります。
「リファレンスガイド ツール編 1.5.3 Linuxパッケージ作成」を参照して、該当するオプションを指定していないかを確認してください。
該当するオプションを指定している場合は、そのパッケージを含むシナリオを削除した後に、該当するオプションを外したパッケージに修正してください。この修正したパッケージにて、シナリオファイルを作成した後、再度シナリオを実行してください。

Q15

x64のLinuxの管理対象マシンに対してマルチキャストによるリモートアップデートを実行するとシナリオ実行エラーになる。

A15

必要なライブラリがインストールされていない可能性があります。/lib/libgcc_s.so.1が存在するか確認してください。存在しない場合は、以下のrpmパッケージをインストールしてください。

libgcc-3.4.5-2.i386.rpm

インストール後は、DPMクライアントを起動するか、OSを再起動してください。

DPMクライアントを起動する場合は、コンソールを起動して以下を実行してください。

- ・ Red Hat Enterprise Linux 7以降
>systemctl start depagt.service
- ・ Red Hat Enterprise Linux 7より前/SUSE Linux Enterprise
>service depagt start

Q16

リモートアップデートのシナリオをマルチキャストで配信すると一部の管理対象マシンへのシナリオ実行に失敗する。

A16

以下のすべてに該当する場合は、リモートアップデートのシナリオをマルチキャストで配信をするとシナリオ実行に失敗します。

管理サーバの複数のLANボード配下に管理対象マシンを接続している場合は、LANボードごとに異なるシナリオを作成して、実行してください。

- ・ Webコンソール画面の「管理」ビュー→「DPMサーバ」アイコン→「詳細設定」画面→「全般」タブ→「IPアドレス」に「ANY」を選択している。
- ・ 管理サーバの複数のLANボード配下に管理対象マシンが、接続されている。

Q17

サービスパック/HotFixの自動インストールができません。

A17

Windows Server 2003 Service Pack1,2を登録する場合は、コマンドオプションに「/passive /norestart」を指定してください。

HotFixについても、コマンドオプションを確認して指定してください。

Q18

Linuxパッチの適用に失敗します。

A18

Linuxパッチ配布が失敗する場合は、以下の可能性が考えられます。

- 1.他のrpmパッケージに対して依存関係を持っている。
→依存関係にあるパッケージを先に配布してから、パッチを配信してください。
- 2.既に同じパッチが適用済みである。
- 3.rpmパッケージに署名が行われていない。
→適切なコマンドオプションの設定を行ってください。
詳細は、「リファレンスガイド ツール編 1.5.3 Linuxパッケージ作成」を参照してください。

3.5.6. バックアップ/リストア/ディスク構成チェック

- Q1
シナリオ作成時に指定したパーティション番号と、マシンの画面に表示されているパーティション番号が異なっている。
- A1
対象のHDDに隠しパーティションが存在している可能性があります。パーティション指定のバックアップ/リストアでは、オプションで"隠しパーティションを無視する"にチェックを入れている場合は、隠しパーティションをカウントに含めません。チェックを外すか、対応するパーティション番号を正しく入力し直してください。
- Q2
バックアップ/リストアの速度が遅い。
- A2
バックアップ速度は、バックアップするデータ内容やシナリオでの転送レート、ネットワーク負荷の増大や一時的な不調、HDDアクセスの一時的な遅延などの影響を受けます。
データ内容については、対象ディスクのファイル/フォルダ数、ファイルの種類やDPMでのデータ圧縮率(圧縮が効きやすいかなど)が関係します。
そのほか、DPMサーバの負荷増大や、バックアップイメージファイル保存先のディスク書き込み速度の影響もあります。
- Q3
バックアップのデータ転送中に突然、シナリオ実行エラーになった。
- A3
管理サーバの空き容量不足のため、データ転送ができなくなっている可能性があります。管理サーバのバックアップファイル保存先の空き容量を確認してください。空き容量不足では、バックアップは正常に動作しません。バックアップファイルの保存先を変えるか、空き容量を確保してください。
- Q4
指定したバックアップイメージファイルでリストアを実施したが、意図していないOSが起動した。
- A4
バックアップしたイメージファイルが別のマシンのバックアップイメージで上書きされた可能性があります。バックアップを行う際は、イメージファイル名が重複しないように注意してください。重複した場合は、以前のデータは上書きされます。
また、複数のマシンにバックアップを行う同一のシナリオを割り当て、同時に実行する場合は、シナリオファイルの「バックアップ/リストア」タブの入力テキストボックス下のマシン名、MACアドレス、UUIDのいずれかにチェックを入れてください。
- Q5
リストアを一斉実行しても、管理対象マシンのうち数台がシナリオ実行せず、「バックアップ/リストア実行一覧」画面には「リストア実行待ち」と表示される。
- A5
シナリオファイルの設定で"最大ターゲット数"が、実際に実行しようとしている台数より小さい可能性があります。この場合は、先に実行しているシナリオが終了したあと、残りのマシンのシナリオが開始されます。

Q6

リストアが実行待ちの状態からいつまでたっても実行されない。

A6

実行しているシナリオファイルの「バックアップ/リストア」タブ-「配信条件設定」グループボックスの「最大待ち時間」の設定が未入力の空欄になっている可能性があります。空欄になっていると、シナリオ実行の準備ができたマシンの数が「最大ターゲット数」の数に満たない間は、シナリオ実行されません。「バックアップ/リストア実行一覧」画面の「今すぐ開始」をクリックするか、いったん中断して、シナリオファイルの「最大待ち時間」に適切な値を設定して修正してください。

Q7

リストアのシナリオで最大ターゲット数を10に設定して作成し、10台のマシンに対して一斉実行しても、5台ずつしか実行されない。

A7

「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」→「ネットワーク」タブ→「同時実行可能台数」の値が"5"となっていると、最大ターゲット数の値が10であっても、5台ずつしか実行されません。10台同時に実行したい場合は、「詳細設定」の"同時実行可能台数"の値を10に変更してください。

Q8

最大転送レートを高く指定したのに、シナリオ実行時間が短縮されない。

A8

最大転送レートはお客様のネットワーク環境により大きく左右されます。ネットワーク環境の性能以上の転送レートを出すことはできません。

Q9

バックアップ/リストア(ユニキャスト)/ディスク構成チェックシナリオの実行が完了したのに「シナリオ実行一覧」のステータスは「準備中」のままとなっている。

A9

バックアップシナリオ、リストア(ユニキャスト)シナリオ、ディスク構成チェックシナリオが完了する前に、別マシンで同一シナリオを実行した場合は、Webコンソールから参照できる「シナリオ実行一覧」のステータスにはバックアップ/リストア、ディスク構成チェック完了時点からシナリオ実行完了時点までの間の状態を「準備中」と表示される可能性があります。動作上問題ありません。

Q10

マルチキャストによるリストアシナリオを実行中に「バックアップ/リストア実行一覧」でシナリオの実行状況を確認すると、シナリオが実行中にも関わらず、既に終了している则表示される場合や、シナリオが表示されない場合がある。

A10

「バックアップ/リストア実行一覧」は、シナリオを実行してもすぐには更新されません。バックアップ/リストア対象のDiskへの読み込みや、書き込みが開始されたタイミングで更新されます。それまでは、シナリオ実行前の状態が表示されます。更新前に画面を表示した場合は、しばらく待って再度画面を開くか、「画面更新」をクリックしてください。

Q11

バックアップの途中で何も表示されないままシナリオ実行エラーになる。

A11

正常にOSのシャットダウン処理を行わずにマシンの電源断を行った場合は、シャットダウン時に行われるディスクへの遅延書き込み完了処理が行われず、ファイルシステムが不正となる可能性があります。また、ディスクへのアクセス中にシャットダウン処理を行わず電源断を行った場合も、ディスク表面に物理的な破損を生じる可能性があります。

これらのディスクに対してバックアップを行うと、途中でシナリオ実行エラーになる場合があります。

このような場合は、OSの再セットアップ、ファイルシステムの修復ツールなどを使用して、ファイルシステムを修復し、再度バックアップしてください。

なお、ディスク表面に物理的な破損(不良セクタ)が存在する場合は、修復ツールなどを使用してもバックアップ/リストアできません。不良セクタが存在する場合は、新しいHDDに交換するか、HDDを物理フォーマットした後に、過去に採取したバックアップイメージでリストアし、復旧してください。

Q12

複数のリストアシナリオを一括で実行すると、最初に起動したマシンはシナリオが開始されるが、他のマシンは「getting Backup System image」と表示されたあと、すぐにシナリオ実行エラーになり、「シナリオ実行一覧」画面のマシンがエラー表示される。マシンの画面には次のようなメッセージが表示された。

「ERROR:Received the error from the PXE server.

Please contact your system administrator or support group.」

A12

シナリオ作成時に設定したマルチキャストIPアドレスがすべてのシナリオファイルで同じ値になっている可能性があります。「シナリオ編集」画面を開き、「バックアップ/リストア」タブ-「配信条件設定」グループボックスのマルチキャストIPアドレスの値を確認してください。他のリストアシナリオと同じIPアドレスを指定している場合は、一方のシナリオは正常にシナリオが開始されません。IPアドレスの値が重複しないようにシナリオ修正画面から入力し直してください。エラー表示されたマシンに「シナリオ実行エラー解除」を選択すると、エラー表示が消え、再度シナリオ実行ができます。

Q13

パーティション指定してリストアすると、以下のいずれかのエラーメッセージが表示され、シナリオ実行エラーになる。

「Cannot restore the data to a partition of a different size than the size you backed up.

Specify a partition with the following size.

(required size of a partition to restore)

(size of the specified partition)

(XXXXX bytes)

(XXXXX bytes)」

「Cannot restore the data to a partition of a different type than the type you backed up.

Specify a partition with the type same as you backed up.

(ID of the backed-up partition)

(ID of the specified partition)

(0xXX)

(0xXX)」

A13-1

バックアップ元とリストア先のパーティションサイズとファイルシステム種別が一致していることを確認してください。シナリオファイルの修正画面を開き、対応するパーティションを再度設定して、シナリオを実行してください。

A13-2

バックアップ元と異なるパーティションがリストア先として指定されている可能性があります。バックアップした時と同じパーティションにリストアしてください。シナリオファイルの修正画面を開き、対応するパーティションを再度設定して、シナリオを実行してください。

A13-3

管理対象マシン側に隠しパーティションが存在するため、"隠しパーティションを無視する"にチェックを入れて実行すると、バックアップ元と異なるパーティションを指定して実行しようとしている可能性があります。その場合は、"隠しパーティションを無視する"のチェックを外して、再度シナリオを実行してください。

Q14

バックアップ/リストアシナリオ実行時に、いつまでも処理が終了せず、管理対象マシン上に以下のメッセージが表示される。

```
「FS: Cannot open root device "" or xx:xx  
Please append a correct "root=" boot option  
Kernel panic: VFS: Unable to mount root fs on xx:xx」
```

A14

管理サーバと管理対象マシン間のLAN接続に問題があるか、管理サーバが高負荷状態である可能性があります。LAN の接続状態、および管理サーバの負荷状態を確認の上、マシンの電源をOFFにした後、再度シナリオを実行してください。

Q15

リストアシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラー状態となる。

```
「The size of the backup data to be restored is larger than that of the destination storage device. It cannot be  
restored.Specify a destination device whose size is larger than or equal to the following size.  
(minimum required size of a destination device)  
(the specified device: its size)  
(XXXXX bytes)  
(DeviceName: XXXXX bytes) .」
```

A15

バックアップ元のHDDサイズとリストア先のHDDサイズを確認してください。
リストア先のHDDサイズの方が小さい場合に本メッセージが出力される可能性があります。
バックアップ元のHDDサイズ以上のHDDにリストアを行ってください。

Q16

バックアップシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラー状態となる。

```
「Failed to backup.  
There is something wrong with the management information of the GPT disk.  
Check and repair the disk by CHKDSK or other tools,  
and re-execute the scenario.」
```

A16

バックアップ元のGPT形式のディスクの管理情報に異常があります。
OS上でディスクのチェック/修復を行い、シナリオを再実行してください。
チェック/修復ができない場合や、チェック/修復しても改善できない場合は、シナリオでフルセクタを指定して、バックアップシナリオを再実行してください。

Q17

リストアシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラー状態となる。

```
「Failed to restore.  
The data is not written to the destination storage device.  
Invalid data in the backup image.  
For this error, contact your sales or support representative.」
```

A17

バックアップ元のHyper-Vの仮想ディスクがGPT形式の場合は、DPM Ver6.2よりも前のバージョンで作成されたバックアップイメージファイルをリストアすると上記メッセージが表示される可能性があります。
バックアップイメージファイルに不正なデータが含まれているため、リストアすることができません。
シナリオ作成の際に「バックアップ/リストア」タブで、「フルセクタオプション」のチェックを入れて、バックアップシナリオを実行し、バックアップイメージファイルを再作成してください。

Q18

何らかの理由により、以下のメッセージが出てエラー終了した際、キーボードから「p」、または「r」を入力しても、シャットダウン、またはリブート処理が行われない。(キー入力認識されない。)
「ERROR:<エラーメッセージ>
Press 'p' key to poweroff, 'r' key to reboot:」

A18

USBキーボード/マウスを使用している一部の機種において、キーボード/マウスが認識できない為、キー入力ができない場合があります。
電源ボタンを押して(長押しして)、電源を切ってください。

Q19

リストア実行中にシナリオ実行中断を行った場合は、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示された。
「Failed to read or write the data in the managed machine.
For this error, contact your sales or support representative」

A19-1

シナリオ実行中断を行った場合に表示されるメッセージです。管理サーバと管理対象マシンの通信路が切断されるため、意図したサイズのデータを取得できなかったために表示されるメッセージです。
シナリオ実行中断処理としては問題ありません。

A19-2

リストア実行中にリストアデータが途中までしか読み出せませんでした。
バックアップイメージが壊れていないか、ネットワークトラブルなどがないか確認してください。

Q20

バックアップシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラー状態となる。
「Failed to backup.
The basic disks with non-512-byte sector is not supported.
(sector size of the specified device)

(XXXXX)」

A20

バックアップ元が4Kセクタのハードディスクかつベーシックディスク(MBR形式)の場合は、本メッセージが出力される可能性があります。
フルセクタバックアップを行ってください。
「シナリオ編集」画面の「バックアップ/リストア」タブで、「フルセクタオプション」のチェックを入れて再度シナリオを実行してください。

Q21

バックアップシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラー状態となる。
「Failed to backup.
The dynamic disks with non-512-byte sector is not supported.

(sector size of the specified device)

(XXXXX)」

A21

バックアップ元が4Kセクタのハードディスクかつダイナミックディスクの場合は、本メッセージが出力される可能性があります。

フルセクタバックアップを行ってください。

「シナリオ編集」画面の「バックアップ/リストア」タブで、「フルセクタオプション」のチェックを入れて再度シナリオを実行してください。

Q22

リストアシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラー状態となる。

「Failed to restore.

The data is not written to the destination storage device.

The dynamic disks with non-512-byte sector is not supported.

(sector size of the specified device)

(XXXXX)」

A22

パーティション指定リストアする時、指定したディスクが4Kセクタのハードディスクかつダイナミックディスクの場合は、本メッセージが出力される可能性があります。

512セクタのベーシックディスク(MBR形式)を指定して再度シナリオを実行ください。

Q23

リストアシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラー状態となる。

「Failed to restore.

The data is not written to the destination storage device.

The basic disks with non-512-byte sector is not supported.

(sector size of the specified device)

(XXXXX)」

A23

パーティション指定リストアする時、指定したディスクが4Kセクタのハードディスクかつベーシックディスク(MBR形式)の場合は、本メッセージが出力される可能性があります。

512セクタのベーシックディスク(MBR形式)を指定して再度シナリオを実行ください。

Q24

リストアシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラー状態となる。

「Failed to restore.

The data is not written to the destination storage device.

Cannot restore the data of a different sector size.

Please specify the appropriate device, and check if the specified Deploy-OS is correct.

(required sector size of a destination device)

(the specified device: its sector size)

(XXXXX bytes)

(DeviceName: XXXXX bytes)」

A24

バックアップ元のセクタサイズがリストア先と一致していない、または、指定した Deploy-OS が正しくない場合は、本メッセージが出力される可能性があります。

リストア先のディスクのセクタサイズを確認して、バックアップ元のセクタサイズに合っているディスクを選択してください。セクタサイズに問題がない場合は、指定したDeploy-OSを確認してください。

機種ごとの対応状況は以下の製品Webサイトを参照してください。

WebSAM DeploymentManager(<http://jpn.nec.com/websam/deploymentmanager/>)

→「動作環境」を選択

→「対応装置一覧」を選択

Q25

リストアシナリオをマルチキャストで配信すると、リストアが実行されずにシナリオ実行中断になる。

また、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示された後、再起動した。

(再起動後は、Webコンソール上の管理対象マシンのステータスにシナリオ実行エラーと表示された。)

「Failed to read or write the data in the managed machine.

For this error, contact your sales or support representative.

This System is reboot after XX seconds.

gzip : stdin : Unexpected end of file.」

A25-1

管理サーバが使用するIPアドレスに「ANY」を選択し、かつ、リストアシナリオをマルチキャストで配信した場合にこのような現象が発生する可能性があります。管理サーバが使用するIPアドレスに「ANY」以外(使用するLANボードに設定しているIPアドレス)を設定してください。設定方法については、「リファレンスガイド Webコンソール編 2.7.1.1 「全般」タブ」を参照してください。

A25-2

使用しているスイッチングハブ、ルータなどにマルチキャストを通す設定がなされているか確認してください。

Q26

シナリオ実行中に管理対象コンピュータ上で「boot:」や「login:」が表示され、処理が進まない。

A26

管理対象マシン上で「Ctrl」+「C」キーなど処理を停止するキー入力を実行された可能性があります。バックアップ/リストアシナリオ実行中は管理対象マシン上でキー入力を行わないでください。

Q27

管理対象マシンのPXEブートに失敗する。

A27

「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」→「DHCPサーバ」タブの内容が「DHCPサーバを使用しない」になっていませんか？

「DHCPサーバを使用しない」を選択している場合は、管理対象マシンはPXEブートできません。

PXEブートが必要な場合は、DHCPサーバを構築し、「DHCPサーバを使用する」を選択してください。

また、変更した設定は管理サーバ再起動後に有効になりますので、設定変更後は再起動を行ってください。

Q28

バックアップ/リストアシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラーになる。

「ERROR: FC storage configuration is different from the result of the disk configuration check scenario.
Please retry the disk configuration check scenario.」

A28-1

FC LUNを含む構成の場合にディスク構成チェックで取得した情報と異なるためエラーとなりました。以下のいずれかの構成変更を行った場合に発生する可能性があります。

- ・ LUNの追加/変更/削除
- ・ パスの冗長化設定の変更
- ・ FC LUNを含む構成を別構成(内蔵RAID構成など)へ変更、またはその逆

ディスク構成チェックを実行して新しい構成情報を取得し、シナリオを再実行してください。

必要に応じてディスク番号を再確認してください。

A28-2

FC LUNを含む構成(LUN構成、冗長化設定)がディスク構成チェックで取得した情報と異なるためエラーとなりました。パスの一部が物理的な破損などの理由で接続不可となった場合に上記のメッセージが表示される可能性があります。

パスの接続状態/冗長化設定を見直すか、ディスク構成チェックを実行して新しい構成情報を取得し、シナリオを再実行してください。必要に応じてディスク番号を再確認してください。

Q29

バックアップに比べて、リストアの方が時間がかかります。

A29

クライアントのストレージデバイスへの書込速度がサーバのストレージデバイスへの書込速度と比べて遅いことが原因で起こります。これは次の要因が考えられます。

- ・ RAID設定
- ・ ファイルシステムのNTFS圧縮が有効になっている。
- ・ ハードディスクにフラグメンテーションが多数発生している。
フラグメンテーションが原因の場合は、デフラグによって速度が向上する可能性があります。

Q30

リストアシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラー状態となる。

「Failed to restore.
The data is not written to the destination storage device.
Cannot restore the data to a disk of a different type
than you backed up.
(Type of the backed-up disk)
(Type of the specified disk)
(X)
(X)」

A30

バックアップ元のパーティション管理形式がリストア先と一致していない場合は、本メッセージが出力される可能性があります。

ディスク構成チェック結果に合わせて、シナリオを見直してから、シナリオを再実行してください。

バックアップ元がGPT形式の場合はリストア先もGPT形式を、バックアップ元がMBR形式の場合はリストア先もMBR形式を指定してください。

Q31

バックアップシナリオ実行時、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラー状態となる。

「Failed to backup.

The specified disk size is smaller than the calculated minimum disk size to restore. Check and repair the disk by fsck or other tools, then re-execute the scenario.

Or execute the scenario with full sector option specified.

(Disk Size)

(Minimum Disk Size)

(XXXXXXXXXX)

(XXXXXXXXXX)」

A31

管理データによって、算出したディスク容量は実際のディスク容量より大きい場合は、本メッセージが出力される可能性があります。

OS上でディスクのチェック/修復を行い、シナリオを再実行してください。

チェック/修復しても、改善できない場合は、シナリオにフルセクタオプションを設定して、シナリオを再実行してください。

Q32

バックアップ/リストア時に「Cannot find the corresponding disk(2)」と表示されます。

A32

シナリオ作成時に、ディスク番号の指定を間違えている可能性があります。

以下が設定されていることを確認の上、再度ディスク番号を指定してください。

- ・ バックアップまたはリストアを行いたいディスクとディスク番号が一致している。
- ・ バックアップまたはリストアを行う対象のマシンに認識できるストレージデバイスが接続されている。

Q33

バックアップ/リストア時に「Cannot find the corresponding partition (Disk:XX, Partition:XX)」と表示されます。

A33

シナリオに設定したパーティションが存在していない可能性があります。

ディスク構成チェック結果に合わせて、シナリオを見直してから、シナリオを再実行してください。

Q34

バックアップ中に、管理サーバ側のディスク容量不足となりシナリオ実行エラーとなります。

A34

管理サーバのバックアップ先のHDDの空き容量を増やしてください。

いったんテンポラリのファイルとしてバックアップイメージファイルを作成し、バックアップが完了した時点で前回のファイルに上書きします。このため、一時的にHDDの空き容量が必要となっています。

Q35

バックアップ/リストア時に処理が開始せず、以下のエラーが表示されます。

「Could not find IP address and NetworkDeviceName.」

A35

管理対象マシンに搭載のLANボードが、DPMでは対応していない可能性があります。

以下の確認を行ってください。

- ・ Express5800シリーズ

対応装置一覧にて、対応機種となっていること。

(該当の機種に対して、対応用のモジュールの適用が必要な旨の記載がある場合は、該当のモジュールが適用済みであること。)

※対応装置一覧に記載のないExpress5800シリーズの機種については、サポート窓口にお問い合わせください。

- ・ Express5800シリーズ以外の機種の場合

対応装置一覧の「DPMサポート対象デバイスの確認について」を確認の上、サポート窓口にお問い合わせください。

Q36

CDブートによるシナリオ実行で実際の処理が始まるまでに時間がかかります。

A36

CDブートによるシナリオ実行では、管理対象マシン上で検出したNICを順番に使用して管理サーバへの接続を試みます。複数のNICを搭載した管理対象マシンでは、管理サーバに接続しているNICを特定するまでに数十分の時間を要する場合があります。

管理サーバへ接続しているNICのeth番号が明らかな場合は、「DPMIP.conf」に「ClientEth:x」を追加してeth番号を指定することで、時間を短縮できます。設定方法については、「オペレーションガイド 付録 A DHCPサーバを使用しない場合の運用をする」の「バックアップ/リストア/ディスク構成チェックをする」を参照してください。

Q37

バックアップ/リストア/ディスク構成チェックシナリオ実行時に、管理対象マシン画面、またはイベントログに以下のいずれかのエラーメッセージが表示される。

管理対象マシン画面：

- ・ AddDrv.sh: ERROR: aarich2.o: Cannot get driver file.
- ・ AddDrv.sh: ERROR: a320raid.o: Cannot get driver file.
- ・ AddDrv.sh: ERROR: megaswr.o: Cannot get driver file.
- ・ AddDrv.sh: ERROR: megasr.ko: Cannot get driver file.

イベントログ：

- ・ ft: ERROR: Failed to search folder, Path = ..¥aarich2.o, ftsvc.cpp:xxx:xxx xx xxxx
- ・ ft: ERROR: Failed to search folder, Path = ..¥a320raid.o, ftsvc.cpp:xxx:xxx xx xxxx
- ・ ft: ERROR: Failed to search folder, Path = ..¥megaswr.o, ftsvc.cpp:xxx:xxx xx xxxx
- ・ ft: ERROR: Failed to search folder, Path = ..¥megasr.ko, ftsvc.cpp:xxx:xxx xx xxxx
- ・ File Download Failed. File Name:<ドライバファイル格納フォルダ>¥scsi¥aarich2.o, Client Mac:xx-xx-xx-xx-xx-xx.
- ・ File Download Failed. File Name:<ドライバファイル格納フォルダ>¥scsi¥a320raid.o, Client Mac:xx-xx-xx-xx-xx-xx.
- ・ File Download Failed. File Name:<ドライバファイル格納フォルダ>¥scsi¥megaswr.o, Client Mac:xx-xx-xx-xx-xx-xx.
- ・ File Download Failed. File Name:<ドライバファイル格納フォルダ>¥scsi¥megasr.ko, Client Mac:xx-xx-xx-xx-xx-xx.

※イベントログは同一ドライバファイル(xxxx.o/xxxx.ko)に対して通常は2種類のメッセージが表示されます。

※<ドライバファイル格納フォルダ>はDPM環境により異なります。

A37

管理対象マシン画面/イベントログに出力されたエラーメッセージに含まれるドライバファイル(xxxx.o/xxxx.ko)が、管理サーバにインストールされていない可能性があります。

以下のいずれかの方法でドライバファイルがインストールされているか確認してください。

方法1 : "File Download Failed. File Name:~"を参照する。

上記のエラーメッセージが出力されている場合は、メッセージの<File Name:>で指定されたドライバファイルが存

在しているか確認してください。

例:

出力されたイベントログ :
File Download Failed.
File Name: C:\Deploy\FD-Linux\drivers\ia32_121228_26\scsi\megasr.ko,
Client Mac: 12-34-56-78-9a-bc.
→ C:\Deploy\FD-Linux\drivers\ia32_121228_26\scsi\megasr.ko を確認する。

方法2 : "AddDrv.sh: ERROR:～", または "ft: ERROR: Failed to search folder～" を参照する。

1. 管理対象マシンに設定しているDeploy-OSのドライバファイル格納フォルダを取得する。

「Deploy-OS」に設定している値	ドライバファイル格納フォルダ ※
デフォルト値を使用	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux\drivers%<デフォルト> 上記の<デフォルト>とは、DPMサーバの「詳細設定」→「全般」タブ-「Deploy-OSのデフォルト値(IA32)」に表示されている名前です。デフォルトは、「ia32_110331_26」です。
NEC Express5800 001	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux\drivers\ia32_080331_24
NEC Express5800 002	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux\drivers\ia32_110331_26
VMware ESX Virtual Machine 001	
Microsoft Hyper-V Virtual Machine 001	
NEC Express5800 006	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux\drivers\ia32_121228_26
VMware ESXi Virtual Machine 002	
Microsoft Hyper-V Virtual Machine 002	
VMware ESXi Virtual Machine 003	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux\drivers\ia32_150413_26
その他	<イメージ格納用フォルダ>%FD-Linux\drivers%\ia32_XXXXXX_XX> 上記の<ia32_XXXXXX_XX>は、対応する機種対応モジュールの手順書を参照して決定してください。 例: DPM60_007xの場合→ia32_130726_26となります。 (x: 英小文字)

※イメージ格納用フォルダのデフォルトはC:\Deployになります。

※ブータブルCDの場合は管理対象マシンに設定しているDeploy-OSと一致している必要があります。

2. 上記で取得したドライバファイル格納フォルダ配下に、エラーメッセージに含まれるドライバファイル(XXXX.o/XXXX.ko)が存在しているか確認する。

例:

出力されたイベントログ :
ft: ERROR: Failed to search folder, Path = ..\megasr.ko, ftsvc.cpp:874:Dec 22 2014
管理対象マシンのDeploy-OS :
NEC Express5800 002
→ C:\Deploy\FD-Linux\drivers\ia32_110331_26 配下を確認する。
C:\Deploy\FD-Linux\drivers\ia32_110331_26\scsi に megasr.ko が存在した。

上記の確認方法によってドライバファイル(XXXX.o/XXXX.ko)が存在しない場合は、以下の製品Webサイトよりドライバパックをインストールする必要があります。

WebSAM DeploymentManager(<http://jpn.nec.com/websam/deploymentmanager/>)
→「動作環境」を選択

→「対応装置一覧」を選択

対応装置一覧の注意事項に記載のドライバパック専用ページより、モジュールをダウンロードして同梱の手順書に沿って適用してください。

なお、「管理サーバを使用せずにリストア(ローカルリストア)する」運用の場合は、ローカルリストア用ブータブルCDを元のブータブルCDと同じ方法で再作成してください。

上記の作業後にシナリオを再実行してください。

Q38

バックアップ/リストア/ディスク構成チェックシナリオ実行時に、管理対象マシン画面に以下のエラーメッセージが表示され停止する。

「BUG: soft lockup - CPU#0 Stuck for 67s!」

※CPU番号は動作環境により異なります。

A38

本現象は管理対象マシンがVMware ESXi 5.1以降の仮想マシンであり、かつ複数CPUで構成されている場合に、Deploy-OSで動作遅延が発生しsoft lockupエラーが検出された可能性があります。

以下に本現象回避用のパッチモジュールの適用条件/入手先を記載します。

[適用条件]

- ・ VMware ESXi 5.1以降の仮想マシンを管理対象マシンとする。

[本現象回避用のパッチモジュール入手先]

- ・ <インストール媒体>¥DPM¥TOOLS¥PreventSoftLockup_Module

※適用手順についてはフォルダ直下の手順書を参照してください。

パッチモジュールを適用していただくことでsoft lockupエラーを抑止し本現象が改善される可能性があります。

Q39

バックアップイメージファイルをNAS等のネットワーク接続しているストレージ装置に出力することはできますか？

A39

直接ネットワークに接続しているストレージ装置上にバックアップイメージファイルを出力可能かどうかはストレージの仕様に依存します。

DドライブやEドライブのように管理サーバの内蔵ドライブとして認識され、管理サーバにストレージ上のファイルを作成する権限があれば可能です。(事前の検証を行ってください。)

DPMへの設定など、詳細については「リファレンスガイド Webコンソール編 3.13.4 「バックアップ/リストア」タブ」の「■ネットワークに接続している他のマシン(以下ファイルサーバと呼びます)にバックアップイメージファイルのパスの指定を行う場合は、以下を行ってください。」を参照してください。

3.5.7. BIOS/ファームウェア用フロッピーディスクのイメージ配信

Q1

BIOS/ファームウェア用フロッピーディスクのイメージ配信を行うシナリオを実行後、管理対象マシンがネットワークブートしなくなった。

A1

BIOSのアップデートを行うと、BIOSの設定内容がデフォルトに戻る場合があります。ネットワークブートの優先順位が変更されていないか、ご確認ください。変更されている場合は順位の先頭にネットワークブートを指定してください。

Q2

BIOS/ファームウェア用フロッピーディスクのイメージ配信、またはサービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストールのシナリオを実行すると、シナリオ実行エラーになる。

A2-1

実行中断処理は正しく行われましたか？中断処理中に中断を解除してシナリオを実行すると、シナリオ実行エラーになる場合があります。

A2-2

実行中のシナリオと同じシナリオを別のマシンに対して実行しようとしていませんか？同じシナリオを同時に複数のマシンに実行する場合は、マルチキャスト配信条件の最大ターゲット数を実行させたいマシンの数に設定してから、シナリオ実行してください。

Q3

BIOS/ファームウェア用フロッピーディスクのイメージ配信、OSクリアインストールのシナリオを実行した後、マシンが再起動する前に、シナリオ実行エラーになる。

A3

実行前にシナリオの「オプション」タブの「シナリオ開始時に対象マシンのOSを再起動する」設定をしていますか？していない場合は、電源が入っているマシンに対しては、シナリオは実行されません。シナリオを修正するか、マシンの電源を切ってから再度お試しください。

3.6. 管理対象マシンの登録

Q1

管理対象マシンの電源をONにしても、新規登録されない。

A1-1

DHCPサーバの設置や場所の設定が間違っているか、DHCPサーバが正常に動作していない可能性があります。以下の項目を確認してください。

- ・ Web コンソールの「管理」ビュー→「DPM サーバ」→「詳細設定」→「DHCP サーバ」タブを選択し、「DHCP サーバを使用する」の設定が正しく行われていることを確認してください。
- ・ リースすべき IP アドレスを持つ DHCP スコープが、非アクティブになっていないことを確認してください。
- ・ DHCP サーバが承認され、IP アドレスがリースできることを確認してください。
- ・ DHCP のアドレスプールが枯渇していないことを確認してください。枯渇している場合は、十分な量のアドレスを確保してください。
- ・ Windows 以外の DHCP サーバを使用している場合は、固定アドレス設定が行われていることを確認してください。

A1-2

管理対象マシンがPXEブートに対応していない機種であるか、ネットワークの起動順位がHDDよりも下位に設定されている可能性があります。

BIOS/UEFIの設定でネットワークの起動順位を確認してください。BIOS/UEFIの確認方法については販売元にご確認ください。

DHCPサーバを使用しない運用を行う場合は、「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」→「DHCPサーバ」タブ-「DHCPサーバを使用しない」に変更すると、設定を有効にするために管理サーバの再起動が必要になります。管理サーバを再起動した後に、マシンを再起動してください。

管理対象マシンに複数LANボードが実装されている場合は、DPMの通信に使用するLANボードがDPMサーバに登録されたのかを確認してください。

3.7. 自動更新

Q1

「監視」ビュー→「自動更新結果一覧」画面を起動し、該当するマシンと日時の詳細情報を確認すると、エラーログ情報が登録されている。

A1

詳細情報を確認し、それぞれの処理を行ってください。
処理完了後に自動更新を行う場合は、管理対象マシンを再起動してください。

<詳細情報1>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ 自動更新準備中エラーが発生しました。
- ・

「説明」管理サーバのリソースが不足した可能性があります。管理サーバを再起動してください。

<詳細情報2>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ ソケットエラーが発生しました。
- ・

「説明」WinSockの初期化に失敗しました。

管理サーバのネットワーク設定(TCP/IPプロトコルが実装されているか)を確認してください。問題がない場合は、管理サーバを再起動してください。

<詳細情報3>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ クライアントとの接続に失敗しました。
- ・

「説明」管理サーバが管理対象マシンと接続できませんでした。

- (1) マシンに対して以下の手順で「ping」を実行してください。
コマンドプロンプトで「ping IPアドレス」または「ping ホスト名」と入力して「Enter」を押します。(pingとIPアドレス/ホスト名の間には半角スペースを入れてください。)
応答がない場合は、ネットワークの設定に問題がないか確認してください。
- (2) ネットワークに問題がなければ、マシン側で以下のサービスを再起動してください。(停止していれば開始してください。)
DeploymentManager Agent Service
DeploymentManager Remote Update Service Client

<詳細情報4>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ クライアントに適用できるパッケージの検索に失敗しました。
- ・

「説明」エラーとなったマシンは、自動更新機能に対応していないOSである可能性があります。マシンのOSと言語を確認してください。下記は、自動更新機能に対応しているOSの一覧です。言語は「日本語」に対応しています。

OS名
Windows XP Professional
Windows Server 2003 Standard Edition
Windows Server 2003 Enterprise Edition
Windows Server 2003 Standard x64 Edition

Windows Server 2003 Enterprise x64 Edition
Windows Server 2003 R2 Standard Edition
Windows Server 2003 R2 Enterprise Edition
Windows Server 2003 R2 Standard x64 Edition
Windows Server 2003 R2 Enterprise x64 Edition
Windows Vista Business
Windows Vista Enterprise
Windows Vista Ultimate
Windows Server 2008 Standard
Windows Server 2008 Enterprise
Windows Server 2008 Standard x64
Windows Server 2008 Enterprise x64
Windows Server 2008 R2 Standard
Windows Server 2008 R2 Enterprise
Windows Server 2008 R2 Datacenter
Windows 7 Professional
Windows 7 Ultimate
Windows 7 Enterprise
Windows 7 Professional x64
Windows 7 Ultimate x64
Windows 7 Enterprise x64
Windows Server 2012 Standard
Windows Server 2012 Datacenter
Windows 8 Pro
Windows 8 Enterprise
Windows 8 Pro x64
Windows 8 Enterprise x64
Windows Server 2012 R2 Standard
Windows Server 2012 R2 Datacenter
Windows 8.1 Pro
Windows 8.1 Enterprise
Windows 8.1 Pro x64
Windows 8.1 Enterprise x64
Windows 10 Pro
Windows 10 Enterprise
Windows 10 Pro x64
Windows 10 Enterprise x64
Windows Server 2016 Standard
Windows Server 2016 Datacenter

<詳細情報5>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ クライアントとの接続の再確認に失敗しました。
- ・

「説明」マシンとの通信エラーが発生しました。

- (1) マシンに対して以下の手順で「ping」を実行してください。
 コマンドプロンプトで「ping IPアドレス」または「ping ホスト名」と入力して「Enter」を押します。(pingとIPアドレス/ホスト名の間には半角スペースを入れてください。)
 応答がない場合は、ネットワークの設定に問題がないか確認してください。
- (2) ネットワークに問題がなければ、マシン側で以下のサービスを再起動してください。
 (停止していれば開始してください。)
 DeploymentManager Agent Service
 DeploymentManager Remote Update Service Client

<詳細情報6>

- ・ コンピュータ:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ クライアント側のファイル生成に失敗しました。

・

「説明」マシンのディスク容量が不足している可能性があります。

管理対象マシンのディスクの空き容量を確認してください。通常、ディスクの空き容量は転送するパッケージ容量の3倍以上必要です。

例)

100MByteのパッケージを適用する場合は、管理対象マシンのシステムドライブの空き容量は300MByte以上必要です。

<詳細情報7>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ ファイル転送準備時にエラーが発生しました。
- ・

「説明」ファイル転送前の処理でエラーが発生しました。

管理サーバのリソースが不足した可能性があります。管理サーバを再起動してください。

<詳細情報8>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ ファイル転送スレッドの生成に失敗しました。
- ・

「説明」WindowsAPI(CreateThread())の呼び出しに失敗しました。

管理サーバ側のリソースが不足した可能性があります。管理サーバを再起動してください。

<詳細情報9>

- ・ マシン xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ ファイル転送コントロールスレッドの生成に失敗しました。
- ・

「説明」WindowsAPI(CreateThread())の呼び出しに失敗しました。

管理サーバ側のリソースが不足した可能性があります。管理サーバを再起動してください。

<詳細情報10>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ ファイル xxxxxxxx 転送時にエラーが発生しました。
- ・

「説明」ファイル転送中通信エラーが発生しました。

(1) マシンに対して以下の手順で「ping」を実行してください。

コマンドプロンプトで「ping IPアドレス」または「ping ホスト名」と入力して「Enter」を押します。(pingとIPアドレス/ホスト名の間には半角スペースを入れてください。)

応答がない場合は、ネットワークの設定に問題がないか確認してください。

(2) ネットワークに問題がなければ、マシン側で以下のサービスを再起動してください。

(停止していれば開始してください。)

DeploymentManager Agent Service

DeploymentManager Remote Update Service Client

<詳細情報11>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ クライアントへのファイル転送に失敗しました。
- ・

「説明」ファイル転送中通信エラーが発生しました。

(1) マシンに対して以下の手順で「ping」を実行してください。

コマンドプロンプトで「ping IPアドレス」または「ping ホスト名」と入力して「Enter」を押します。(pingとIPアドレス/ホスト名の間には半角スペースを入れてください。)

応答がない場合は、ネットワークの設定に問題がないか確認してください。

- (2) ネットワークに問題がなければ、管理対象マシン側で以下のサービスを再起動してください。
(停止していれば開始してください。)

DeploymentManager Agent Service

DeploymentManager Remote Update Service Client

- (3) マシン上で転送中のファイルが他のプロセスによって使用されている可能性があります。

マシン上でウイルススキャンソフトなどが動作している場合は、転送中のファイルがウイルススキャンソフトによってロックされ転送に失敗する可能性があります。その場合は、次回自動更新実行時に再度ファイルの転送を行い適用を行います。

<詳細情報12>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ パッケージ xxxxxxxx 実行時にエラーが発生しました。
- ・

「説明」パッケージをマシンに転送しましたが、実行時にエラーが発生しました。

- (1) マシンに対して以下の手順で「ping」を実行してください。
コマンドプロンプトで「ping IPアドレス」または「ping ホスト名」と入力して「Enter」を押します。(pingとIPアドレス/ホスト名の間には半角スペースを入れてください。)
応答がない場合は、ネットワークの設定に問題がないか確認してください。
- (2) ディスク容量が不足になった可能性があります。
マシンのディスク容量が不足した場合に発生します。マシンのディスクの空き容量を確認してください。通常、ディスクの空き容量は転送するパッケージ容量の3倍以上必要です。
例)
100MByteのパッケージを適用する場合は、管理対象マシンのシステムドライブの空き容量は300MByte以上必要です。
- (3) 解凍に失敗した可能性があります。
マシンに転送したパッケージに問題があるかどうかを確認してください。パッケージがマシン上で解凍できるかどうか確認してください。

<詳細情報13>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新開始
- ・ クライアントからの「自動更新終了」応答を受け取れませんでした。
- ・

「説明」

- (1) マシンに対して以下の手順で「ping」を実行してください。
コマンドプロンプトで「ping IPアドレス」または「ping ホスト名」と入力して「Enter」を押します。(pingとIPアドレス/ホスト名の間には半角スペースを入れてください。)
応答がない場合は、ネットワークの設定に問題がないか確認してください。
- (2) ネットワークに問題がなければ、管理対象マシン側で以下のサービスを再起動してください。
(停止していれば開始してください。)
- DeploymentManager Agent Service
DeploymentManager Remote Update Service Client

<詳細情報14>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新通知開始
- ・ ソケットエラーが発生しました。
そのようなホストは不明です。
- ・

「説明」

- (1) マシンに対して以下の手順で「ping」を実行してください。
コマンドプロンプトで「ping IPアドレス」または「ping ホスト名」と入力して「Enter」を押します。(pingとIPアドレス/ホスト名の間には半角スペースを入れてください。)
応答がない場合は、ネットワークの設定に問題がないか確認してください。
- (2) ネットワークに問題がなければ、管理対象マシン側で以下のサービスを再起動してください。(停止していれば開始してください。)

ば開始してください。)

DeploymentManager Agent Service

DeploymentManager Remote Update Service Client

<詳細情報15>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新時間設定開始
- ・ クライアントが自動更新中、またシナリオ実行中の状態であるため、自動更新時間設定はクライアントの再起動後に有効になります。
- ・

「説明」自動更新時間設定はマシンの次回起動時に有効になります。

<詳細情報16>

- ・ マシン:xxx (MAC:xx-xx-xx-xx-xx-xx)
- ・ 自動更新時間設定開始
- ・ クライアントの設定に失敗しました。
自動更新時間設定はクライアントの再起動後に有効になります。
- ・

「説明」

管理対象マシンの電源状態がOFF、または通信ポートが閉じられた状態であるため管理対象マシンとの接続に失敗しました。自動更新時間設定はマシンの次回起動時に有効になります。

Q2

自動更新で同じパッケージが繰り返し配信される。

A2

管理サーバがパッケージの適用が行われたと判断するまでは自動更新の度に繰り返し配信が行われます。下記を確認し、それぞれの処理を行ってください。

- ・ パッケージのタイプがHotFix
 - MS番号が間違っている。
MS番号を確認し、誤りがある場合は修正してください。
 - MS番号では識別できないHotFixである。
識別情報を設定してください。
 - OSと言語に誤りがある。
OSと言語を確認し、誤りがある場合は修正してください。
 - 識別情報に誤りがある。
識別情報のファイルパスにテキスト形式などのファイルバージョンがないファイルを指定した場合、ファイルバージョンを指定すると適用状態を正しく判断できません。ファイルバージョンを指定している場合は、空に修正してください。また、テキスト形式のファイルで変更タイプに「書き換え」「バージョンアップ」を指定した場合も同様に適用状態を正しく判断できません。テキスト形式のファイルの場合は、変更タイプには「新規」もしくは「削除」を指定してください。
- ・ パッケージのタイプがサービスパック
 - メジャーバージョン、マイナーバージョンが間違っている。
メジャーバージョン、マイナーバージョンを確認し、誤りがある場合は修正してください。
 - OSと言語に誤りがある。
OSと言語を確認し、誤りがある場合は修正してください。
 - 識別情報に誤りがある。
サービスパックの場合は、識別情報は必要ありません。メジャーバージョンとマイナーバージョンに正しい値を入力してください。
- ・ パッケージのタイプがアプリケーション
 - 表示名、表示バージョンが間違っている。
表示名、表示バージョンを確認し、誤りがある場合は、修正してください。
 - OSと言語に誤りがある。

OSと言語を確認し、誤りがある場合は修正してください。

- 識別情報に誤りがある。

識別情報のファイルパスにテキスト形式などのファイルバージョンがないファイルを指定した場合は、ファイルバージョンを指定すると適用状態を正しく判断することができません。ファイルバージョンを指定している場合は、空に修正してください。また、テキスト形式のファイルで変更タイプに「書き換え」「バージョンアップ」を指定した場合も同様に適用状態を正しく判断することができません。テキスト形式のファイルの場合は、変更タイプには「新規」もしくは「削除」を指定してください。

Q3

自動更新エラーが、画面に表示され自動更新が失敗する。

A3

管理サーバのディスク容量が不足している可能性があります。

管理サーバのディスク容量を確認してください。ディスク容量が不足している場合は、必要なディスク容量を確保した後、管理サーバの再起動をしてください。

3.8. 自動ダウンロード

Q1

自動ダウンロードでエラーが発生しました。「管理」ビュー→「DPMサーバ」→パッケージのダウンロード設定画面の最終ダウンロード情報欄に「XXXX/XX/XX XX:XX:XX 自動ダウンロード失敗」と表示され、イベントビューアを確認すると、エラーログ情報が登録されている。

A1

イベントビューアに登録されたログ情報を確認し、それぞれの処理を行ってください。

処理完了後に、再度、自動ダウンロードを行ってください。

<ログ情報1>

- DownloadFile: Failed to create the download directroy, Dir = XXX

「説明」ディレクトリの作成に失敗しました。

管理サーバのディスク容量が十分でない場合に発生します。ディスクの空き容量を確認してください。

<ログ情報2>

- DownloadFile: Failed to parse URL, URL = XXX

「説明」アドレスを解析できません。

パッケージWebサーバのアドレスが正しくない可能性があります。使用できない文字が使われていないか、ポート番号の設定が正しいかなどを確認してください。詳しくは、「リファレンスガイド Webコンソール編 2.7.3 パッケージのダウンロード設定」を参照してください。

<ログ情報3>

- DownloadFile: Failed to connect proxy server, Serve Name = XXX

「説明」プロキシサーバに接続できません。

以下の項目を(1)から順に確認してください。

(1)プロキシサーバのアドレスが正しくない可能性があります。使用できない文字が使われていないか、ポート番号の設定が正しいかなどを確認してください。

(2)ネットワーク設定が正しくない可能性があります。

プロキシサーバにユーザ認証を設定していないか確認してください。プロキシを使用する場合は、HTTPのプロキシを使用してください。

<ログ情報4>

- DownloadFile: Failed to connect server, Serve Name = XXX

「説明」パッケージWebサーバとの接続に失敗しました。

以下の項目を(1)から順に確認してください。

- (1) パッケージ Web サーバのアドレスが正しくない可能性があります。使用できない文字が使われていないか、ポート番号の設定が正しいかなどを確認してください。
- (2) ネットワーク設定が正しくない可能性があります。
プロキシサーバにユーザ認証を設定していないか確認してください。プロキシを使用する場合は、HTTPのプロキシを使用してください。

<ログ情報5>

- ・ DownloadFile: Web server happened exception, Serve Name = YYY.
イベントビューアに登録されたログ情報は次の詳細メッセージを参照してください。
SendRequest: Http response error status = XXX
(XXXの可能値は: 500、501、502、503、504、505)

エラーコードXXXは、「RFC2616」で規定されたものです。詳細については、「RFC2616」を参照してください。

<ログ情報6>

- ・ DownloadFile: Failed to get response or response is error, URL = YYY.
イベントビューアに登録されたログ情報は次の詳細メッセージを参照してください。
SendRequest: Http response error status = XXX
(XXXの可能値は: 400、401、402、403、404、405、406、407、408、409、410、411、412、413、414、415)

エラーコードXXXが示すエラーメッセージは、「RFC2616」に沿ったエラーコードが付与されています。詳細については、「RFC2616」を参照してください。

例)

SendRequest: Http response error status = 404
→指定されたURLは存在しません。

<ログ情報7>

- ・ DownloadFile: : The free disk isn't enough to download, URL = XXX.
「説明」管理サーバのディスク容量が十分でない場合に発生します。ディスクの空き容量を確認してください。

<ログ情報8>

- ・ DownloadFile: The file can't be refresh, Filename = xxx.
「説明」ファイルの更新に失敗しました。「xxx」に該当するファイルが使用中かどうか確認し、使用中の場合は終了させてから、再度ダウンロードを行ってください。

<ログ情報9>

- ・ PmDIDownloadPackages: Failed to compress files, Web Server ID = xxx, Package ID = xxx.
「説明」管理サーバのディスク容量が十分でない場合に発生します。ディスクの空き容量を確認してください。

Q2

自動ダウンロードの設定を行っているが、設定時刻になっても実行されない。

A2

以下の項目を(1)から順に確認してください。

- (1) 「管理」ビュー→「DPM サーバ」→「パッケージのダウンロード設定」画面の「最終ダウンロード情報」を確認してください。
「XXXX/XX/XX XX:XX:XX 自動ダウンロード失敗」となっている場合は、「3.8 自動ダウンロード」のログ情報1～9を参照してください。
- (2) 「パッケージのダウンロード設定」画面で指定する自動ダウンロード対象に、パッケージ Web サーバが追加されているか確認してください。いずれのパッケージ Web サーバも追加していない場合は、自動ダウンロードは実行されません。パッケージ Web サーバ追加後に再度自動ダウンロードを行ってください。
- (3) 「パッケージのダウンロード設定」画面の「自動ダウンロードを行うにチェックが入っているか確認してください。チェックが入っていない場合は、自動ダウンロードは行われません。
上記手順で解決できない場合は、自動更新が実行中でないことを確認し、管理サーバを再起動してください。

3.9. 電源 ON

- Q1
電源ON、またはシナリオ実行で、マシンの電源がONされない。
- A1
POST画面中、強制的に電源をOFFにすると次回起動時にリモート電源ONしない場合があります。
その場合は、POST画面の完了後電源をOFFにするか、OSを起動してシャットダウンを行ってください。
- Q2
電源はONしているのにマシンのアイコン表示が電源OFFになっている。
- A2
画面の更新が行われていない可能性があります。「操作」メニューの「画面更新」をクリック、または「F5」キーを押して、画面を更新させてください。
- Q3
電源はONしているのに管理対象マシン一覧でリモート電源ONエラーと表示された。
- A3
管理対象マシンがPXEブートに対応していない機種、またはネットワークの起動順位がHDDよりも下位に設定されている可能性があります。
BIOS/UEFIの設定でネットワークの起動順位を確認してください。BIOS/UEFIの確認方法については販売元にご確認ください。
- Q4
VMware ESXiの仮想マシンに対して電源ON、またはシナリオ実行を行っても、マシンの電源がONされない。
- A4
VMware ESXiの仮想マシンはリモート電源ONに対応していないため、電源ONができません。手動で電源ONしてください。

3.10. スケジュール管理

- Q1
電源管理スケジュールを設定したのに、設定した時刻にマシンが電源ON/シャットダウンされていない。
- A1
マシンがシナリオ実行中だった可能性があります。電源ON/シャットダウンに指定していた時刻にマシンがシナリオ実行中だった場合は、電源ON/シャットダウンは実行されません。

3.11. マシン情報インポート/エクスポート

Q1

マシンの情報をインポートしたのに管理対象マシン一覧にマシンが表示されない。

A1

「操作」メニューの「画面更新」をクリック、または「F5」キーを押して画面更新すると表示されます。

3.12. ネットワーク設定

Q1

以下のエラーメッセージが表示された。

「サーバのコンピュータ名の取消に失敗しました。ネットワーク環境を確認して再度起動してください。」

A1

ネットワークに接続されていない可能性があります。

ネットワークのケーブルが接続されているかどうか確認して再起動してください。

Q2

DHCPサーバと管理サーバを別々のマシンにしたら、マシンのMACアドレスの取得ができなくなった。

A2-1

管理サーバ上に構築したDHCPサーバが起動している可能性があります。管理サーバで、「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択して、サービス"DHCP Server"が停止していることを確認してください。起動している場合は、プロパティ画面よりスタートアップの種類を無効にして、サービスを停止してください。

A2-2

Webコンソールの「管理」ビュー→「DPMサーバ」アイコン→「詳細設定」画面の「DHCPサーバ」タブで「DHCPサーバが別のマシン上で動作している」にチェックが入っていない可能性があります。「DHCPサーバが別のマシン上で動作している」にチェックが入っていることを確認してください。チェックが入っていない場合は、チェックを入れて、「OK」ボタンをクリックしたあと、管理サーバを再起動してください。(管理サーバの再起動が不可の場合は、「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「付録 A サービス一覧」に記載のすべてのサービスを停止後、停止したサービスをすべて開始してください。)

Q3

管理対象マシンがネットワークブートしないため、シナリオが実行できない。

A3

BIOSの設定で、ネットワークブート順位がHDDよりも低く設定されている可能性があります。PXEネットワークブートの起動順位をHDDよりも上にして、再度実行し直してください。

Q4

複数のLANボードを使用して異なるネットワークを管理しようとしていて以下のエラーが表示された。

「PXE-E51: No DHCP or proxyDHCP offers were received.」

「PXE-E55: ProxyDHCP service did not reply to request on port 4011.」

A4

以下の(1)/(2)の手順を行ってください。

(1)DHCPサーバが使用するIPアドレスを変更します。

- 1) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「DHCP」を選択します。
- 2) 「DHCP」画面が表示されますので、ツリービューからサーバ名を右クリックして「プロパティ」を選択します。
- 3) プロパティ画面が表示されますので、「詳細設定」タブを選択し、「結合」ボタンをクリックします。
- 4) 「結合」画面が表示されますので、使用するIPアドレスのみにチェックを入れて、「OK」ボタンをクリックします。
- 5) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「サービス」を選択し、「DHCP Server」を再起動してください。

(2)DPMが使用するIPアドレスを変更します。

- 1) Webコンソールの「管理」ビュー→「DPMサーバ」アイコン→「詳細設定」→「全般」タブ→「サーバ情報」→「IPアドレス」に(1)で設定したIPアドレスを設定してください。

Q5

管理サーバとDHCPサーバを別々のマシンにすると、ネットワークブート時に以下のエラーが表示された。

「PXE-E55: ProxyDHCP service did not reply to request on port 4011..」

A5

DHCPサーバのオプションにオプション60(060 Class ID)を設定しているDHCPサーバが存在する可能性があります。DHCPサーバのオプション設定を確認して、オプション60(060 Class ID)の設定を解除してください。

Q6

管理サーバのデフォルトゲートウェイを変更した後に、ネットワークブート時に以下のエラーが表示された。

「PXE-E55: ProxyDHCP service did not reply to request on port 4011..」

A6

Windows OSではデフォルトゲートウェイを変更することでネットワークプロファイルが変更される場合があります。変更後のネットワークプロファイルで、DPMの使用するポートが開放されていない可能性があります。現在有効になっているネットワークプロファイルを確認し、DPMで使用するポートが開放されているか確認してください。

開放されていない場合は、DPMで使用するポートを開放してください。

設定方法については、「リファレンスガイド ツール編 3.1 ポート開放ツール」を参照してください。

Q7

シナリオを実行すると以下のエラーが表示された。

「PXE-E16: No offeres were received.」
「PXE-E51: No DHCP or proxyDHCP offers were received.」
「PXE-E53: No boot filename received」
「PXE-E55: ProxyDHCP service did not reply to request on port 4011..」

A7-1

DHCPサーバの設置場所設定が正しくありません。

DPMのメインウィンドウ画面の「管理」ビュー→「DPMサーバ」から「詳細設定」画面を開き、「DHCPサーバ」タブの設定が正しいかを確認してください。

既に正しく設定されている場合も、再度設定してください。

設定が正しいにも関わらずエラーが表示される場合は、いったん現在とは違う設定(実際の環境が「DHCPサーバがDPMサーバと同じマシン上で動作している」なら「DHCPサーバが別のマシン上で動作している」、「DHCPサーバが別のマシン上で動作している」なら「DHCPサーバがDPMサーバと同じマシン上で動作している」)にした後、正しく設定しなおしてください。

例)

「DHCPサーバがDPMサーバと同じマシン上で動作している」を設定している場合

- (1)「DHCPサーバが別のマシン上で動作している」を選択する。
- (2)「OK」ボタンをクリックする。

- (3)画面に表示されるメッセージに添ってサービスを再起動する。
- (4)「DHCPサーバがDPMサーバと同じマシン上で動作している」を選択する。
- (5)「OK」ボタンをクリックする。
- (6)画面に表示されるメッセージに添ってサービスを再起動する。

A7-2

DHCPのアドレスプールが枯渇していないことを確認してください。枯渇している場合は、十分な量のアドレスプールを確保してください。

A7-3

LANスイッチで、STP(スパニングツリープロトコル)のチェックが行われていないことを確認してください。

Q8

複数のLANボードがあるマシンに同一セグメントのIPアドレスを割り振ると電源状態が検知できなくなった。

A8

LANケーブルを接続していないLANボードに固定IPを割り当てた場合は、正しく通信できない可能性があります。LANケーブルを接続していないLANボードには固定IPを割り当てずDHCP設定とするか、未設定としてください。

Q9

ネットワークブート中、管理対象マシンの画面に以下のメッセージが表示され、シナリオ実行エラーとなる。

「PXE-E32: TFTP open timeout」

A9

Windowsファイアウォールやセキュリティ対策ソフトウェアなどのポートブロック機能によって、TFTPポート(ポート番号: 69)がブロックされている可能性があります。管理サーバがインストールされているOSにおいて、TFTPポートがブロックされていないか確認してください。DPMでの運用を行うためには、TFTPポートのブロックを解除する必要があります。

Q10

別セグメントに存在する管理対象マシンのネットワークブートを行うと以下のエラーが表示された。

「PXE-E16: No offer received.」

A10

DHCPサーバのスコープオプションでルータオプションが設定されていない可能性があります。

ルータオプションを設定してから、ネットワークブートを再実行してください

「ファーストステップガイド 2.2.1 ネットワーク環境について」を参照の上、ネットワーク設定を確認してください。

3.13. DHCP サーバを使用しない場合の運用

Q1

「電源ON」、「マシンの新規登録」でエラーが発生する。

A1

管理対象マシンにDPMクライアントがインストールされているかを確認してください。インストール方法については、「インストールガイド 2.2 DPMクライアントをインストールする」を参照してください。

Q2

ブータブルCD起動からのバックアップ/リストア/ディスク構成チェックシナリオの実行に失敗する。

A2

以下について確認してください。

管理対象マシンは登録されていますか？

管理対象マシンにシナリオは割り当てられていますか？

管理対象マシンに割り当てられているシナリオは正しいですか？

「マルチキャストリストア」シナリオが割り当たっていませんか？

「バックアップ/リストア」タブと同時に「HW設定」タブを指定するような、複数指定していませんか？

「バックアップ」シナリオ、「リストア(ユニキャスト)」シナリオ、「ディスク構成チェック」シナリオ以外はエラーになります。

Q3

ブータブルCDを管理対象マシンにセットして、Webコンソールからバックアップ/リストアシナリオを実行すると、指定したマシンはシナリオ実行エラーとなったが、指定したマシン以外のマシンでシナリオが実行され、正常終了した。

A3

シナリオ実行したマシンに複数のLANボードが搭載され、かつ、それぞれが別マシンとしてDPMに登録されている可能性があります。同じマシンが複数登録されている場合は、不要な登録を削除し、再度バックアップ/リストアを実行してください。

Q4

ブータブルCDをセットしてマシンを起動してもバックアップ/リストアシナリオが開始されない。

A4

ブート順位の先頭はCDになっていますか？

先頭でない場合は、CDのブート順位を先頭にしてください。

Q5

ブータブルCDをセットしてマシンを起動すると画面に「A state of communication was bad condition」と表示される。

A5

何らかのエラーが発生した可能性があります。

- 管理対象マシンが、管理サーバと接続する前にタイムアウトが発生する場合：
「詳細設定」画面の「ネットワーク」タブで、「リモート電源ONタイムアウト」の値を大きくして再度バックアップ/リストアを行ってください。
設定の詳細は、「リファレンスガイド Webコンソール編 2.7.1.3 「ネットワーク」タブ」を参照してください。
- ブータブルCDを使用する際に、管理サーバの「詳細設定」画面の「DHCPサーバ」タブで、「DHCPサーバを使用しない」を選択していない場合：
「リファレンスガイド Webコンソール編 2.7.1.4 「DHCPサーバ」タブ」を参照して正しい環境に合わせて「DHCPサーバ」タブ内の項目を設定してください。
※設定変更後は管理サーバの再起動が必要です。
- 管理サーバと通信している管理対象マシン側のLANボードのMACアドレスが、DPMに登録されていない場合：
適切なMACアドレスをDPMに登録して、再度バックアップ/リストアしてください。
- 上記のいずれにも該当しない場合：
ネットワークに未接続、またはネットワークの影響で管理サーバと管理対象マシンが接続できない状態である可能性があります。管理サーバと管理対象マシンの間のネットワーク状態を確認した後で、再度バックアップ/リストアしてください。

Q6

ブータブルCDをセットして管理対象マシンを起動すると、画面に以下のメッセージが表示され、処理が中断される。

「linuxrc : Cannot find CD-ROM Drives.」

A6-1

ブータブルCDがデバイスを認識できない時に発生する場合があります。
USBのCD/FDドライブを使用している場合は、ドライブを接続するポートを変更して、再度お試しください。

A6-2

DPMが使用中のCDドライブに対応していない可能性があります。
このようなドライブを使用している場合は、別のCDドライブを用意するか、「DHCPサーバを使用する」運用でバックアップ/リストアしてください。

A6-3

管理対象マシンが内蔵SATA RAID構成であり、かつブータブルCD作成時に使用したブータブルCD格納フォルダが「ia32_080331_24」以外の場合は、ブータブルCDにCDドライブを認識するためのドライバファイルがインストールされていない可能性があります。

以下の製品Webサイトよりドライバパックをインストールしてください。
WebSAM DeploymentManager(<http://jpn.nec.com/websam/deploymentmanager/>)
→「動作環境」を選択
→「対応装置一覧」を選択

対応装置一覧の注意事項に記載のドライバパック専用ページよりモジュールをダウンロードして同梱の手順書に沿って適用してください。

手順書に従いブータブルCDを再作成して再度お試しください。

Q7

バックアップ/リストア処理が開始されず、画面に以下のメッセージが表示される。
(以下のxは、数値が入ります。)

「ERROR: Failed to read a file (x)」

A7

バックアップ対象マシンが以下のいずれかに該当する場合にバックアップ対象マシンのディスクよりも以下のものが先に認識されるため、エラー表示されます。

- ・バックアップ対象マシンにUSB機器を接続している場合
- ・バックアップ対象マシンにUSB接続のためのインターフェースが存在する場合
- ・BladeServerの筐体にCD/DVDドライブが内蔵されている場合

この場合は、シナリオのディスク番号を変更後、シナリオを実行してください。

また、認識するデバイス数はマシンに依存するため、変更後も同様のエラーが発生する場合には再度ディスク番号を変更してバックアップを行ってください。

Q8

リストアを中断した場合に以下のメッセージが表示される。

「ERROR: Found the eof during the input of a binary stream.
gzip: stdin: unexpected end of file.」

A8

リストアデータ転送中に中断した場合に、本メッセージが表示されることがあります。リストアを中断して、本メッセージが出力された場合は、再度リストアを行うか、OSの再セットアップを行ってください。

3.14. 管理サーバを使用せずにリストア(ローカルリストア)する

Q1

ローカルリストア用ブータブルCDをセットして管理対象マシンを起動すると、画面に以下のメッセージが表示され、処理が中断される。

「linuxrc : Cannot find CD-ROM Drives.」

A1-1

ローカルリストア用ブータブルCDがデバイスを認識できない時に発生する場合があります。

USBのCDドライブを使用している場合は、ドライブを接続するポートを変更して、再度お試しください。

A1-2

DPMが使用中のCDドライブに対応していない可能性があります。

このようなドライブを使用している場合は別のCDドライブを用意するか、「DHCPサーバを使用する」運用でリストアしてください。

A1-3

管理対象マシンが内蔵SATA RAID構成であり、かつローカルリストア用ブータブルCD作成時に使用したブータブルCD格納フォルダが「ia32_080331_24」以外の場合は、ローカルリストア用ブータブルCDにCDドライブを認識するためのドライバファイルがインストールされていない可能性があります。

以下の製品Webサイトよりドライバパックをインストールしてください。

WebSAM DeploymentManager(<http://jpn.nec.com/websam/deploymentmanager/>)

→「動作環境」を選択

→「対応装置一覧」を選択

対応装置一覧の注意事項に記載のドライバパック専用ページよりモジュールをダウンロードして同梱の手順書に沿って適用してください。

手順書に従いローカルリストア用ブータブルCDを再作成して再度お試しください。

3.15. PackageDescriber

Q1

Windows Vista上でPackageDescriberを起動しようとする、以下のエラーが表示される。
「Unable to access jarfile PackageDescriber.jar」

A1

「一時保存フォルダ」の設定が、初期設定値から変更されていない可能性があります。
以下のいずれかの設定を行ってください。

- ・ ユーザーアカウント制御(User Account Control:UAC)を無効に設定して、PackageDescriberを使用する。
UACを無効にするには、「スタート」メニューから「コントロール パネル」→「ユーザーアカウント」→「ユーザーアカウント制御の有効化、または無効化」にて、「ユーザーアカウント制御(UAC)を使ってマシンの保護に役立たせる」のチェックを外します。
- ・ 管理者として実行する。
 - (1)「スタート」メニューから「すべてのプログラム」→「DPM PackageDescriber」を右クリックし、「プロパティ」を選択します。
 - (2)「DPM PackageDescriberのプロパティ」画面が表示されますので、「互換性」タブで「特権」レベルの「管理者としてこのプログラムを実行する」にチェックを入れた後、「OK」ボタンをクリックします。
 - (3)「アクセス拒否」画面が表示されますので、「続行」ボタンをクリックします。
 - (4)デスクトップ上の「DPM PackageDescriber」のショートカットアイコンを右クリックして、「プロパティ」を選択し、(2)から(3)を設定します。

上記を設定後、PackageDescriberの初回起動時に「ユーザー アカウント制御」画面が表示されますので、「許可」ボタンをクリックしてください。

3.16. 障害発生時の情報採取

■ DPM使用中の障害については、以下の情報を添えてサポート窓口にお問い合わせください。

- ・ DPMバージョン/機種対応モジュール種別
- ・ 管理対象マシン情報
 - 機種型番
 - オプション構成/型番
 - マシン名
 - MACアドレス
 - OS種別
- ・ 発生日時
- ・ 現象内容
 - どのような操作/運用を行い、どのような結果となったか
- ・ 画面上の表示
 - 管理サーバ
 - 管理対象マシン
- ・ 再現性
 - 必ず発生する
 - 成功する場合もある
 - 過去は成功していたがある日を境に発生するようになった
 - 別の管理対象マシンでも発生する/発生しない
- ・ ログ収集ツールによるDPMログ
 - 管理サーバ
 - 管理対象マシン

※現象発生直後に採取してください。

ログ採取前に同一マシンに対して再度シナリオを実行すると、ログが上書きされる場合があります。

現象発生後、1週間経過するとDHCPサーバのログが上書きされます。

- ・ ネットワーク構成図

DPMのログ採取方法を以下に記載します。

ログ採取対象は、管理サーバ、データベースサーバ(管理サーバとは別のマシンでデータベースを構築している場合のみ)、および管理対象マシンです。

■ ログ採取手順(Windows x86/x64)

以下の手順に沿って、管理サーバ、データベースサーバ(管理サーバとは別のマシンでデータベースを構築している場合のみ)、およびエラーが発生している管理対象マシン上で、それぞれログを採取してください。

- (1) DPM の操作(以下)がすべて完了/終了していることを確認してください。
 - ・ 管理対象マシンに対して実施している操作(シナリオ実行、自動更新、ファイル配信、ファイル実行、ファイル削除、「ファイル/フォルダ詳細」画面の情報取得)が完了していること。
 - ・ Web コンソール、DPM の各種ツール類を終了していること。
- (2) 該当マシンに管理者権限を持つユーザでログオンします。

- (3) 管理サーバのログを採取する場合は、本手順は必要ありませんので、(4)へ進んでください。
データベースサーバ、または管理対象マシンのログを採取する場合は、以下のフォルダを、任意の場所にコピーします。

<インストール媒体>:¥DPM¥TOOLS¥DpmLog

- (4) コマンドプロンプトを起動し、以下のフォルダに移動します。
- ・ 管理サーバの場合: <DPM インストールフォルダ>¥DpmLog
 - ・ データベースサーバ、または管理対象マシンの場合:

(3)でコピーしたフォルダ

例)

(3)でコピーした場所が「C:¥」の場合

cd /d C:¥DpmLog

- (5) オプション「-A」を付けて、DpmLog.exe を実行します。以下のメッセージを参照して、収集したログを送付してください。

```
C:¥DpmLog>DpmLog -A[Enter]
ログを収集しています。しばらくお待ちください。
ログの収集が完了しました。以下のフォルダを圧縮して送付してください。

保存先: log

C:¥DpmLog>
```

注:

■ DpmLog.exeの実行中は、DPMの操作を行わないでください。

- (6) ログを送付後は不要となるため、保存先の「log」フォルダをフォルダごと削除します。

■ ログ採取手順(Linux)

以下のファイルを採取してください。ファイルを採取する際には、タイムスタンプが変更されないようにログを採取し(cpコマンドの-pオプションなど)、zipやgzipなどのコマンドを用いてLinux上で圧縮し、送付してください。

- ・ システム設定ファイル
 - /etc/hosts
 - /etc/resolv.conf
 - /etc/sysconfig/network
 - /etc/sysconfig/clock(Red Hat Enterprise Linux 7より前の場合のみ)
 - /etc/sysconfig/iptables(Red Hat Enterprise Linux 7より前の場合のみ)
 - /etc/sysconfig/ipchains(Red Hat Enterprise Linux 7より前の場合のみ)
 - /etc/rc.d/rc(Red Hat Enterprise Linux 7より前の場合のみ)
 - /etc/sysconfig/network-scripts/ifcfg-*ファイル
- ・ バージョン情報
 - Red Hat Enterprise Linux 7以降:
 - /etc/redhat-release
 - /etc/os-release
 - Red Hat Enterprise Linux 7より前:
 - /etc/redhat-release
 - SUSE Linux Enterprise:
 - /etc/SuSE-release

- ・ DPMクライアントの関連ファイル
/opt/dpmclient/フォルダ配下の全ファイル
/var/log/messages* (messagesで始まる全ファイル)
/tmp/dpm/フォルダ配下の全ファイル (存在すれば)
- ・ ディスク/パーティション情報
以下のコマンドの実行結果を採取してください。
fdisk -l
- ・ ネットワーク情報
以下のコマンドの実行結果を採取してください。
ifconfig -a
ip addr show
netstat -anp
route
ps -axm | grep depagtd
iptables -L
- ・ システム情報
以下のコマンドの実行結果を採取してください。
uname -a
lspci -vx
dmidecode
biosdecode
dmesg -s 524288

付録 A サービス一覧

DPMのサービス、およびプロセスは、以下のとおりです。

注:

- 以下の表で「スタートアップの種類」に「自動」と記載しているものは、常駐サービスです。

■ DPMサーバ

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※1	プロセス数	機能
APIServ	DeploymentManager API Service	自動	apiserv.exe	1	シナリオ実行/各種項目の設定
	(子プロセス)		mkParams.exe	1以上	Windowsのディスク複製用情報ファイルを作成するツール
			magicsend.exe	1	リモート電源ONの実行
			ipconfig.exe	1以上	ネットワーク設定
			nbtstat.exe	1以上	ネットワーク設定
bkressvc	DeploymentManager Backup/Restore Management	自動	bkressvc.exe	1	バックアップ/リストアの実行
depssvc	DeploymentManager Get Client Information	自動	depssvc.exe	1	管理対象マシンからのOS/SP/パッチ情報を受信
PxeSvc	DeploymentManager PXE Management	自動	pxesvc.exe	1	ネットワーク(PXE)ブートの制御
	(子プロセス)		ipconfig.exe	1以上	ネットワーク設定
			nbtstat.exe	1以上	ネットワーク設定
PxeMftfp	DeploymentManager PXE Mftfp	自動(※2)	pxemftfp.exe	1	tftpサーバ機能
rupdssvc	DeploymentManager Remote Update Service	自動	rupdssvc.exe	1	リモートアップデートの実行
	(子プロセス)		zip.exe	1	ファイル圧縮コマンド
			unzip.exe	1	ファイル解凍コマンド
schwatch	DeploymentManager Schedule Management	自動	schwatch.exe	1	スケジュール管理
	(子プロセス)		magicsend.exe	1	リモート電源ONの実行
			ipconfig.exe	1以上	ネットワーク設定
			nbtstat.exe	1以上	ネットワーク設定
ftsvc	DeploymentManager Transfer Management	自動	ftsvc.exe	1	ファイル転送サービス

	(子プロセス)		CHKOS32.exe	1以上	OS種別取得ツール
DHCPServer	DHCP Server ※3	自動	svchost.exe	1	
Winmgmt	Windows Management Instrumentation ※4	自動	svchost.exe	1	
RpcSs	Remote Procedure Call (RPC) ※4	自動	svchost.exe	1	

※1 インストールフォルダのデフォルトは、「C:\Program Files (x86)\NEC\DeploymentManager」です。

※2 DPMサーバのインストール時に、「詳細設定」画面の「TFTPサーバ」タブで、「DPM以外のTFTPサービスを使用する」にチェックを入れている場合は、「無効」になります。

※3 「管理」ビュー→「DPMサーバ」→「詳細設定」→「DHCPサーバ」タブ-「DHCPサーバを使用しない」を設定している場合は不要です。

※4 DPMクライアント(Linux)を使用している場合に使用します。

■ データベース(SQL Server) ※1

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※2	プロセス数	機能
MSSQL\$ インスタンス名	SQL Server(インスタンス名)	自動	sqlservr.exe	1	SQL Server データベース (DPM用)
SQLBrowser	SQL Server Browser	無効	sqlbrowser.exe	1	SQL Server データベース

※1 データベース(SQL Server)を構築しているマシン上で動作します。

※2 インストールフォルダのデフォルトは、「C:\Program Files\Microsoft SQL Server\MSSQL13. インスタンス名\MSSQL\Binn」です。

■ データベース(PostgreSQL) ※1

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※2	プロセス数	機能
postgresql-x64-9.5	postgresql-x64-9.5 - PostgreSQL Server 9.5	自動	pg_ctl.exe	1	PostgreSQL データベース

※1 データベース(PostgreSQL)を構築しているマシン上で動作します。

※2 インストールフォルダのデフォルトは、「C:\Program Files\PostgreSQL\9.5\bin」です。

■ イメージビルダ(リモートコンソール)

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※1	プロセス数	機能
なし	なし		DIBulde.exe	1	イメージビルダ
	(子プロセス)		DIBPkgMake.exe	1	パッケージ作成用ツール
			DIBPkgDel.exe	1	パッケージ削除用ツール
			mkParams.exe	1	Windowsのディスク複製用情報ファイルを作成するツール

			ExecLinuxIParm.jar	1	Linux のインストールパラメータを作成するツール
			ExecLinuxSysRep.jar	1	Linux のディスク複製用情報ファイルを作成するツール
			winftc.exe	1	ファイル転送ツール
			zip.exe	1	ファイル圧縮コマンド
			CHKOSCD.EXE	1	OS媒体チェックツール

※1 インストールフォルダのデフォルトは、「C:\Program Files (x86)\NEC\DeploymentManager」です。

■ DPMコマンドライン

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※1	プロセス数	機能
なし	なし		dpmcmd.exe	1以上	DPMコマンドラインからのシナリオ実行など

※1 インストールフォルダのデフォルトは、「C:\Program Files (x86)\NEC\DeploymentManager」です。

■ DPMクライアント(Windows)

サービス名	表示名	スタートアップの種類	プロセス名※1	プロセス数	機能
depagent	DeploymentManager Agent Service	自動	DepAgent.exe	1	DPM サーバからの電源OFFを実行
rupdsvc	DeploymentManager Remote Update Service Client	自動	rupdsvc.exe	1	リモートアップデート実行 管理対象マシンのOS/サービスパック/パッチ情報をDPMサーバに送信
	(子プロセス)		unzip.exe	1	ファイル解凍コマンド
			実行ファイル	1	パッケージのインストール
			GetBootServerIP.exe	1	管理サーバ検索
なし	なし		DPMTray.exe	1以上	自動更新状態表示

※1 インストールフォルダのデフォルトは、以下のようになります。

- ・ x64: C:\Program Files (x86)\NEC\DeploymentManager_Client
- ・ x86: C:\Program Files\NEC\DeploymentManager_Client

■ DPMクライアント(Linux)

サービス (デーモン) 名	表示名	スタート アップの 種類	プロセス名	プロセス 数	機能
Red Hat Enterprise Linux 7以 降の場合: depagt.ser vice Red Hat Enterprise Linux 7 より前 /SUSE Linux Enterprise の場合: depagt	なし (子プロセス) system関数にて起動	自動	depagtd※1	1,2	DPMクライアントサービス
			depagtd	1	DPMサーバからの電源OFFを実行 リモートアップデート実行 管理対象マシンのOS/パッチ情報をDPMサーバに送信
			rpm	1	rpmパッケージインストーラ
			shutdown	1	シャットダウンコマンド
			mv	1	ファイル移動コマンド
			echo	1	メッセージ表示コマンド
			unzip	1	圧縮ファイル解凍コマンド
			touch	1	タイムスタンプの変更コマンド
			GetBootServerIP	1	管理サーバ検索

※1 インストールディレクトリは固定値で「/opt/dpmclient/agent/bin」です。

サービスの開始、停止方法と順序

DPMサーバは、DPMに関連する各サービスに連携/依存関係があるため、手動でサービスの開始/停止を行う場合は、以下の順序で行ってください。

なお、DPMクライアントの各サービス(デーモン)については、サービスの開始/停止の順序は任意です。

・サービス開始順序

(1) SQL Server (**インスタンス名**) またはpostgresql-x64-9.5 - PostgreSQL Server 9.5

(2) 「DeploymentManager」で始まるサービス

・サービス停止順序

(1) 「DeploymentManager」で始まるサービス

(2) SQL Server (**インスタンス名**) またはpostgresql-x64-9.5 - PostgreSQL Server 9.5

付録 B イベントログ

イベントログについては製品Webサイトを参照してください。

WebSAM DeploymentManager(<http://jpn.nec.com/websam/deploymentmanager/>)

→「ダウンロード」を選択

付録 C エラー情報

エラー情報については製品Webサイトを参照してください。

WebSAM DeploymentManager(<http://jpn.nec.com/websam/deploymentmanager/>)

→「ダウンロード」を選択

付録 D ネットワークポートとプロトコル一覧

■ DPMが通信に使用しているポート一覧

注:

- 管理サーバ上にDHCPサーバやNFSサーバを構築する場合は、それぞれの表に記載の通信が、管理サーバと管理対象マシン間で行われます。
- DPMが通信に使用しているポート(Windows OS)の自動/手動開放については、「リファレンスガイド ツール編 3.1 ポート開放ツール」を参照してください。

・管理サーバと管理対象マシンの通信

項目	管理サーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理対象マシン		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
電源ON	magicsend.exe	※1	不可	UDP	→	Direct Broadcast ※2	5561	不可	
シャットダウン	apiserv.exe schwatch.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26509 ※10	可	Windowsの場合: DepAgent.exe Linuxの場合: depagtd
シャットダウン (SSC向け製品のみ)	apiserv.exe schwatch.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26509 ※10	可	Windowsの場合: DepAgent.exe Linuxの場合: depagtd
	rupdssvc.exe	26507 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	Windowsの場合: DepAgent.exe Linuxの場合: depagtd
DPMクライアント死活監視 (SSC向け製品のみ)	apiserv.exe schwatch.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26509 ※10	可	Windowsの場合: DepAgent.exe Linuxの場合: depagtd
生存確認(電源ON/OFF状態の確認)	apiserv.exe schwatch.exe	- ※3	不可	ICMP Echo request	→	Unicast	8 ※3	不可	
	apiserv.exe schwatch.exe	0 ※3	不可	ICMP Echo request	←	Unicast	- ※3	不可	

ネットワーク ブート	pxesvc.exe	67	不可	UDP (DHCP)	←	Broadcast ※4※5	68	不可	
	pxesvc.exe	67	不可	UDP (DHCP)	→	Broadcast ※4※5	68	不可	
	pxesvc.exe	67	不可	UDP	→	Unicast	68	不可	
	pxesvc.exe	4011	不可	UDP	←	Unicast	68	不可	
	pxesvc.exe	4011	不可	UDP	←	Unicast	4011	不可	
	pxesvc.exe	67	不可	UDP	→	Unicast	4011	不可	
	pxemftf.exe	69	不可	UDP (TFTP)	←	Unicast	※6	不可	
	pxemftf.exe	69	不可	UDP (TFTP)	→	Unicast	※6	不可	
	bkressvc.exe	26503 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
	bkressvc.exe	26502 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
ディスク複製 OSインストール ※7	ftsvc.exe	26508 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
リストア(マル チキャスト) ※8	ftsvc.exe	26508 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
	bkressvc.exe	26501 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
	bkressvc.exe	26530 ※10	可	UDP	→	Multicast	26530 ※10	可	
リストア(ユニ キャスト)※9	ftsvc.exe	26508 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
	bkressvc.exe	26501 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
バックアップ ※9	ftsvc.exe	26508 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
	bkressvc.exe	26501 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
CDブート	pxesvc.exe	26505 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
ディスク構成 チェック※9	ftsvc.exe	26508 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
リモートアップ デートによる サービスパッ ク /HotFix/Linux パッチファイ ル/アプリケー ションの イン ストール	rupdssvc.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26510 ※10	可	Windowsの場 合: rupdsvc.exe Linuxの場合: depagtd
	rupdssvc.exe	※1	不可	UDP	→	Multicast	26529 ※10	可	Windowsの場 合: rupdsvc.exe Linuxの場合: depagtd
	rupdssvc.exe	26507 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	rupdsvc.exe(Win dowsのみ)

管理対象マシンの情報送付※11	depssvc.exe	26504 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	Windowsの場合: rupdsvc.exe Linuxの場合: depagtd
	rupdsvc.exe	26507 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	rupdsvc.exe(Win dowsのみ)
自動更新要求※12	rupdsvc.exe	26506 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	rupdsvc.exe
	rupdsvc.exe	26507 ※10	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	rupdsvc.exe
自動更新通知	rupdsvc.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26511 ※10	可	rupdsvc.exe
管理サーバ/ ポート検索 ※13	pxesvc.exe	67	不可	UDP (DHCP)	←	Broadcast ※4	68 ※14	不可	Windowsの場合: GetBootServerI P.exe Linuxの場合: GetBootServerI P
	pxesvc.exe	67	不可	UDP (DHCP)	→	Broadcast ※4	68 ※14	不可	Windowsの場合: GetBootServerI P.exe Linuxの場合: GetBootServerI P
	pxesvc.exe	4011	不可	UDP	←	Unicast	※1	不可	Windowsの場合: GetBootServerI P.exe Linuxの場合: GetBootServerI P
	pxesvc.exe	4011	不可	UDP	→	Unicast	※1	不可	Windowsの場合: GetBootServerI P.exe Linuxの場合: GetBootServerI P
	pxemftp.exe	69	不可	UDP (TFTP)	←	Unicast	※1	不可	
	pxemftp.exe	69	不可	UDP (TFTP)	→	Unicast	※1	不可	
ファイル配信、ファイル実行、ファイル削除、ファイル/フォルダ詳細の情報取得※15	apiserv.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26520	可	Windowsの場合: rupdsvc.exe Linuxの場合: depagtd

※1 ポートは自動的に割り当てられます。

※2 管理サーバと同じセグメントのマシンに対しては255.255.255.255宛てとなります。

管理サーバと別セグメントの場合はダイレクトブロードキャストとなります。

例)

192.168.0.0(MASK=255.255.255.0)セグメントの場合は、192.168.0.255宛となります。

- ※3 ICMP(Internet Control Message Protocol)ではポート番号を指定した通信は行いませんが、ICMPのTypeフィールド値を使ってルーティングします。
- ※4 DHCPリレーによりリレーされたパケットの宛先はUnicastになる場合があります。
- ※5 DHCPサーバと管理サーバが別マシンの場合のみとなります。
- ※6 不定です。マシン添付のLANボード ROMに依存します。
- ※7 リストアの項目に記載されているプロトコルとポート番号も、追加が必要となります。
- ※8 ネットワークブートの項目に記載しているプロトコルとポート番号も追加が必要となります(マルチキャストによるリストアはDHCPサーバを使用する運用のみとなります)。
- ※9 DHCPサーバを使用する運用を行う場合は、「ネットワークブート」の項目に記載しているプロトコルとポート番号も追加が必要となります。
DHCPサーバを使用しない運用を行う場合は、「CDブート」の項目に記載しているプロトコルとポート番号が追加が必要となります。
- ※10 DPM Ver6.1以降、使用するポートのデフォルトが変更となりました。DPM Ver6.1より前のバージョンからアップグレードインストールした場合は、アップグレードインストール前に使用していたポート番号をそのまま引き継ぐため、DPMサーバを新規インストールした際のポート番号(上記の表中の値)とは異なります。ただし、Webサービス用ポート(56050)は引き継がず新しいポート(26500)を使います。アップグレードインストール前に使用していた従来のポートを使用する場合は、手動で変更してください。DPMサーバを新規インストールした場合とDPMサーバをアップグレードインストールした場合の既定のポートは以下の表のとおりです。

DPMサーバを新規インストールした場合	DPM Ver6.1より前のバージョンから、アップグレードインストールした場合
26500	26500
26501	56020
26502	56022
26503	56030
26504	56011
26505	56060
26506	56024
26507	56028
26508	56023
26509	56010
26510	56000
26511	56025
26529	56001
26530	56021

- ※11 クライアントサービスが起動する際に送付します。
- ※12 あらかじめ指定されたタイミングで、管理対象マシンから管理サーバに対して、サービスパック/HotFix/アプリケーションの自動更新を要求します。
- ※13 クライアントサービスが起動する際やシナリオを実行する際に、管理サーバを検索する場合は、必要となります。
- ※14 DHCPサーバを使用する運用/使用しない運用のいずれの場合もDHCPの通信シーケンスの一部を使用しており、UDP:68ポートを使用します。
- ※15 管理対象マシンへファイル配信を行う際や管理対象マシン上のファイルを削除する際、実行する際、「ファイル/フォルダ詳細」画面を表示する際に、必要となります。

注:

- 管理対象マシンのOSが以下のいずれかの場合は、DPMクライアントのインストール時に使用されているネットワークの状況により、以下のようにポート/プログラムが開放されます。
 - ・ Windows Server 2008/Windows Vista
Windowsファイアウォールのパブリックプロファイル、プライベートプロファイル、ドメインプロファイルのいずれかに
対して、ポート/プログラムが開放されます。
 - ・ Windows Server 2008 R2/Windows 7以降
DeploymentManager(DepAgent.exe)、DeploymentManager(rupdsvc.exe)については、Windowsファイ
ウォールのアクティブなパブリックプロファイル、プライベートプロファイル、ドメインプロファイルに対して、ポート/プ
ログラムが開放されます。
ファイルとプリンターの共有(エコー要求 - ICMPv4 受信)については、Windowsファイアウォールのパブリックプロ
ファイル、プライベートプロファイル、ドメインプロファイルのいずれかに対して、ポート/プログラムが開放されます。

例)

管理対象マシンがドメインに参加することによってWindowsファイアウォールのプロファイルがドメインプロファイル
に変更された場合は、DPMが使用するポート/プログラムがドメインプロファイルではブロックされ通信できなくな
ります。

ドメインに参加する管理対象マシンや、ディスク複製OSインストールでマスタとするマシンには、あらかじめDPMが
使用するポート/プログラムをドメインプロファイルで開放しておいてください。

以下の手順により管理対象マシンのドメインプロファイルのポート/プログラムを開放できます。

- ・ドメインのポリシーで設定する方法:

Windows Server 2008/Windows Vista以降のドメインコントローラのドメインポリシーで設定してください。

- ・管理対象マシンのローカルで設定する方法:

- (1) 管理対象マシンの「セキュリティが強化されたWindowsファイアウォール」の「受信の規則」から以下を選
択し、右クリックして「プロパティ」を選択します。

- ・ DeploymentManager(DepAgent.exe)
- ・ DeploymentManager(rupdsvc.exe)
- ・ ファイルとプリンターの共有(エコー要求 - ICMPv4 受信)(※)

※Windows Vista/Windows 7の場合は、「ネットワーク - エコー要求(ICMPv4 受信)」となります。

- (2) プロパティの「詳細設定」タブのプロファイルでドメインのチェックボックスにチェックを入れます。

- Windows Server 2003(SP1/SP2)/Windows Server 2003 R2では、セキュリティ更新(Post-Setup Security Updates:PSSU)により、最新の更新プログラムが適用されるまでは、すべての接続要求がブロックされます。

Windows Updateなどにより管理対象マシンを最新の状態に更新、もしくは、PSSUを手動で解除してください。PSSU
を手動で解除するには、管理者でログオンし、セキュリティ更新の画面を閉じてください。

- 管理対象マシンのファイアウォールサービスを自動起動に設定している場合は、ファイアウォール機能の有効/無効に
関わらずマシンが起動してからファイアウォールサービスが起動するまでの間、すべてのポートが閉じられます。この
タイミングで以下の操作を行うと、処理に失敗しますので、注意してください。

- ・ シナリオ実行/シャットダウンを行うと管理対象マシンとの通信ができないため処理がエラーとなります。
このような場合は、管理対象マシンが電源ONとなっていることをWebコンソールから確認後、シナリオ実行/シャ
ットダウンを行ってください。

- ・ DPMクライアントのバージョン/リビジョンが、DPMサーバのバージョン/リビジョンと一致していない場合は、DPMク
ライアントの自動アップグレードインストールが実行されますが、このタイミングで管理対象マシンと通信できないた
め自動アップグレードインストールに失敗します。

このような場合は、「インストレーションガイド 3.3.2 DPMクライアントを手動アップグレードインストールする」を参
照して、シナリオ配信によるアップグレードを行ってください。

・ データベースサーバと管理サーバの通信

項目	データベースサーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理サーバ		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
データベース		26512 ※2 ※3 5432 ※2 ※4	可	TCP	←	Unicast	※1	不可	apiserv.exe bkressvc.exe depssvc.exe ftsvc.exe pxesvc.exe rupdssvc.exe schwatch.exe

※1 ポートは自動的に割り当てられます。

※2 ポート番号を変更する場合は、DPMサーバを新規インストールする前に行ってください。それ以降は、変更できません。

※3 SQL Serverを使用する場合。

※4 PostgreSQLを使用する場合(DPMサーバと同一マシン上にPostgreSQLを構築した場合も該当します)。

・ DHCPサーバと管理対象マシンの通信

項目	DHCPサーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理対象マシン		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
IPアドレス取得		67	不可	UDP (DHCP)	←	Broadcast ※1	68	不可	
		67	不可	UDP (DHCP)	→	Broadcast ※1	68	不可	

※1 DHCPリレーによりリレーされたパケットの宛先はUnicastになる場合があります。

・ NFSサーバと管理対象マシンの通信

項目	NFSサーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理対象マシン		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
OSクリーンインストール		111	不可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
		111	不可	UDP	←	Unicast	※1	不可	
		1048 ※2	不可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
		1048 ※2	不可	UDP	←	Unicast	※1	不可	
		2049	不可	TCP	←	Unicast	※1	不可	
		2049	不可	UDP	←	Unicast	※1	不可	

※1 ポートは自動的に割り当てられます。

※2 このポート番号は自動的に変更される場合があります。もし通信に失敗する場合は、"rpcinfo -p" コマンドでmountd (NFS mount daemon)サービスが使用するポート番号を確認し、そのポートを開放するようにしてください。この方法によっても改善されない場合は、Windowsファイアウォールの設定を無効にしてください。

・ HTTPサーバと管理対象マシンの通信

項目	HTTPサーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理対象マシン		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
OS クリアインストール		80	可	TCP (HTTP)	←	Unicast	※1	不可	

※1 ポートは自動的に割り当てられます。

・ FTPサーバと管理対象マシンの通信

項目	FTPサーバ			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理対象マシン		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
OS クリアインストール		21	可	TCP (FTP)	←	Unicast	※1	不可	

※1 ポートは自動的に割り当てられます。

・ Webコンソールと管理サーバの通信

項目	Webコンソール用マシン			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理サーバ ※2		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
Webコンソール		※1	不可	TCP (HTTP)	→	Unicast	80 ※3	可	Web サービス(IIS)

※1 ポートは自動的に割り当てられます。

※2 管理サーバは、内部処理用(DPMサーバとWebサービス(IIS)との通信)にポート(TCP:26500)を使用するため、他のアプリケーションでこのポートを使用しないようにしてください。

※3 以下の手順を参考にして、使用するポート番号を変更できます。

例)

IIS7.5の場合

- 1) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を選択します。
- 2) 「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」画面が表示されますので、ツリービュー上で、**コンピュータ名**→「Web サイト」→**Web サイト名**を右クリックした後に「バインドの編集」を選択してポート番号を変更します。

・ イメージビルダ(リモートコンソール)と管理サーバの通信

項目	イメージビルダ(リモートコンソール)用マシン			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理サーバ		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
イメージビルダ(リモートコンソール)	DiBuild.exe	※1	不可	TCP	→	Unicast	26508 ※2	可	ftsvc.exe

※1 ポートは自動的に割り当てられます。

※2 DPMサーバをDPM Ver6.1より前のバージョンからアップグレードインストールした場合は、アップグレードインストール前のポート(56023)が引き継がれます。

・ DPMコマンドラインと管理サーバの通信

項目	DPMコマンドライン用マシン			プロトコル	接続方向	宛先指定	管理サーバ ※2		
	実行ファイル名	ポート番号	ポート番号変更の可否				ポート番号	ポート番号変更の可否	実行ファイル名
DPM コマンドライン	dpmcmd.exe	※1	不可	TCP (HTTP)	→	Unicast	80 ※3	可	Web サービス(IIS)

※1 ポートは自動的に割り当てられます。

※2 管理サーバは、内部処理用(DPMサーバとWebサービス(IIS)との通信)にポート(TCP:26500)を使用するため、他のアプリケーションでこのポートを使用しないようにしてください。

※3 以下の手順を参考にして、使用するポート番号を変更できます。

例)

IIS7.5の場合

- 1) 「スタート」メニューから「管理ツール」→「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」を選択します。
- 2) 「インターネット インフォメーション サービス (IIS) マネージャ」画面が表示されますので、ツリービュー上で、**コンピュータ名**→「Web サイト」→**Web サイト名**を右クリックした後に「バインドの編集」を選択してポート番号を変更します。

注:

- OSの種類によっては、エフェメラルポートの影響でDPMが使用するポートと、他のサービスやアプリケーションで使用するポートが競合し、DPMのサービスが起動できない場合があります。エフェメラルポートの確認方法と、対処方法については、「ファーストステップガイド 2.2.1 ネットワーク環境について」の「DPMが使用するポートについて」を参照してください。
- ルータとスイッチの設定については、ネットワーク機器のマニュアルを参照していただくか、購入元に問い合わせてください。

付録 E DPM が出力するログ

■ DPMサーバ

DPMサーバをインストールしたマシンに出力されるログは、以下となります。

注:

- DPMサーバをインストールしたマシンには、イメージビルダとDPMコマンドラインもインストールされます。後述の「■イメージビルダ(リモートコンソール)」と「■DPMコマンドライン」の記載も合わせて参照してください。

フォルダ	<DPMサーバのインストールフォルダ>%Log (デフォルト: C:%Program Files (x86)%NEC%DeploymentManager%Log)
ファイル	apiserv.csv apitrace.log bkressvc.csv Deplnit.csv depssvc.csv DIBPkgMake.csv DPMDBIConfig.log ftsvc.csv pmdb.log pminfo.log pxemtftp.csv pxesvc.csv rupdssvc.csv schwatch.csv rupdssvc_管理対象マシンのマシン名_管理対象マシンのMACアドレス.log
出力内容	DPMサーバのトレースログ、監査ログ、エラー情報、データベースアクセスログ
記録方法	apitrace.logのファイルサイズは、最大1MByte。pmdb.logと、pminfo.logは、最大128KByte。DPMDBIConfig.logは制限はありません。それ以外のファイルは、最大10MByteです。 apitrace.logは、ファイルの最大サイズを超えるとファイル内の先頭から、順番に上書きされます。 pmdb.logと、pminfo.logと、rupdssvc_管理対象マシンのマシン名_管理対象マシンのMACアドレス.logは、2世代管理。(ファイルの最大サイズを超えると、*.log.bakが削除され、*.logのファイル名が*.log.bakに変更されます。) *.csvファイルは、5世代管理。(*.csvがファイルの最大サイズを超えると、*.csv.4が削除されます。*.csv.nはそれぞれファイル名が*.csv.(n+1)に変更され、*.csvは*.csv.1に変更されます。) また、各ファイルとも手動で削除できます。(*.csvと、apitrace.logは、DPMのサービス停止後に手動で削除してください。)

フォルダ	<DPMサーバのインストールフォルダ>%DataFile%LogFile%SnrReport (デフォルト: C:%Program Files (x86)%NEC%DeploymentManager%DataFile%LogFile %SnrReport)
ファイル	Scenario.rpt
出力内容	シナリオ実行結果
記録方法	ファイルサイズに制限はありません。 なお、Webコンソールから削除できます。(削除する手順の詳細については、「リファレンスガイド Webコンソール編 4.5.2 ログの削除」を参照してください。)

フォルダ	<DPMサーバのインストールフォルダ>%DataFile%LogFile%AuReport (デフォルト: C:%Program Files (x86)%NEC%DeploymentManager%DataFile%LogFile %AuReport)
ファイル	Index.rpt 管理対象マシンのMACアドレス.rpt
出力内容	管理対象マシンの自動更新(アプリケーション自動配信)の実行ログ
記録方法	管理対象マシンごとにMACアドレスで個別に管理します。 各ファイルともファイルサイズに制限はありません。 最大ログ数については、Webコンソールから設定できます。 最大ログ数に設定した値によって、最大ログ数を超えるとIndex.rptの古いログから順番に削除、または古いログから10%を削除します。 最大ログ数の設定については、「リファレンスガイド Webコンソール編 4.7.2. 最大ログ数設定」を参照してください。 なお、Index.rptから古いログが削除される際に削除するログに関連する情報のみを、 管理対象マシンのMACアドレス.rpt から削除します。 また、ログファイルは、Webコンソールから削除できます。(削除する手順の詳細については、「リファレンスガイド Webコンソール編 4.7.4 ログの削除」を参照してください。)

フォルダ	<DPMサーバのインストールフォルダ>%DataFile%JSLog (デフォルト: C:%Program Files (x86)%NEC%DeploymentManager%DataFile%JSLog)
ファイル	CmdSelfJSLog_YYYYMMDD.csv MngUserJSLog_YYYYMMDD.csv MngSelfJSLog_YYYYMMDD.csv ※YYYYMMDDは、日付です。
出力内容	監査ログ(ユーザによる操作/DPMサーバ内部動作)
記録方法	各ファイルそれぞれ当日の日付のファイルに保存します。 各ファイルともファイルサイズに制限はありません。 当日の日付分については、サービス起動中に削除できません。過去の日付分はサービス起動中でも削除できます。なお、作成日から30日を超えると自動的に削除されます。

フォルダ	<DPMサーバのインストールフォルダ>%WebServer%Logs (デフォルト: C:%Program Files (x86)%NEC%DeploymentManager%WebServer%Logs)
ファイル	Browser.log Error.log JSOX-Event.csv LibAPI.log Polling.log Trace.log WebConsole.log
出力内容	Webコンソールの障害情報、トレース、監査ログ
記録方法	Polling.logは、最大1MByte。その他のファイルは、最大10MByteです。 Polling.logは、1ファイルに単調増加となり、JSOX-Event.csvファイルは、2世代管理。(ファイルの最大サイズを超えると、ファイル名がJSOX-Event.csv.1に変更され、元のJSOX-Event.csv.1が削除されます。) その他のファイルは、6世代管理。(*.logがファイルの最大サイズを超えると、*.log.5が削除されます。*.log.nはそれぞれファイル名が*.log.(n+1)に変更され、*.logは*.log.1に変更されます。) 各ファイルとも手動で削除できます。

フォルダ	<イメージ格納用フォルダ>%upload%dpmupload (デフォルト: C:%Deploy%upload%dpmupload)
ファイル	管理対象マシンのMACアドレス_B.zip 管理対象マシンのMACアドレス_B_Error.zip 管理対象マシンのMACアドレス_R.zip 管理対象マシンのMACアドレス_R_Error.zip 管理対象マシンのMACアドレス_P.zip 管理対象マシンのMACアドレス_P_Error.zip 管理対象マシンのMACアドレス.zip 管理対象マシンのMACアドレス_Error.zip
出力内容	バックアップ/リストア/ディスク構成チェック実行時の管理対象マシン側の実行結果
記録方法	管理対象マシンごとにMACアドレスで個別に管理します。 各ファイルの最大サイズは、約310KByte+(処理対象のディスク数×約50KByte)です。 なお、UEFIモードの管理対象マシンの場合は、約460KByte+(処理対象のディスク数×約50KByte)となります。 シナリオを実行するたびにファイルを上書きします。 各ファイルとも手動で削除できます。

フォルダ	%SystemRoot% (デフォルト: C:%WINDOWS)
ファイル	Inst_Dpm_Db.log Inst_Dpm_Dbadmin.log Inst_DPM_Mng.log Inst_Dpm_pgdb.log
出力内容	DPMサーバのインストールログ
記録方法	各ファイルともファイルサイズに制限はありません。 Inst_Dpm_Db.logは、DPMサーバをインストールする度にファイルを上書きし、インストール後にサイズは増加しません。その他のファイルは、単調増加です。各ファイルとも手動で削除できます。 なお、データベースサーバを構築している場合は、Inst_Dpm_Db.logと、Inst_Dpm_Dbadmin.logとInst_Dpm_pgdb.logは、作成されません。 DPMサーバと同一マシン上にSQL Serverを構築した場合は、

	Inst_Dpm_Db.logと、Inst_Dpm_Dbadmin.logが作成されます。 DPMサーバと同一マシン上にPostgreSQLを構築した場合は、 Inst_Dpm_pgdb.logが作成されます。
--	---

■ データベース(SQL Server)

データベースをインストールしたマシンに出力されるログは、以下となります。

フォルダ	<SQL Serverのインストールフォルダ>%MSSQL13. インスタンス名 %MSSQL%Log (デフォルト: C:%Program Files%Microsoft SQL Server %MSSQL13. インスタンス名 %MSSQL%Log)
ファイル	ERRORLOG log_ n .trc (n は数値)
出力内容	SQL Serverのログ
記録方法	各ファイルともファイルサイズに制限はありません。 ERRORLOGは、7世代管理。(SQL Server(インスタンス名)が再起動すると、ERRORLOG.6が削除されます。ERRORLOG. n はそれぞれファイル名がERRORLOG.(n +1)に変更され、ERRORLOGはERRORLOG.1に変更されます。) log_ n .trc は、5世代管理。(log_1.trc～log_5.trcが存在する状態でSQL Server(インスタンス名)サービスが再起動すると、log_1.trcが削除されlog_6.trcが新規作成されます。) ERRORLOGは、削除できません。 log_ n .trcは、SQL Server(インスタンス名)サービス起動中に削除できません。過去ログはサービス起動中も削除できます。

■ データベース(PostgreSQL)

データベースをインストールしたマシンに出力されるログは、以下となります。

フォルダ	<PostgreSQLのインストールフォルダ>%data%pg_log (デフォルト:C:%Program Files%PostgreSQL%9.5%data%pg_log) <PostgreSQLのインストールフォルダ>%data%pg_clog (デフォルト:C:%Program Files%PostgreSQL%9.5%data%pg_clog) <PostgreSQLのインストールフォルダ>%data%pg_xlog (デフォルト:C:%Program Files%PostgreSQL%9.5%data%pg_xlog)
ファイル	*pg_log postgresql-YYYY-MM-DD_ hhmmss .log ※YYYYMMDDは、日付です。 hhmmss は、時刻です。 *pg_clog nnnn (n は数字。ファイル名は数字4桁の連番。) *pg_xlog nnnnnnnnnnnnnnnnnnnnnnnnnnnnnn (n は英数字。ファイル名は24文字。)
出力内容	PostgreSQLのログ
記録方法	各ファイルともファイルサイズに制限はありません。 各ファイルとも手動で削除できます。

■ DPMクライアント(Windows)

DPMクライアント(Windows)をインストールした管理対象マシンに出力されるログは、以下となります。

フォルダ	<DPMクライアントのインストールフォルダ> (デフォルト:C:%Program Files (x86)%NEC%DeploymentManager_Client)
ファイル	DepAgent.log rupdsvc.log DPMTray.log

	GetBootServerIP.log WindowsChgIP.log
出力内容	DPMクライアントのトレースログ 自動更新状態表示ツールのログ DPMクライアントの管理サーバ検索ログ
記録方法	DPMTray.logのファイルサイズは、最大1MByte。その他のファイルは、最大2MByteとなります。 DPMTray.logはファイルの最大サイズを超えると、すべてのログをクリアしてから、新しいログを記録します。 DepAgent.log、rupdsvc.log、GetBootServerIP.log、WindowsChgIP.logは、2世代管理。(ファイルの最大サイズを超えると、*.log.bakが削除され、*.logのファイル名が*.log.bakに変更されます。) 各ファイルとも手動で削除できます。

フォルダ	%SystemRoot%\DeploymentManager\JSLog (デフォルト: C:\%WINDOWS%\DeploymentManager\JSLog)
ファイル	CliSelfJSLog_YYYYMMDD.csv ※YYYYMMDDは、日付です。
出力内容	監査ログ(DPMクライアントの内部動作)
記録方法	ファイルサイズの制限はありません。 当日の日付のファイルに保存します。 当日の日付分は、サービス起動中に削除できません。過去の日付分はサービス起動中も削除できます。作成日から30日を超えると自動的に削除されます。

フォルダ	%SystemRoot% (デフォルト: C:\%WINDOWS%)
ファイル	Inst_DPM_Win_Cli.log Inst_Dpm_Ports.log
出力内容	DPMクライアントのインストールログ
記録方法	各ファイルともファイルサイズに制限はありません。DPMクライアントをインストールする度に単調増加となります。各ファイルとも手動で削除できます。

■ DPMクライアント(Linux)

DPMクライアント(Linux)をインストールした管理対象マシンに出力されるログは、以下となります。

フォルダ	/opt/dpmclient/agent/log
ファイル	depinst.log depagtd.log GetBootServerIP.log LinuxChgIP.log
出力内容	DPMクライアントのインストールログ DPMクライアントのトレースログ DPMクライアントの管理サーバ検索ログ
記録方法	depinst.logはファイルサイズに制限はなく、DPMクライアントをインストールする度にファイルが上書きされます。 depagtd.logと、GetBootServerIP.log、LinuxChgIP.logは、2世代管理。(ファイルの最大サイズ(2MByte)を超えると、*.log.bakが削除され、*.logのファイル名が*.log.bakに変更されます。) 手動で削除できます。

■ イメージビルダ

イメージビルダをインストールしたマシンに出力されるログは、以下となります。

フォルダ	<イメージビルダのインストールフォルダ>%DataFile%\JSLog
------	--------------------------------------

	(デフォルト: C:¥Program Files (x86)¥NEC¥DeploymentManager¥DataFile¥JSLog)
ファイル	ImgUserJSLog_YYYYMMDD.csv ImgSelfJSLog_YYYYMMDD.csv ※YYYYMMDDは、日付です。
出力内容	監査ログ(ユーザによる操作/イメージビルダの内部動作)
記録方法	各ファイルの最大サイズに制限はなく、それぞれ当日の日付のファイルに保存します。 当日の日付分は、サービス起動中に削除できません。過去の日付分はサービス起動中も削除できます。作成日から30日を超えると自動的に削除されます。

■ DPMコマンドライン

DPMコマンドラインをインストールしたマシンに出力されるログは、以下のとおりです。

フォルダ	<DPMコマンドラインのインストールフォルダ>¥Log (デフォルト: C:¥Program Files (x86)¥NEC¥DeploymentManager¥Log)
ファイル	DPM_Trace1.csv
出力内容	監査ログ(ユーザによる操作/DPMコマンドラインの内部動作)
記録方法	DPM_Trace1.csvは、最大10MByte。 10世代管理。(DPM_Trace1.csvがファイルの最大サイズを超えると、DPM_Trace10.csvが削除されます。DPM_Tracen.csvは、それぞれファイル名がDPM_Trace(n+1).csvに変更されます。) 手動で削除できます。DPMコマンドラインを実行中は削除できません。

付録 F 各コンポーネントのバージョン確認方法

■ DPMサーバ

Webコンソールの画面下部(フッタ)を確認してください。

Webコンソールの起動、およびログイン方法については、「インストレーションガイド 5.1.1 Webコンソールを起動する」から「インストレーションガイド 5.1.2 ログインする」を参照してください。

例)

DeploymentManager 6.6-XXXXX
(XXXXXには、数値が入ります。)

■ DPMクライアント(Windows)

- 1)「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「プログラムと機能」を選択します。
- 2)「表示」メニューから「詳細表示の設定」を選択します。
- 3)「詳細表示の設定」画面で、「バージョン」にチェックを入れ「OK」ボタンをクリックします。
- 4)「DeploymentManager」に表示された「バージョン」を確認してください。

例)

6.60.000

■ DPMクライアント(Linux)

以下のコマンドを実行して、表示されるバージョンを確認してください。

```
cd /opt/dpmclient/agent/bin  
depagtd -v
```

例)

DeploymentManager Ver6.6

■ イメージビルダ(リモートコンソール)

- 1)「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「プログラムと機能」を選択します。
- 2)「表示」メニューから「詳細表示の設定」を選択します。
- 3)「詳細表示の設定」画面で、「バージョン」にチェックを入れ「OK」ボタンをクリックします。
- 4)「DeploymentManager (イメージビルダ)」に表示された「バージョン」を確認してください。

例)

6.60.000

■ DPMコマンドライン

- 1)「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「プログラムと機能」を選択します。
- 2)「表示」メニューから「詳細表示の設定」を選択します。
- 3)「詳細表示の設定」画面で、「バージョン」にチェックを入れ「OK」ボタンをクリックします。
- 4)「DeploymentManager (DPMコマンドライン)」に表示された「バージョン」を確認してください。

例)

6.60.000

■ PackageDescriber

- 1)「スタート」メニューから「コントロールパネル」→「プログラムと機能」を選択します。
- 2)「表示」メニューから「詳細表示の設定」を選択します。
- 3)「詳細表示の設定」画面で、「バージョン」にチェックを入れ「OK」ボタンをクリックします。
- 4)「DPM PackageDescriber」に表示された「バージョン」を確認してください。

例)

6.60.000

付録 G 用語集

■ アルファベット順

Deploy-OS	管理対象マシン上で動作するDPM独自にカスタマイズしたLinux OS(カーネル)です。バックアップ/リストア/ディスク構成チェック時に管理サーバから管理対象マシンに送付され、管理対象マシンのメモリ上に展開されます。 なお、DHCPサーバを構築せずにDPMを運用する場合は、ブータブルCDに含まれています。
DHCPサーバ	DHCP(Dynamic Host Configuration Protocol)とは、IPアドレスを動的に更新するためのプロトコルです。 DHCPサーバは、DHCPで設定情報を提供する機能を持ったマシンやネットワーク機器のことを指します。 DPMでは、管理対象マシンがPXEブートを行う場合や、ディスク複製OSインストール時にIPアドレスの割り当てを行うために利用します。
DPMクライアント	DPMのコンポーネントの名称です。管理対象マシン上で動作して、DPMサーバとデータの受け渡しを行います。管理対象マシンの動作制御(シャットダウンなど)や、パッケージの適用/未適用などの情報送付を行います。
DPMコマンドライン	DPMのコンポーネントの名称です。コマンドラインから管理対象マシンの状態確認やシナリオ実行などの処理を実行します。
DPMサーバ	DPMのコンポーネントの名称です。Webコンソールの操作や、DPMコマンドラインからの指示により管理対象マシンへ処理を実行します。
ESXi	VMware社の仮想化ソフトウェアです。
Express5800シリーズ	NECが発売している企業向けワークステーション・サーバです。
Hyper-V	Microsoft社の仮想化ソフトウェアです。
IIS	Internet Information Servicesの略で、Microsoft社が提供するインターネットサーバ用ソフトウェアです。
LANボード	LAN(Local Area Network)接続用のボードです。NIC(Network Interface Card)、LANアダプタと呼ばれることもあります。
MACアドレス	Media Access Control addressの略で、各LANボードに固有のID番号です。
OSクリアインストール	Red Hat Enterprise Linuxを管理対象マシンに細かい設定をしながらインストールする機能です。
PackageDescriber	DPMのコンポーネントの名称です。パッケージを作成して、パッケージWebサーバへ登録するツールです。
PostgreSQL	オープンソースのオブジェクトリレーショナルデータベース管理システムです。DPMで管理するデータを格納します。
PXE ブート(ネットワークブート)	Preboot eXecution Environment bootの略です。 LANボードに搭載されているPXE(ネットワーク規格)を利用した、ネットワーク経由でプログラムを起動するブート方法です。 DPMでは、管理対象マシンの検出、バックアップ/リストア/ディスク構成チェック、パッケージの配信を行うために利用します。

SigmaSystemCenter	仮想環境を含めたプラットフォームの統合管理を実現するソフトウェア製品です。DPMを同梱しています。
SQL Server	Microsoft社が提供している、リレーショナルデータベースを構築/運用するための管理ソフトウェアです。DPMで管理するデータを格納します。
Sysprep	Microsoft社が提供するWindows OSを展開するためのツールです。
VLAN	物理的なネットワーク構成とは別に、論理的なネットワーク構成を構築してネットワークを複数のブロードキャストドメインに分割する技術です。
Webコンソール	管理対象マシンの状態確認や、管理対象マシンへの処理の実行を行います。
WOL(Wake On LAN)	LANで接続されたマシンを他のマシンからネットワーク経由で電源ONする機能です。
XenServer	Citrix社の仮想化ソフトウェアです。

■ 50音順

イメージビルダ	パッケージ、ディスク複製OSインストール用のディスク複製用情報ファイルなどを作成し、管理サーバに登録します。
イメージビルダ(リモートコンソール)	管理サーバとは別のマシンから使用する場合のイメージビルダを意味します。
インストール媒体	DPMが同梱されている媒体を指します。
仮想マシン	仮想マシンサーバ上に仮想的に実現されたマシンを指します。
管理サーバ	DPMサーバがインストールされている物理的なサーバを意味します。
管理対象マシン	DPMの管理対象となるマシンです。「コンピュータ」、「クライアント」または、「クライアントコンピュータ」と表記する場合もあります。
ゲストOS	仮想マシン上で動作するOSのことを意味します。
自動更新	管理対象マシンが、あらかじめ指定されたタイミングで管理サーバを参照して、未適用のパッケージがあった場合に配信要求を行います。また、パッケージを受け取った後に自動的に適用します。この機能を自動更新と呼びます。
自動更新通知	管理サーバに緊急度が「最高」のパッケージが登録された時や、Webコンソールから管理対象マシンに自動更新通知発行を行った時に、リアルタイムに自動更新を行うために管理サーバが管理対象マシンへ発行する通知です。
自動ダウンロード	あらかじめ管理サーバ側で指定した時刻に「パッケージWebサーバ」から新規作成されたパッケージを管理サーバへ自動的にダウンロードする機能です。
シナリオ	BIOS/ファームウェア用フロッピーディスクのイメージ配信、OSクリアインストール、サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストール、バックアップ/リストア/ディスク構成チェックなどの実行に使用する設定ファイルです。
ディスク構成チェック	バックアップ/リストアの実行前に事前にディスク構成を確認するための機能です。バックアップ/リストア時に指定するディスク番号を確認できます。
ディスク複製OSインストール	Sysprepツール(マスタイメージ作成ツール)と、DPMのバックアップ/リストア機能を組み合わせたマシンのクローニングを行う機能です。
バックアップ/リストア	ディスク単位またはパーティション単位でのディスク内のデータをバックアップ、または、復元する機能です。
パッケージ	パッチ、アプリケーションとパッケージ情報ファイルを合わせたものを指します。イメージビルダ、またはPackageDescriberで作成します。

パッケージWebサーバ	パッケージを保存するサーバを意味します。管理サーバが複数台存在する場合に設置して、パッケージを共有できます。HTTPプロトコルでアクセスできる必要があります。
パッケージ情報ファイル	パッチ、アプリケーションの基本情報、実行情報、適用OS情報、依存情報と識別情報を保存するファイルを指します。 イメージビルダ、またはPackageDescriberで作成します。
パッケージ登録	PackageDescriberで作成したパッケージをパッケージWebサーバにアップロードすることを指します。 また、PackageDescriberで修正したパッケージをパッケージWebサーバに再アップロードすることをパッケージ再登録と呼びます。
パッチ	Microsoft社が発表するWindows OS用のサービスパック、HotFixなどを総称してパッチと表記します。
ファイル配信	管理サーバ上のファイルを管理対象マシンの任意の場所にコピー、または上書きできる機能です。また、Webコンソール上で管理対象マシンのファイル/フォルダの詳細情報の参照や、ファイルの削除が行えます。
フルセクタバックアップ	ハードディスク上のすべてのセクタをバックアップすること指します。
ホストOS	仮想化ソフトウェアが動作する基盤となるOSを指します。
マスタイメージ	ディスク複製OSインストールを行うときの複製元となるマシンのディスクイメージです。
マスタマシン	ディスク複製OSインストールを行うときの複製元となるマシン。
有効セクタバックアップ	ハードディスク上の有効セクタのみをバックアップすることを指します。
リモートアップデート	サービスパック/HotFix/Linuxパッチファイル/アプリケーションのインストールを指します。
ローカルリストア	DPMで採取したバックアップイメージファイルをDVD(CD)媒体に格納し、その媒体を使用して、管理対象マシンのみでリストアを行う機能です。

付録 H 改版履歴

◆ 第1版(Rev.001) (2017.04): 新規作成

免責事項

本書の内容はすべて日本電気株式会社が所有する著作権に保護されています。

本書の内容の一部または全部を無断で転載および複製することは禁止されています。

本書の内容は将来予告なしに変更することがあります。

本書に記載の URL、および URL に掲載されている内容は、参照時には変更されている可能性があります。

日本電気株式会社は、本書の技術的もしくは編集上の間違い、欠落について、一切責任を負いません。

日本電気株式会社は、本書の内容に関し、その正確性、有用性、確実性その他いかなる保証もいたしません。

商標および著作権

・SigmaSystemCenter、WebSAM、Netvisor、iStorage、ESMPRO、EXPRESSBUILDER、SIGMABLADEは日本電気株式会社の登録商標です。

・本書に記載されているその他の会社名、製品名は、各社の登録商標または商標です。

商標および著作権の詳細は「ファーストステップガイド 商標および著作権」を参照してください。